

どにてまかで給ひぬ。さしわけたりし月影の、行くへなげの事にもあはれにおぼされて、尋ね聞き給へば、少將の内侍といふ人なりけり。けだから聞ゆる人ぞかすと聞き合せ給ふもをかして、

「雲にもかよふ心のありければめぐりあひてもかけならばや」などあるを、待ち見る心よろしからむやは。御返事には、

「月のゆく雲をさしておもひしもながめしほどのあはればかりぞ」。手もいみじう清げに書きなれて見所あるに、けはひなどもくからずにはひ多かりしかなとおぼすにも、大貳のむすめの「などむすぶ手の」など答へたりしけはひなどこめかしうらうたげなりしはさばかりのなみには類ひあらじと覺し出でらるれば、たよりを尋ねつゝ御せうそこは絶えざりけり。今は唯この蟹のとまやをねぬよのすみかとおぼしはてつゝ、つごもりがたに姫君三つになり給ひければ、御袴着に寢殿にうつし奉り給ひにし、おもてに佛をすゑ奉り給ひて、その御かざり目も耀くばかりしつくし給ひつゝ、中に御ゐどころは北南をして、薄色の織物のみ几帳、おなじ織物のみ几帳立て渡して、いみじうけうらにまつらひつゝ、ひんがしおもてに、姫君の御方は、殊更ちひさき御調度どもにて、ひあをそびのやうにまつらひて、御めのと二人ばかり、なべてならず思ひかしづき聞え給ふさまのこちたきを、大將もうへも嬉しとおぼして、姫君の猶あるまじきすまひと深くおぼし入りたるを、いといみじうむつかり諫め聞え給ふを、我が御心から、はかなうもつらうもあらぬ世を心より外に歎かしう涙こぼれて覺

しつゝも「今はいかし給はむ、かくこそはありつきもてなし給へ」と誠に亂れがはしうにくからぬ御氣色見奉り給ふまゝに任せて渡り給ふ。北西の對に、人々の局皆まつらひて、中納言殿の御まやうぞくの事も何も、すべてさながら少將のめのとにあづけまらせ給ひて、朝夕さしならびたるやうにて絶えず引き隔て給ふ。御几帳なども押しやりて向ひ聞え給ふに、見どころ少し後れ給へらましかばいとほしからまし、かゝる様にてしも誠にさまとになまめかしう美しくしげなる御有様類ひならめでたければ、見苦しう見え給はずかし。夜も唯おましを並べて、昔今の事どもを書き盡し、泣きても笑ひても聞え盡し給ひ、今行く末も同じにあすの上にといふ限なき御契をつくし給ひつゝ、ほとけの御日には、月ごととにきやうほとけ供養せさせ給ふ。ふげんかうあみだの念佛などかゝる方の御いとなみ諸共にし給ひ、誠にこれこそめうしやうこんの御契なめれと、かうてしもめでたくあらまほしきを、大將も胸あき心地おちぬ給ひぬ。親しきゆかりなりなど、あなづらはしき御心もなく、式部卿の宮のあまりにおよびなく、まち遠にのみ胸潰れてしづ心なきに、いと安らかにありつき顔に別るゝ御心もなきを、この世もかの世も思ふさまに深き御心ちぎりの中と見えたるを嬉しき事におぼし喜ぶ。侍ふ人々も名殘なうひさうつろひにしかど、いとなかなかあらまほしき御有様と思ひかへしつゝ、參れど、宰相の君のそのほど、つゆも動きなかりけむ心ばへは哀にありがたきものにおぼして、殊にいとやんごとなきものにし給ひて、べちにとりはなちて姫君の御はしるゝに添へ奉り給へり。山かたかけ池に造りかけて、えもいはぬ堂のめでたき、べちに立

てそへて奉り給はむ事を覺し急ぎて、ある時には、有明の月のいと明さに諸共に佛の御前に渡り給ひて、こやおさして行ひ給ふ折は、明くるも知らで過ぐべきなからひを、我も人もいくほどの年も積らぬに、こなたのいとなみに、いみじき事を思ひ契りすぐすもあさましうあはれに悲しうのみ見奉り給ふ。女も暫しこそまばゆくかたはらいたさすまひといとはしくわりなくおぼされしが、いみじうとも我が心ひとつに親と申すとも、その御かげにはいかでかかう思ふまゝなるくどくの事ぞと思ひよらしを、行ひを心にしめて内々は心のみだるべうもあらず、ひとつ御心に後の世の事をおぼしつとめたるは、あはれに嬉しき友にあひたる事とおぼし知られたれば、今はあながちに隔てむすば、れ聞え給はず、うちとけ見馴れ聞え給ふ。少しかたはある事もまじらず、御かたち有様の見所多くすぐれ給へるを始め、心ばへもいとらうらうしう思ひやり深く、何のふしもいふかひある御さまなどわかぬ事なきを見るまゝに、例ざまの世の常にてあらましものをと口惜しう悲しけれど、さばれ、猶我は例の人にて世にあらむとぞ思ひし、よのつねのなからひならむには、我が世づかぬ有様おろかなりなどおのづから恨みらるゝ折もあらしに、行ひもいとけたいなくせずなどして、後の世の思ひ紛るゝ事にてぞありなまし、これはいかなりとも、目の前の恨み、我も人もあるべくもあらず、かゝるにしもぞ、あはれまさりぬべきわざなるべき、大方にはいつととも世の有様身の上をもうち語らひ合せつゝ、過ぐすに、あく世なくたづき出で來たる心地して年ごろいみじう乳母たちもてなし、かど、限あれば唯一人寝たりしは寂しう心ばそかりしを、こ

の世もかの世も思ふさまなる心地し給ひて、人々の御恨をも歎をも皆さましめやすくさる方にあらせつけ奉り給ふ。中將の乳母は、今は中納言殿の事をば知らで若君の御かしづきのみまたなくして、いさゝか外にわかるゝ事なくありければ、いとうしる安うて、宮も近さほどなれば日々に渡り給ひつゝ、見奉り給ふ。或時は夜も立ちとまり給ひけり。およすげ給ふまゝに限なきものにおぼしわれも見給ふ。こ姫君の御有様にはつゆたがひ奉り給はず、この世のものならぬに、あはれに悲しう片時も見放ち難けれど、猶暫し人に知らせじとおぼして隠し置き奉り給へりけるなりけり。母上もいとゆかしうおぼして御かたがへに渡り給ひて見奉り給ふ。おろかに見奉り給はむやは。これを我がもとにて姫君と左右にあそばせて見まほしうわかずおぼえたれど、猶思ふやうありてこめ置き奉り給へり。尼姫君にはこの世の事もかの世の事も残りなく、長きねがめに聞えつくい給ふなかに、かうやらけんの後のことばかりぞ心の中に深く残し給うて、菊見給ひし夕の御かたちさんの音ばかりなどはいみじう聞き所ありて語り給ふべき物語なれど、まづ先に立つ涙につゝまれて、え言ひだに出で給はざりけり。まばしは上や姫君女君などの、あはれに珍しう見奉り給ふに、おのづから紛れ物騒しう心あわたしきやうなるに、忘らるゝ事はなきながら紛れ過ぐし給へるを、よろづ今はと心苦しき思ひなくありつきのとまり行くまゝに、又は顧みるまじきぞかしと思ひ出でらるゝ戀しさの、空しきそらに満ちぬる心地のするまゝに、さばかりとめられしになどて今暫し立ちとまりて、今一度のおふせやあると待つべかりけるものを、大方はさすがにさ

しも放たずなつかしうもて奇し給ひしものを、それにつけても忍び難う身にわまりて、けしきもり見え知らぬ世の世界の人のさならぬ事、そら恐しかりしに、ささきもみこも我が身のためもいかばかりなる世のみだれかあらむと思ひしかば、ゆくりなうこそ離れしも、わかず戀しう思ひわびて、後のことつけ給ひしふみ箱を取り出でたれば、取る手もうつるばかりなる沈のふみばこの大きやかなるを、やをらわけて見れば、からの色紙をわまたつぎて、

「やうやう物思ひしられて侍りにしよはひより、日本にとゞめ置き奉りにし御行くへ、いかおはしますらむと安きそらなく思ひ出で奉り侍れど、風のつてにも御有様聞かやうも侍らで世にあるかひなく、月日のひんがしより出で給ふを見つゝ、母の御形見とはこの月日のみこそおはすらめと、涙を流して拜み奉りても、いかなるささきの世の報にて同じ世にぞ聞きかはし奉らず、遙なる雲を隔て、我も人も、世におはします有様をも、知り知られ奉らずなりぬらむ。雲をへだて山を隔て、もおのづからわひ見奉らむ事の頼だに猶侍らば、ながらへ過ぐす身の行く末も嬉しかるべきに、いつをいかにと頼むともなき有様にて、今まで過ごし侍りぬる命のみこそうらめしきわざに侍れや。さすがにむげにだにおぼえさせ給はず侍らばさてもあるべきに、今はとて別れ奉りし曉に、今日を限に思ふべきぞよと、泣く泣くのたまひし御面影、片時身を離るゝをり侍らぬまゝに、唯この御有様聞かせ給へと、佛神を念じ侍るしるしにや、ひの本のひじり渡りまうで來たりしに尋ね聞えしかば、親しう知り聞えたるよし語り侍りしかば、夜晝念じ奉り

し佛の御しるしなめりと喜び思ひ給うて歸り侍りしに、委しく聞えさせし御文は、確に御覽じけむや。その後幾程の年をも隔てずこの中納言のわたりにて侍るめるは、おのづから聞かせ給ふやうも侍らむ。おのれが特ち奉りて侍る御子のささきの世の御子にておはしましけるなり。身をかへ給へるさま見奉らむとて渡りまうで給へり。ひじりにつけて聞えし御返事も侍らねば、世にもおはしますさすなりにけるにやと悲しういみじうなむ。浮きたるべきたよりに侍らねばよろづ聞えさせ侍るなり。その世の人この國に渡る事絶えて久しうなり侍りにけるを、始めて繁く見え侍るも、夜晝念じ侍る佛のゑるしとなむ慰め侍るも、いとなむ悲しうこそ。この世の後の位も身にはすべてやくなうおぼえ侍る。唯身をかへてもおはしますすらむ同じ世の本草ともならまほしうのみ侍れば、命もつゆ惜しうも侍らず、中納言尋ね聞え給はむ、みづから對面し給ひてこの世の有様などこまかに聞え給へ。今は世を背かせ給ひにければ何か耻しうなども忍ばせ給はむ。又物のたぐひのおはしますなるやうに、ひじりの語り侍りしもいとゆかしうおはれに心細うおはしますらむ。御身に添ひておはすらむも、おはれにうらやましうも嬉しうも侍るや。男に物し給はましければ若しこの世に渡り給ふ事もやと待ち侍りなましを、それさへいみじう口惜しう心憂く、この中納言、宮をよのつねならすいみじう思ひ聞えよせ給へるゆかりに、ゆめゆめおろかには侍らじ。よしなうなどおぼし疑はず、おのが身をかへて渡りたるとおぼしなしてよろづを頼みおぼしめせ。こゝにもさなむ頼み侍る。つゆ

こと人とおぼしなしそ」
など書き給ひて、

「この世にもまたその世にもあらじかし、かゝる親子の中のちぎりは。人の身をうけ侍りけるも、かひなくいとはしくこそ。夜晝思ひ侍りて雨風の音き、花のちり葉の落つるを見侍るにつけても、いかなる所の國に、いかにしてかは過ぐさせ給ふらむと思ふより外の事侍らず」

と書き給へるを見るに、すべてかきくらし、いとゞしき涙は我が身さへ流れいぬばかりに物もおぼえず、我を疎からず頼みおぼし召すべきよしを、返す返す身をかへたるとさへおぼせと書かれたるを見るも、わはれに悲しなどいふも譬へむ方なし。さばかりこの世ならずめでたかりし御身にかはりたるをおぼせとのたまへる我が身さへもいみじうぞおぼさるゝや。女はらからの又あるなめりと心得て、ほそやかに卷きたるをわけたれば、これぞ妹の君の許へなるべき。

「誰とかは知り給ふべきと思ひ侍ると、ひじりの語り侍りしより、心にかゝらせ給ひてなむ。身を變へざらむ限はあひ見奉るべき思ひの絶えで侍るこそ心憂く世にまらずおぼえはべれ。

まらずとも吹きくる風のおとなひにははす花の香をばたづねよ」とて、

「かの中納言のゐて渡るちごは、思ひすつまじきやう侍れば哀なるを、若し見渡り給は

い、なつかしうおぼせ」

と書き給へるを、身にまみかへり、哀に悲しとはよのつねなり。もとのやうにふんじかためて、名残も胸せきわけて堪へ難う、唯今も鳥になりてかの世に飛び行きてかうやうけんに参らまほしき事限なし。とばかりためらひて、「もろこしに渡りしひじりはいづこにある」と尋ねさせ給へば、「吉野のあなたに三吉野といふ所に堂立て、そこになむ籠り給ひける」と申せば、まづかのひじりに逢ひてこそ尋ねめとおぼして、女君に「もろこしより渡りて侍りしひじりに、みこの、傳へよ確に人づてならでとのたまひし御せうその侍るを、吉野山の奥にて侍るなれば、みづから尋ねとらせ侍らむとてなむ、立ち返りにもと思へども、おのづから日頃経る事も侍りなむ。もろこしまで思ひ侍りにし心なれど、かやうに見奉りてはしはしのへだて、うちつけに覺束なうおぼえ侍るかな。そのほどまきれなく、御行ひなどせさせ給へ」とこまやかに聞え置き給ふまゝにも涙のうき給ふめるを、女君もわはれにおぼえ給ひて「かやうに世を反きなむ人は、尋ねまほしかんなるひじりのすみかにも侍るなるものかな。

「そむきてはよし野の山の跡絶えてうき世を見じとおもひしものを」とてうち泣き給へる、いと哀げにめでたきを、我ならざらむ人は後の罪、佛のおぼし召さむ所など、更にたどらざらまし、我ながらありがたう心はすまはしてたりかしと思ふも、かつは又限なく、思ふはかの事おぼえぬにやあらむ、

「君すまば我も吉野にあと絶えてかばかりも世にめぐらざらまし。年ごろはうへ一人を

ほだしに思ひ聞えつるを、今はそれよりも思ひ添はせ給ふこそこの世を背きやるまじき契にやと心憂けれ」など、かりの御ありきとおぼせども、心深く立ち離れにくげによるづを聞え置き給ふ。世に知らず心深げなり。わが君の御許に立ち寄り給ひて、暫しの程も覺束なき事をかへずかへすのたまひ置きて遊ばしつゝ、いでわはれ、この事を我が方さまにと書き置き給へる事、思ひ出づるも涙とまらさず。上にも暇申し給へば「又いつちおぼし立つぞ」とうち泣き給へば「もろこしに渡り侍らむやは」とうち笑ひ給へば「いでや御心さまを知らず。かく人に似ぬ御心のあまりなるが心づくしにわびしきを、いかで見ずもなりなばや」と泣き給ふを、いとほしとことわりに思ひ聞え給ふ。『世の中の深きためしには、吉野の山と名に流れたるよりも猶奥なるみ吉野といふ所なりければ、もろこしに渡りしはさるべき人あまたしいふかひなく漕ぎ離れにき。忍びやかに、人すくなにて分け入り給ふほど世に知らず物心ほそきに、頃は三月の二十日のほどなれば、雪こそ積らね、谷の底などには猶うち消えとまりつゝ、都には皆青葉になりにし花の梢今盛に開け、散りのこれも風知らせむ惜しげに見え渡さるゝに、もろこしの事のみおぼしやられて、

「戀しさはおくれざりけり三吉野の山よりふかくおもひ入れども」。かくておはし着きたれば、山の方に堂いとをかしう立て、我が居所は廊たつものをいとかりそめに造りて住ひたる有様、とりのねだによのつねなるは聞ゆべうもあらぬ世界に、吳竹を隔て、ぞ人の家は見ゆる。誰かはかゝる住ひする人のあらむと見つゝ、入り給へば、ひじり思ひもよらず、あさ

ましげに思ひ驚きたるさま限なし。でしどもなど立ち騒ぎ、きよめし、よきおましなど参りて入れ奉りけり。ひじりは年六十ばかりにて、もと、人がらは口をしききはははらざりければにやなげのおいびとも見えす、物きよげにさらほひて賤しからず、住ひなどきたなげならずしちして、堂どもあらまほしげなり。まづうち守り奉りて、佛などの變じ顯れ給へるにやと見驚かれて、うち泣きつゝ、年比の御物語申し、我ものたまはせて、「もろこしの三の宮の母后、しかじかのひじりに御せうそこ聞えしを、いかゝなりにけむ。その人はまだ世にやおはすると、そのひじりに逢ひ奉りて必ず尋ね聞えよとのたまはせて、御せうそこ傳へ給へるを、歸りまうで來しすなはちもえたづね出し奉らず。又いと物騒がしく紛はしき事どものみ侍りて、今までになり侍りにけるを、からうじてなむこの山におはすると聞きつけ奉るまゝに、喜びながら」などのたまふ。ひじり「かの國に侍りしほどあんない申し、かば常に召しつゝ、なくなくこの母宮の御事をのたまはせて、いみじうねんごろに仰せごと侍りて、御せうそこつけおはしましたりしは確に傳へ申し侍りき。いかなるたよりしてこの御返りを申さむと悲びおぼしたれど、いづこのたよりにかは侍らむ。渡りおはしますよしをそのほど、いうけ給はらで、この御返り事を告げ申さずなり侍りし事を、いとほしう想ひ給へりしに、いと嬉しう侍る事かな」と答へ聞ゆ。「いづちにかものし給ふ」と問ひ給へば、「このひんがしになむものし給ふ」といふに、驚き給ひて、「いとさしも深きすまひをばいかにし給ふぞ。本は何人のいかなるついでに、さるよに珍らしき契はものし給ひけるぞ」と問ひ給へば、「はんだ

いはおのづから聞かせ給ふやうも侍らむ。かんつけのみやと申し、人世におはしき。身のざえなどこの世には過ぎていとかしこうおはせし程に、おほやけの御ためすぐならぬ愛をおひ給ひて筑紫に流され給ひけるに、母もおはせざりけるむすめ一所おはしましければ、とゞむべき方なくおぼしむびつゝ、強ひてくだり給へりけるを、かしこにて父宮うせ給ひにければ、心はかなきめとの一人につきて、筑紫におはしける程に、後の父の大臣は、公の御使にて渡り物し給ひける程に、いかゞありけむ、乳母の入れたりけるとかや。かの后は生れ給ひて五才にてなむ、もろこしにゐて渡り給ひける。女かよはぬ道をいかゞせむと歎き悲みて、海の龍王にいみじく祈り行ひ給ひける夢に、これはかの國の後なり、疾くゐて渡りねと見て、渡り給ひにけるなり。そのころ母方の御をぢに、兵衛の督と聞えける人の、大貳になりてくだり給ひにけるが、もろこしへ渡りし姫君の母を尋ねとり聞えて、ゐてのぼり奉り給うけるに、帥の宮の忍びていとねんごろに通ひ渡り給ひけるを、おのれいと世に知らず心愛さちぎかなしき身なれば、よのつねの人に見え知られむと思はざりつと泣き悲みて、あまになりて隠れつゝ逢ひ給はざりければ、この宮も、行くへも知らず歎きて止み給ひにけり。そのほどにはらまれ給ひにけるは、尼になりて後生れ給へり。女にてもものし給ふなるべし。心憂しとても愛執の煩惱離れがたきものなれば、紛るゝ力なき山の隅にも、見知るべき人なければ身に添へておはしますなるべし。その君生れ給ひて後、ひたぶるにかしらおろして、法師のやうに行ひて、おのれをたのもしきものにおぼえて、この山に堂立て、籠り侍りにしほど、我

も猶世にかくてあらじと思ふなりとて、入り給ひにしなり。故宮の御世に親しう参り通ひ侍りしを、後の御せうそこ傳へ申し侍りにしより、いと頼みおぼえたるもわはれにぞ見給ふる。さるべき人と申せどいとかう世に類ひなき契おはするも侍りけり。されば後のかの國に、かざりすゑられたまへる御おぼえありさまなどは御覽せられけむ、いとみじう候ひきな。さる御むすめのかげにもえ隠れ給はず、ささの世のさるべきものゝ報いにこそはとぞ見えさせ給へる。この世は口をしうおはしける人の、後の世はしも必ずかなひ給ひなむとす。女の身にてはいとみじうかしこう行ひつとめてさえなどもいと深うぞ物し給ふべかんめる」など、聞き所多く語り聞かせ奉るを、げにこの世に珍しくありがたき御契は、返すがへすそむきても、ことわりなりける御身かなと聞くもいとわはれにて「わざとかく尋ね参りたるを、遠うものし給はましかば又とかく尋ね参らましも心もとなからましを、いと嬉しかりけるわざかな。さらばかくなむ参りたるとて、この御消そこを奉り給へ」とて、取らせ給へり。たけの中に通路ありければ、ひじりのこのふみを取りてもてまうでぬ。君は偏にうち行ひ給ひて、今宵夢にもろこしの後の見え給へりければ、片つ方の心にはおぼしやりつゝ行ひ暮し給ひけるに、かゝる事などうき聞きつけ給へる心ち、夢かなにぞと胸つぶれて、この御せうそこをわけて見給ふに、わはれに悲しともよのつねなり。かばかりおぼしすてはてにたる世の思ひ、この御せうそこ見給ふに、猶さめがたげにおぼされて、何のちぎりにて、さすがに親子とは結びながら聞き通はず事だになく、つばくらめのあらむ別のやうにては、別れに

しぞなどおぼし續くるもさきの世までいみじううらめしき御契なり。ひじり「いとやんど
なく、おぼろげの人の思ひよるべうも侍らぬ山路を、みづから尋ね入り給へる御志よのつね
にはわりぎめるを、こなたに入れ奉り給ひてつぶさなる事の旨を聞しめし申させ給はむや
よくさふらはむ」と聞ゆ。思ひ限りたるすまひなどの草のいはり耻かしきさまなるを見え
られ奉らむも、世を隔てたる事とはいひながら、忝き御かげどもの御おもてぶせにてもある
べきかなと、憚らばしうおぼせど、この御文にうとうとしく思ひ聞えず、みづから何事も聞
えよとあり、身を變へたるとさへ思ひなせとあるはさへべきやうこそはわらめ、我が心もわ
まりこの世の外になりけるにや、ものゝ耻かしきもおぼえず、かたへはこの御せうそこの
つたへによろづ忘れ給ふなるべし。みなみおもてだつた、とかくひきつくるひて、「さらば
しるべし聞え」とわれれば、「かうかうおはしましなむやとなむ侍る」と申す。おぼしやるか
たなく、遙なる御名残のあたりと思ふにはいみじうなつかしう心もとなくおぼしつるに、悦
びつゝ、まうで給ふ。たそがれも過ぎて、山陰は何のあやめも見わかぬど、たゞ人の御ありさ
まうちかをるに物恐しきまでおぼえ給ふ。みすの中に入れ奉りて對面し給へり。おのおの御
心のうち類ひなき人の御ゆかり、かたみに聞え出づべき言の葉もおぼえ給はざりけり。から
うじて、とかくおぼしえづめて、「身の有様は聞えさせずとも、おしはからせ給ふらむ。かや
うに人にきかれ奉るにつけても、世づかず、いかに待ち聞きおぼさるらむと、耻しう心憂く
侍れども、さすがに又背かれぬこの世のやみに侍れば、ひじりの傳へ申し侍りにし後は、あ

はれにいぶせき心ちし侍りつゝ、かけてだに聞き通ひ侍らざりし折よりも、なかなか物思ひ
まさられ侍るに、この御せうそこにいとゞしき心ちし侍りて、とりの聲だに聞えぬ山かげ
に、思ひもかけぬ心ちし侍るに、すべてえこそよろづわかれ侍らぬ」とうち泣きて、
「うつゝにはあらぬ事とぞまち見つる夢まぼろしかかげるふかこは」とのたまふけはひ、
かばかり深き山に世を捨て離れたる山ぶしとは夢の中にもおぼえ給はず。まだいと若やか
になつかしうにはひあるほど、「雲居のほかの人の契は」とのたまひし人の御けはひに通へ
る心ちするに、いとゞ涙もとゞまらず。

「うつゝとも夢ともえこそ名のられぬ尋ねるほどのこの世ならねば。もろこしのみこを
見奉るべきゆゑ侍りて遙に渡り罷りつゝ、おはれに悲しき事をのみ見聞き侍りし中に、今は
とてこなたへ罷り歸りはべりしほど、かうやうけんはめしありて、さるべき人々をもおきな
がら、おぼろげの人渡りくべくもあらぬ世に渡りきたる志よのつねならじを、猶必かへりて
も思ひいではよろづへだゝりその御ゆくへ知らぬが世にあるかひなく心憂く思ひ歎かるゝ
を、必ず必ず尋ね聞えて、この御消そこを傳へ聞えさすべきよし、みこも后も、かへすがへす
仰事侍りしかば、これより深き御すまひなりとも必ず尋ねまゐるべきものと思ひ給へられ
しかど、かやうにみづからなど聞えさせ侍りぬるは、猶夢の心ちせられてなむ」とて、仰せら
れしさまなどおはれに心深げに語り出で給へるを聞き給ふに、猶さらにさらにはおはれ忍ば
む方なし。世に知らずめづらかに侍りけるすくせを聞かせ給ひけむ御心のうち耻かしくも

思ひ聞えさすれど、今はかゝるひたぶるの山ぶしだちて侍る身には、この世の思ひはちなどは思ひ侍るべきにもわらずかし。御せうそこも必ず頼み聞えさすべきやうに侍るめるも、さるべき故こそ侍らめと思ひ給ふれば、猶生きめぐらひ侍らむほどは心をかけ頼み聞えさすべきにこそは「などのたまふも残ある心ちして、若うてはをかしうなどもし給ひけむかしとおぼえ給ふにも、げにいと世に似給はざりける御有様かなと、心おとりはせであはれとのみ思ひやらる。」道の程の遙けきなど、おぼろけにては思ひ立つべくも侍らざりければ、かく参りて侍らふ序に、しばしこのひじりのむろに侍らひて御とのゐなどもと思ひ給ふれば、心のどかに何事も」とて立ち出で給ふほど月さし出でたり。とかく見めぐらせば峯にかたかけて松原のまたにさゝやかなる寢殿たつ物こそ北の對にや一つあれど、いみじう荒れまどひて人聲もせず。深き山といへどおのづから人の住むやうもわりなむを、さすがにいみじく心ぼぞくて、山よりたぎり落つる瀧の音耳に近きに、松風の吹き合せたる心ぼそさはいふかぎりなし。とばかり打ち見めぐらすに、身にまむばかりすごうさびしきに、いかでかく過ぐしたまふらむ、かうやうけんにいみじき清らさを盡して我が身はいつかれおはすれど、げにかひなきわがなりや、只今もこんすてうといふなる鳥になりても飛び行きて、かくあむおはしますもいみじうつげ奉らまほしうとばかりながめ入りてひじり方へ入り給へれば、なかなか弟子どもしも法師どもなどありて人目まげきやうなり。このひじりをたのもし人にて過ぐし給ひにけるにこそはと見ゆるもいみじうあはれにて、「この若き人もこゝにはやものし給

ふ」と問ひ給へば「さらなりや。いづこにかおはしまさむ。尼になりて後生み給へりければ、心憂しとて、かく忍びて見ず知らじとのたまひけれど、生ひたち給ふまゝにいと清らにもし給ふなれば、えおぼし捨てず、御行ひのまきれに心苦しうおぼし嘆くやうにこそうけたまはれ。琴をぞいとおもしらく調べ給ふやうに折々承はり侍る」とかたるに、身を歎きにおぼしたる人こそあらめ、若からむ人のすまひにはいとおそろしき所なりかし、昔物語などにこそかゝることは聞け、めづらかにあはれなることをも見聞かな、唯一人の御ゆかりに、涙もろになりてかゝる御すまひを見置きて立ち歸り給ふべき心もし給はず、若し世におはする事もこそとて、ことつけ給ふものあるやうに聞きし、御文にはさも書かれざりし、いとあてはかに思ひまさられて聖には「まばしかくてなむ侍るべき」とてきやうに御文ども書きて遣はす。この國のうちなるみそうどもの大かた近き所々に人つかはしなどするに、この吉野のわたりに候ひけるしやうのつかさどもは、おはしますと聞きけるより、御まうけして皆参りて侍ひければ、ひじりのかたもあまり物騒しきままでににはひみちて、ひじりの志のやうにて宮の御方にもさるべきやうにて参らせたり。春の日の暮らしがたきは都だにあるを、誠に大かたとのねだに音づれもせず、花の梢も霞のたゝすまひも、世にまらさ心細きを眺め給へる、誠に世をそむきて偏に後の世の事を思ひ出でたらむ人は尋ねべくもある所のさまかな、やがてもありつさぬべくおぼし續けられて、經いと尊くあはれに讀み行ひておはするを、ひじりは佛の顯はれて出で給へらむよりもめでたく見奉りて、いかばかりさきの世に、

よろづを行ひ給ひけむ功德の報に、かく限なき姿とも生れながら、いかなりけむたがひめに
て、にごり多かる世に生れ給ひけむとひめもすに悲しく見奉る。耻かしなどつゝまるまじき
世界ならねば、宮の御方に渡り給へれば、よめはさる方にて似つかはしかりけり。柴垣のは
づかにわはれ残れるが露もたまるまじく荒れ渡れるなど、いかでかくて人の過ごし給ふら
むとわはれに見ゆるが、いまする所からにだにわらず、ふりにたるけしきなるに、朽木形の
几帳のかたびら、年経にけるを去るへつゝ、吹きかよふみすのうち、何となくかをり出で、
佛の御まへのめうからの匂もひとへにあひて、さすがにわてはかなるうちの氣色も思ひや
りわはれなり。のどやかに物語聞え通はし給ひて、「思ひはなつまじき人ゐて渡し奉り給ふ
を、見入れ奉るべきやうに御せうそこに侍るはいづこに」と問ひ給ふ。ありのまゝに知らせ
奉るべきならねば、「かの御身にも離れざりける人のもたまへりしちごの、いとらうたく侍
りしかば、かの世界にも殊にたのもしきやすがなどもなきやうに見え給へりしかば、かの宮
の内にも御覽じなれなどして、さ申させ給ひけるにや、さるべからむ折にゐて参らむ」など
聞え給ふ。夕暮の空いと深く霞みわたりて、うちもとも人のおともせずかすかにいみじき
に、ひじりの入相の鐘の聲ばかりぞ聞ゆる。

「奥山の夕暮がたのさびしきいとゞもよほす鐘のおとかな」。うち詠めわたい給ふ夕ば
えはいとゞしきまでめでたく見え給ふ。「今日も暮れぬとばかりはこの鐘の音に聞き過ぐし
侍るほどを、推し量らせ給ふこと」とうち泣き給ひて、

「明暮も山のかげには別れぬをいりわひの鐘のこゑにこそ去れ」などうち泣きかはし給
ふ程に、きやうにつかはし給ひし人歸り参り給ひて、唐國より奉り給へりける物どもに我が
御志も多くそへて、細やかに使ひ給ふべきものどもなど奉り給ふ。ひじりにも、麻のしやう
ぞくなど、弟子にもまも法師の品までも野山の麓までくばらせ給ふ。この國の内のみまやう
どもめして「今より後はきやうにはな参りそ。みまやうの者どもを皆この宮に奉れ。ばんを
もてよに三四人づゝとのゐたしかにめぐらひて候はせこのごろつと仕う奉るべきよし、委
しくめしおほせられて、程なき和泉河内などいふ所々も、皆さ仰せ事遣して、御供に下薦な
ども、ものゝ故わりて思ひやりわり親しうつかうまつるをこゝにとゞめたまひてくし給ひ
て、近き所々をも催してこのおはしましどころまゆりしつくろひ、又立てそふべき屋ども柴
垣まわらし、水の流をも石のたゝすまひをも今少し見所ありてまなすべきよし、かへすがへ
す仰せられおきて、伏見の里ならねど、やがて我が世も経ねべく立ちかへりにくけれど、き
やうにもさすがに、えさならぬ事ども繁うおぼされて歸り給ひなむとて「こゝはあまり物の深
うして、御文にてだに朝夕の覺束なさをはるけやるべうも侍らぬを、いづくも唯おぼしまさ
む御心からぞめでたうも侍るべきを、これよりは少しゆきゝの道たやすくはべるべき山里
に渡らせ給ひなむや」と申し給へば、「身のうさを思ひ入り侍りしほどは、これよりは今少し
世の中ならざらむ所もがなとこそ思ひ給へつゝ、世のつねのすまひなどは思ひもかけ侍ら
ぬを、今はたのみをかけ奉るべきに侍りければ、ともかくもさそはせ給はむこそと思ひ給へ

なりぬべく侍るも、昔より、世のつねの人めいたる有様ならで過ぎ侍りし身の、やがて跡絶えにしかば、世にありなしを知らるゝ方なくて過ごし侍りぬるを、かやうにかすまへ知らせ給ふにつけてもめづらしき方に今さらなり侍らむも見苦しうも侍りぬべし。かはらぬ身ながらも世を隔てたる御ためこそ心苦しう侍れ」とうち泣き給へるも、いとわはれにことわりにて、「今めかしからぬ身の有様に侍らねば、何のゆゑ誰を尋ね聞えさせたるなど問はずがたりし出づべき人も侍らず。又いみじうとも、からぐにかたざまに、露ばかりあだわだしう後めたき心にも侍らず。よろづ心安くおぼしものせさせ給へ」と、いとこまかに語りおきて、後めたうかへりみがちにて、涙落ちつゝ、「今よりはかやうに侍るべければ、對面覺束なかるべきにもあらず」など聞え給ひて、聖にゆるらかにて過ぐすべきさまに、おきて給ひて歸り給ふを、ほとけひじりといひながら、生ける世のほどは身を捨てぬわざなりければ、あまりに木深く閉ぢ籠りたる山の末を弟子どもなどはつきなく心細げに思ひたるに、偏に頼み申したるほど、佛の變じて助け給ふめりと涙おとしつゝ、喜び拜み聞えたり。この宮は父宮とても、世に逢ひ給ふやうになかりしふる宮ばらの我が身のざえ、琴笛の音のすぐれたるをのみたけき事にて、この世に過ぐし給ふとはたづきすくなげにおはせしを、まして公に罪せられ給ひて筑紫へ放たれ坐せしにいとよろづたじろぎ住み給ひし家などのあとかたもなくなり、ゆくへなき田舎にて命さへ堪へ給はずなりにしかば、心はかなく物の故も知らぬ乳母ばかりに具してさすらひ給ひしに、大貳尋ねとりて花の都にはゐてかへりにしかど、我

が御事も多くてあつかふ事のみありければ、この御身には何のにはひもなくていと大貳さへうせにしかば、よるべなく悲しき世を過ぐし給ひし程に、帥の宮の事さへ出で来て世にしらぬすくせちぎりなれば、又世をしり人に見えむとは思はざりつと憂くおぼされて尼になり給ひて隠れ居給へりしに、我は唯にもあらずなりにけりとおぼされしにはあさましく悲しく、淵河にも陥りぬべくおぼされしかども、命は限ありけるわざにていとをかしげなる女にて生れ出で給へりしを「深からむ河などにも落し入れてよ。みずさかじ」と憎み給へしかば、さぶらふ人々、「いかでかかくたぐひなくをかしげなる人をば人にも取らせ候はむ」と悲しがりて、さる心しておのおのおぼし奉りけるほどに、四つ五つにていみじうをかしげにて遊びありき給ふありさまの今はとてもろこしに放ち渡し、人のさまに違ふ所なく似給へるを、それしもこそあさましう心憂く思ひしことなれど、今は見ず知らずなりなむするぞかしと思ひし程、いとをかしげにて、いざよはは諸共にと、くびをいだきてさそひしを、船に乗るべき時過ぎぬと急ぎて別れし悲しさのよろづの身のちぎりすくせのうさもゆゝしさもさめて、こはおとにもいつか聞かむと思ひし心惑のかへすがへすそむきてもすてゝも忘るゝまなきさまに似給へるも、かれは親子と契りながら、この世に又逢ひおとにだに聞くべうもあらずかし、これこそはおなじ世にかばかり心ぼそき我が身にそふべき人なめりと、やうやう年の積り物の心細きにおぼし知られて後は、さこそ思ひすて給ひしかど限なら悲しきもの、行ひのひまひまにはかきなでつゝ、思し奉り給ふに、世にしらすうつくしう何も飽かぬ

ことなう生ひ出で給ふを、紛るゝことなきつれづれも慰み、又よろしやかなる御さまならば、かゝる山の末に鳥けだものゝなかにまじり給へるも、あたらしき思ひよろしうやあらまし、こぞに今年はまだ昨日より今日は光をそふる御有様を、わなひみじ、こはいかになり給ふべき人ぞ、我が身は今苦のころもにやつれて松の葉をわぢはひにて過ぐすやうなるにうちそひて、とりのねだになごやかに聞えぬ山ふところにもうづもれて、露もたまらぬあばらやの下に何のしつらひもなく、御などもしをれなえばみて、仕うまつる人とてもかゝる世界には誰かはよろしきさましたらむ、若き人の堪へ籠りて添ひ聞ゆるがあらむ外に行き散りて世にあるべきやうにもあらぬ、まれまれあるあやしものどもははかなくもてはふらかし奉りぬべし。めのとのむすめども三人ばかりきたなげなくてありける。それも皆さだすぎおとろへておほあねは尼になりき。今一人はねびにたる姿にてこの有様を捨てがたう心苦しう思ひわびて歎きつゝ、そひ奉りける。三にあたるは、この大和のくにに住むことねりそといふ者を時々通ひける。そればかりを男かげには見給ひつゝ、すべてひとへに世のつねめきたることなくあはれに悲しくて過ぐい給ふも、今は我が身には苦しうもおぼされず、唯この人の心ぐるしき物有様を、いかでかくてのみ過ぐしやりぬべからむ、この人おはせざらましかば、我が思ひすまし行ふさまはりう女が姿やうぶつなりけむにも劣らざらまし。いみじかりける我が後の世を妨げむとまえんなどの變じて生れ出で給ひけるにやと、よるひる極樂ののぞみは傍らにさし置きて、いとかう亂るゝ事なうてこんじやうの思ひ叶へたま

へと佛を念じ申し給ふも、かう思はゞ宿世のわろき身にてこの姫君のたづきの出でくべくもなきまゝに、もしこの人の我に先だち給ふやうあらむとおぼすより胸つぶれ心惑ひて、つとめて遅く起き、ひるねをし過ぐい給ふも、こはいかにと心のみくだけて危くゆゝしくおぼゆれば、すべてやゝもせば更にいたづらになりぬる後の世をだにもと思ふも不用なめり。この人のよるべありぬべかめりと心安く思ひ置くべきとのはしを出でさせせて、おもひなく後の思ひをだにも叶へ給へと、このみとせばかりはまづこの御いのりをのみ先に立て、念じたまふ夢に、いと尊げなる僧の來て、もろこしの夜の夜晝我が親のおはすらむ有様をえ聞き知らぬ悲しさを歎き給ひて、いかでかおはすらむ有様を聞かむと明暮なげき、佛を念じ給ふけう養の心いみじくあはれなれど、こと世界の人になりて別れて後、この思ひかなふべうもあらねば、この世の人にえんを結びて深き心をしめさせて、物思の切なる故にあつかはせむとはうべん去給へるに、こゝに又このむすめのたづきを見おきて、心安くこしやう祈らむと思ひ給ふ心の一つにゆきあひて、この姫君のたづきもこの人なるべきぞといふ人見やれば、いふかぎりなく清らなる男のあるを、我を助けむとて佛の變じ給へる人にこそあなれと思ひて拜むと見給ひしに、この中納言尋ねおはして、風のつてにも聞ゆべきやうもなき後の御有様を委しく聞き、御消そこをも見坐せしより、その御勢出で來てこちたきまで夜晝と人目まげう、あさましう荒れこぼれたりしも作り又も立てそへ、秋の田の實をつむべきみ臈を立て、みしやうみしやうのものどももて参りつゝ、騒しきまであるに、佛のはうべんあはれ

に、我が後の世の疑なくすしく覺しやられ給ひつゝ、さぶらふ人々のはつかに五六人ばかりあるにも、何の頼み所にてかはいとかうたづきなうわびしき山の末には過ぐすべからむと、いみじう心苦しうとも猶えかくては長らへ難くこそなど歎きつる心ちども、あはれいたきまで思ひ悦びたる事譬へむかたなし。姫若は、やうやう物おぼし知るほどに、あやしの人々のうち語らひ歎きわぶるをいとほしく聞き渡りつゝ、我は人とても何につけてか心ちよくおぼされむ、御心なぐさめに人の見るある繪物語などだにかゝる奥山にはいつこのかは見えむ、行きかはり時に従ひたる花の色鳥の聲をも、我が身おなじ心に見はやす人もなく、唯心一つに起き臥しながめつゝ、手習を友にて明し暮し給ふ。母宮の教へ給へるきんを、教へ奉り給ふよりもすきてひきとり給へる、聞く人もなき世界なれば眺めわびては掻きながらしつゝ、明し暮し給ふ事より外の事もなきに、中納言尋ね入りおはしたりしを、よのつねの人だに絶えたる世界にあさましうめでたう物し給ふ人の、都の人のすみかは思ふにかうはあらじを、いかに見給ふらむとはづかしう、人々の思ひ喜びたるを見給ひて心のうちには、

「誰もなほうき世のうちの山なるをいづこなるらむわらぬ所は」。これより奥をも尋ねまほしううち詠めて、きんをいみじうをかしう弾きて居給へる夕ばえ、人々めでたしと見奉りて、「年ごろはこの御琴の音うけたまはりつるは、そゝろさむくすさまじく侍りつるを、今もしもいとおもしろく侍る」と心ちよげにけうじあへるもことわりながら、あな心うと我が身一つのみ耻かしくあらまうく覺す。四月十日よひのぼどに、御ころもがへとおぼしくて、四

尺のみ几帳二よろひ、三尺の一よろひ青栲葉、三尺四尺二よろひばかり、くれなるの打ちたるに、藤製の御ぞども同じ色の織物ども、撫子の織物の袷重ねて尼上の御料には、鈍色の御ぞに、丁子染のうすもの、袷、さうがんの御袴など、いみじう清らに、二つにうるはしうつゝ、みて、侍ふ人々の料には、あやごろもくれなるこままと取りぐして、すだれたゝみさへへ給ひて、ころもばこにはいろいろのたきものども入れぐして、ちひさやかなるかうの唐櫃ひとよろひに、色紙うすえふよき墨筆どもなど入れて、うへにおもしろう書かれたる繪物語など入れませ、若き人は何に心を慰めてか過ぐし給ふらむと心苦しう見えしまゝに覺しやりて、御文には、「立ちかへりもと思ひ給へりしかど、紛はしく見給はする事多う侍るころにてなむ。うちつけのやうに侍れど、いみじう覺束なう思ひ聞えさせ侍りてしづ心侍らぬまゝには、猶それよりあさう出でさせ給ひぬへうはいかに嬉しう」とて、「この繪物語は都だに暮し難きつれづれのなぐさめと引きならされ侍るを、まして何にかは慰めさせたまふらむと推し量り聞えさせて」などあるを、思ひ至らぬ事なく、こままとこちたきまである御心去らひのよのつねならぬを、尼上はそゝろなる心ちし給へれど、もろこしの御文見給ふ夢などおぼし合せ、佛の御方便又さるべきにこそはとおぼす。人々のかしらをつどへて、見合ひて思ひ喜びたる氣色どもどとわりなるや。高さもくだれるもおほえぬ所に若き人ありと聞きては、必ず過ぐしがたうけしきばみよるを、さる人ありとは委しく聞き給ひけむな。うちつけにけしきばみ見ゆる事もなくて、つれづれ慰むべき繪物語を、ふりはへ思ひより給へる

御心のほどをわさはかにあらずなべてならざりける御心なりやと淺からず思ひしられ給へるを、御使に物かづけば、なかなかの心にくげなくて世づき今めいたる心ちすれば、御返事ばかりをあるべかしう細やかに聞え給へるぞげにめやすかりける。繪物語をぞ誠にくれがたうながめわび侍るに、嬉しげに思ひて侍る」とあるは、いかやうにかあらむとあねささきにや似奉りてあらむ、ひたぶるに世を捨て給へる母宮にそひてさる奥山に籠り給へる人と思ふに、物のあやめ見知りたをやかに懐かしき有様にはあらじかしなど思ひやれど、うちつけにふと思ひよりむつびよらむの心もなし。とてもかくても言ふ方なく思ふ方なく思ひ隔て遙にすべなう悲しき人の御ゆかりのあつかひぐさ出で來ぬるぞかしと、その御名残ある心ちし給ひてよるひる心にかゝりて覺束なく、私の我が身の大差の事出で來ぬる心ちし給ひて、わが君をもいかで見せ奉らまほし、幼き程を遠くゐてまうでむ、所せしと覺しわづらふ。まことや大貳は北の方むすめはさきに立て、のぼりにける。きやうにて聞くに、中納言は、大納言殿の姫君の世を背き給ひしに定りたまひて、よこめなくわりつき給ひにたると聞くに、さればよ筑紫にてさばかり志聞えたりしに、うちおぼし定むるかたありければ見過ぐし給ひてしに、との外なる御志去てしに、なほざりにたのめ給ひてしかば、何しかは音づれ聞えむと思ふに、三吉野に尋ね入り給へるほどにて御せうそこだになきを、さばかりも見馴れ給ひしものをのぼりにけりと聞き給ひて、なげのひとくだりをなごかけ給はざるべき、人の思ひ聞えさせたるほどよりはなさけなうこそおはしけれと、心おとりして妬う悔し

うおぼえければ、母北の方、おしたち華やかなる心ばへしたる人にて、人をもえばしとないがしろに思ひて、大貳のぼりなばそゝろ心ありて、はかばかしうもしなさとおぼえければ、大將のおほい殿の衛門の督、中納言の御をぢぞかし、北の方はそちの宮の御むすめ、人からはいとあてなれど、こよなく年まさりければ、もとより志もいと深からざりければ、年積るまゝには去り難さばかりこそあれ、すさまじさはまさりて、いかで思ふさまならむ人もがな、これをさる方にて、えさらぬものにてあらむとおぼしの給ふに、この大貳のつちいみに、たびどころにありけるを、不意に見給ひて、いみじう色なる御心ばへにて、かやうなる人を見ばやとおぼし渡るに、違ふ所なければ、いとわりなくおぼしいられて親しき便ありてねんごろにのたまふ。北の方は年の數こよなう、御思ひすさまじきよしを語りければ、人がらいとやんごとなし、かたちなどもいと清げにおはする人なり、素より人おはすとて、我がむすめおろかにおぼす人あらむやは、わく方あるまじとて何となき公達上達部はさてもおぼえなく人がらわろからむをば何にかはせむ、中納言の聞き給はむ所もあり、これは北の方もおはすと思ふこそあれ、かたち世のおぼえ華やかにやんごとなくて、かうねんごろにのたまふはありがたうこそあらめと思ひて、ことごとしう聲とり聞えなどせむもとのうへなきになすやうなり。かの殿も、唯忍びてとのたまふなるもさることなりと、ゆくりなく滯らす思ひ立ちて忍びてわたい奉りてけり、むすめはかく言ひ定めつれど、たちまちにかゝるべきものと思ひよらぬに、年三十五六ばかりにていと盛に華やかなる御氣色なれど、中納言の世

に去らずなまめい給へりし御氣色見知りにはかば、なぞらへよるべうもあらず。おしたちてもてない給ふにつけても、何となういみじうあはれげに契り給ひし戀しさの譬へむたかなきに、胸せくばかり歎きあかして、母上をもいと心うしと思ふ。中納言かくと聞き給ひて、思のほかに懐かしうらうたげなりしかたちけはひを、さる心やすきものにて忍びて必ず見むと思ひしを大貳のむすめののぼりたるを、け去やうするといひなされむ世のきこえもびんなく、又只今は物騒がしからむ、のどかにありつきなむ後にぞ、みづからばかりに淺からぬ心のうち見せ知らせて語らひよりつゝ、忍びやかならむ山里に隠しするたらむとおぼしつるも口をしければ、我が心のどかさもあまりわやしきまでおぼし知られて、いかゞ思へると氣色ゆかしくて、いと忍びて、

「くりかへし猶かへしても思ひ出でよかくかはれとは契らざりしを」とあるを、むすめ忍びて見るに、いみじうをかしき書きざまなど見るにつけても、今はとてのぼり給ひし曉に、おぼし亂るゝけしきも、心深うのたまひし御かたちけはひも、よのつねの人を見るにつけても心にしみて思ひ出でらるゝに、かくおぼし出でたるにもあるべきものをと心づくしまさりければ、御返事もかくそあはれをそへて聞えける。

「契りしを心ひとつに忘れぬぞいかゞはすべきしづのをだまき。あらぬ世ぞうき」とをかしげに書いたるを、けしきばみ事離れてはあらで、思ひけるまゝと見ゆるもらうたくあはれにて、いかでみづからとおぼすに、大將のおほい殿、風起り給ひて惱み給へば、大將殿のう

へ皆渡り給へるに、衛門の督夕暮に紛れ出で、こゝかしこにいとまどひけるなんめり、宵うち更けて歸り参りてとのゐるを見おきて、「今宵はあまた侍はせ給ふめり。罷で、うち休みて、明日の夜侍はむ」と出で給ふまゝに、かしこによりてうち叩かせ給へば、曉かけて出づる月のまだ出でぬほどなれば、何のあやめも見わかず、衛門の督立ちかへり給へると思ふなるべし、明けて入れつれば、戸口のほどによりて扇をならしたれば、うちの人もさ思ふなるべし、いみじうねぶたげなるけはひにて入るゝもや、まじういとほしけれど、火なども物のうしろにてはのかなるに、人も寝しづまりたれば物もいはで帳のほどに入り給ひたれば、几帳引きやりて入るゝもうち笑はれぬべし。女もやがて帳の内に寝たりけるに、うち驚きて、あらぬけはひと見るにあさましくいみじけれど、よるひる心にかゝりてのみ思ひ出でらるゝ御けはひ紛るべうもあらずしく見ゆるに、あさましながらさすがなり。心にかけて、いつしかと待ち渡り聞えさせしに、上り給ひぬと聞きても、のどやかならむひまをと心もとなく思ひしに、思ひかけずにかなる藻鹽のけぶりの口惜しさを、なか露ばかり驚かしはのめかし給ひたらしましかばさては聞き過ぎさうらまし、忍びてさそひ出で給はましと、我がひとつこゝろにもてはなれ靡きたるうらめしさを、からぐにの一夜ばかりの契のほどは心にも入らず、あまりのどけきは、我が心のをこたりをば知らず顔にて、ひとへに人のあさきに取りなして恨みつゝけ給ふを、世馴れたる人ならば、我がをこたりならぬ人のつらさを、少しは恨みかへしつゝべきぞかし。ひとへに耻かしくいみじうと思ひ聞えたるもらうたく

心苦しきまゝに、さのみものちせの山をも何かは思しのどめむ。わりならわびしう思ひながら恨み給ふをば苦しげに思ひ歎きたるも、かばかりさまことに思ひすましたる我ながらもち忍びてえさらず世にながらへむ程の心安きものには見つべくもありけるかなと口をしさまさるに、いよいよ心深く契り語り給ふ程に、とりの音も聞ゆなり。女いと恐しうわりなしと思ひたるを、かう人よりはおぼしおとしめらるべうも契り聞えざりしものを、衛門の督のよべのけしきもいとわかずわりなしとち歎くめりしかば、今のほど立ちかへらむと、こいとよりはいとほしからむかしと心あわたしくおぼさるれば、よべ入り給ひし戸のほどにあながちにさそひ出で、押しわけ給へれば、月のいと明きにこゝかしこのしたは暗がり渡りて、つま近き橋のにはひに時鳥うち鳴きたるも折あはれにをかし。

「時鳥花たちばなにこがくれてかゝるしのびの音だに絶えじな」との給ふありさま、かきませのきはだに、かやうのえんある曉の別を忍ばせむと用意せむほどは口をしかるべうもあざざらむに、ましてえならすなまめかしくめでたきを、女も限なく見しられて、

「さらでだに花橋は身にしむにいかにしのびの音さへ鳴かれむ」といふけはひもいとをかしうなつかしきに、誠に見捨てがたければ、「いざやがてゐてかくしてむ。いかにおほすべき」とのたまへば、ほのかにうちうなづきて今少しなびきよりたる、いとらうたく心苦しけれど、我は今少し思ひまさらされて、「まろより衛門督はおとなしうものしきを、又えさらぬなかのわきて親しう頼みかはすに、かばかりのふるまひだにうしろめたういとほしうおぼゆ

れど、我こそさきに見なれしかと思ふに、何のとゞこほりもなくおぼえてゆかしう思ひよりにしを、さてはいざなひ聞えては、世の聞耳もさるものにて、かの思ひ給へらむことのいとほしければ、そよさらさらましかば、やがて只今いとよくさそひかくしてまし」などあはれなるまゝにこまごまと語りおきて、「まだ夜深からむめるを、かうて見る見るはえ出づまじ」とて、うちにゐて入りて出で給ふほどにぞ人一人起き出でたれば、ともかくもいはでかいまぎれて出で給ひぬ。あやしう心苦しうらうたき人のありさまかな、いとおよびなく、心盡さいらむかきませのほどは、かやうに心うつくしうなよ、かならむこそ思ひとゞめらるべきわざなりけれなど、心にかゝりておぼえ給ふもおろかならぬ御志なればなるべし。宮におはしつきたれば、又驚きたる人もなし。姫君は、殿のおはするほどはさかしう行ひ入りて見え奉らむも、かゝるさまといひながらうたてあれば、おはせぬほどは心安うて御堂にて行ひ明し給ひければ、やがてそなたにおはしましたぬ。ほのぼのと明け行く空の氣色春秋の霞霧よりも劣らず。浅緑なる梢の、何となくけぶり渡りたる程を眺めてはし近う柱に寄り居て行ひ給ふに、思ひもかけず、えんなるねくたれの姿なまめかしうてみすうちあけてすのこのなげしにおしかゝりて居給ひぬれば、猶いとつゝましうて、すゝなどさらぬ顔に紛はしもてかくい給ひつゝ、はぢまらひ聞え給ひて、例の薄鈍の御ども、何となき御ぞの裾までにも見所多く着なされて、何のつくろひなくうちとけ給へる御朝顔の、けしやういみじくまたらむ色あはひにて、いと氣高う清げにはひ多かる御有様珍しうをかしと、見給へる人の月かけ

よりも猶物ことにわりがたうめでたう見え給ふを、いみじう思ひとりすましたる心も、猶胸潰れて、飽かざりつる別は傍にさし置かれて涙を落ちぬる。

「見るたびにまづも亂る、心かなはちすのうへになぐさむれども。あはれ」と心深げにうち詠め給へる御さまは、只今極樂の迎わりて雲の上に乗るとも立ちかへり見過ぐし難き御けしきなり。

「うきながらとまる心もありなましはちすのうへの露もかけずば」。常はつきせず世を厭ひおぼしたるけしきのみ、なげのたはぶれどもかけ給ふを、けさはわはれすてぬさまにいひなし給へるもいと心づくしなるにけうらなる若き尼一人清げにてかるらかにまやうをさてわか奉りなどするに、人に違ひてさま異なる御いとなみにやと涙こぼれて覺ゆるを「罪の深きにや侍らむ、常より物おはれに侍りや。今朝は亂れ心ちもなやましう侍るを渡らせ給ひね」とて、例の御方に入り給へれば、人々驚きさわぐ。「疾くわたらせ給へ」と、せめてたびたびおれば、せめてしづらむもさばかりにては、よのつねびうたてければ、渡り給ひて、三尺の御几帳猶絶えず引き隔て給へるをおしやりて、近やかにうち添ひ臥し給ひて、大武のむすめの事は語り聞え奉りにしかば、今宵のうたゝねにわかざりつる時鳥の聲のことなど残る事なく語りきこえ給ひて、「よのつねのありさまにて待ちうけ給はましかば、ありつかぬかやうのふるまひなどは思ひより侍らざりましと思ひ侍りつるに、かきみたりなやましくさへなりぬ」とかこちて、御足などうちすすませせて御傍らに御殿籠りたる。かしこには衛門の督

のさばかり飽かぬ氣色にて出で煩らひ給へれば、立ちかへりおはしにけりと心得て北の方にも聞ゆれば、いと嬉しげにうちゑみて、「めでたからむ人の心もとゞめざらむは何かはせむ。大武のいみじき事に思ひ聞え給へる人に、いづくかはこれは劣り給へらむ」などのたまふを、むすめは胸いと潰れて、聞きや合せられむとわびしければ、例ならず起き出でぬざり出でたるに、衛門の督の御文とり入れたるも、まづ人や見むと心のさわげばふと取り給ふを、人々は例ならずと見る。「夢にさへ見え給へるにおそはれつ」と書きて、

「一聲にあかずと聞きしむじか夜も秋のもよのこちこそすれ」とあるを見もはてず、硯ひきよせて、うへをいと黒うかきみだりまぎらはい給ふほどに、母北の方渡り来て、「いつのほどにわりける御文ぞとよ。物ぐるはし。あまりいとかゝるもいかうしろめたらわるわざなれ」と、心ちよげに打笑ひ給ふに、おもてさと赤みてうつぶしたるに、こぼれかゝる髪のかゝりかんざしなどのいとをかしげなるを、少し物おぼし知らむ人のいかでおろかにはおぼされむ。中納言のさばかり志見せしを、心強う見とゞめ給はずなりにしかば、猶今に胸苦しう妬く思ひけり。御返りなどせむれば、かゝらむともなきに、取りて見給へば、せむかたなくて、心ちあしとて臥しぬるを「いであやし。など聞え給はであるべきぞ。大武のみ心にもいとよう似給へるものかな。すゝるある人に心をつけて、故もなうよしなき事をしいでられたりしよ」とうちむつがり給ふを聞くに、心地悪しきまでむつかしうて、聞き入れぬやうなれば言ひ煩ひてかへり給ひぬ。夕がたになりて、その人の御文はいと忍びてある。

「思ひやるかたこそなけれ暮るゝまを歎きやすべきなほや待つべき。何となく心わくがれ亂れくらすに、うちなかれて、

そま河におろす筏のいかにともいふべきかたもなくぞなるゝ」とあるを、志のあればにや、誠に浮ぶ心ちして忍びて女君に見せ奉り給うて、「心苦しきはひのしたればすさまじうもおぼえぬを、えさらぬなにもし漏れ聞えばいと恐しうびんなるべし。さりとてかくて止みなばあはれなり。この方にしほしみたる人はいかなるも心安げなり。ありつかぬかやらの事は、所せうこそありけれ」と語らひ聞え給へば、いとほしとおぼえて、「かゝらざらむさきにこそは、いざなひ給ひてましか」との給ふ。ことわりなれば、「これもたれゆゑぞ。うちうちこそかうそむきはてられ奉りたれ。人ぎゝに又人をならへ奉らじと思ひ侍りしぞ」とのたまへば、唯御顔のみ赤くなり渡りてともかくも聞え給はぬ用意もてなし、猶いとくばかりなるはこの世にわりがたくこそとうち守り聞え給ふに、御胸つぶつぶとなる心ちせられ給ふ。それより後ひまいとわりがたくて、男も女もかたみにあはれと心をかはし聞え給ひながら行きあふこといとかたし。はつかに夕暮のまぎれ、よひのほどは、夢の浮橋の心ちしてあはれにおぼし出でらる。衛門の督わざと来て、「かうかうの事なむ侍ると年ごろになりぬる人をおきながら、かゝるありさまを人もあやしと必ず思ひ侍らむと思ふ思ふ、さるべきにや、これも過ぐさむ事に思ひ紛はしてやむまじく、さりともて出で、通ひ侍らむも、たづきなくさびしき蓬の本ならばさても侍りぬべし。豊なるたづき求め顔にぬぢけがまし

きにながらへ侍らば、とてもかくても同じ事なるべけれども、大殿の對になむ迎へてむと思ひなりにたる」と、うちもなう言ひ合せ給ふもいとほしければ、さりげなうて、たちまちに迎へ給はむも、世の音ぎ、今すこしけんそうにもて出でがほにこそあらめと聞けど、いみじう心入れて思ひ給へることを、あしかんなりと聞えむもびんなければ、「げにもさもあり」と聞え給ふ。六月十日よひ、おほい殿西の對にいみじうしつらひて渡り給ふ。儀式見むとおほして、中納言とかくやすらひて見給へば、われ諸共に立ちそひて、車五つばかり、ごせんいとあまたことごとしうもてないて渡り給ふさま、いみじう心に入りげなり。母のいふらむやうにこよなきさいはひなりかし、志いみじうとも、我はさこそえかうもてなざらまし、思ひとどめていみじう思ふとも、かすかなる山里にかくしおきてたまさかに忍びつゝ、ぞ通はまし、女のためいかに心細からましと思し續けて歸り給ふに、衛門の督、御ふるさとは道なりければ、かどのほどに人かげもせずさびしげあり。いであはれ過ぎ難うており給へれば、すだれあけて人々出で進むなるべし、聲々唯今宵迎へらるゝ事をぞいひあざみ、心うかりける奥のかたよりおいしらへたる聲したる人出で来て、「只今を渡り給ひにける。殿はこの夕暮に迎へにおはしまして、ひとつ車にて、二十人のごせん、車五つすだれあけていみじう乗りこぼれ、御まうけなど心に入れてこそおほし騒ぐなれ。こゝにもごせんにかづけものなどしけり。あはれあさましや、目の前にさはかゝる事もありけるは」と言ひ續けて、泣くさまのいみじきは御乳母などやうの人なるべし。いと人々も聞きあざみねたがるを、御みづからもは

しつかたにおはするなるべし、「さばれ、聞きにく、かうないひそ。いふにもよらぬものなり」と忍びやかにの給ふなるけはひあてやかなり、「いでや年ごろも、かうのみ物をおぼしめて、うづもれすごさせ給ひてのはてはては、つひにかゝる事も出で來ぬるぞかし。猶少し人はいふべきことをも仰せられたることよけれ。いとあまりなると見奉るつもりのかゝるめも御覽するぞかし」といふなれば「なくにしとまるものならば」とうち泣きたる、少しおとなび過ぎて忍びやかにあはれなり。すゝろにいみじう涙ぐまじう心まさりして、われ立ちよりにとぶらひもやせむとおぼしけれど、ことごとく歎き入り思ひさわぐにゆくりなうさし出でたらむもおもなく、衛門の督の聞きたまはむ所も、れいさもあらぬに迎へ騒げるを見置きてこゝにとぶらはむも、もどきがほにびんなければ、立ち出で給ひて歸るまゝに、衛門の督は猶思ひのまゝにあさはかに物し給ふ人なりや、げに人がらは若く盛に、空しきそらにみちぬばかりいみじきことを思ひわび、世のつねならぬ心にだに、いとにくからずおぼゆる人なれば、ましていとかう物思ひ入れたらむ人は心を惑はし給はむもいとことわりながら、やがてかさうつろひてもて出で給ふこといと心憂きことなりや、我が心ひとつにすみて、よからぬ心にはもどかしうおぼされて、女君も例のありつる事ども、もとの北の方の御事など語り給ひて、「世におはしませ侍らむ限はかやうにもて出で、あざやかに思ひならぶるかたなく、過ぐし侍りなむところは、人の恨を見聞くまゝに覺え侍れば、かばかりそむかせ給へる御心にはいかならむ事をもげに何とかおぼしめさむ。唯世のおとぎ、大將殿の思ひ聞

え給ひけむさま、少將の乳母の心を碎きけむなどの思ひやり侍るに、うちうちこそ世づかぬ御ありさまなれ」と人ぎはすべてけざやかに、かゝづらひたる事なくて止みなむとのみぞ思ひ給ふに、何事につけても神佛をかけたつゝも我が御ゆくさきの心もえらぢり聞え給ふ。姫君も、我が身はかくて過ぐる、いとびんなくあるまじき事なりかし、人も必ずさぞ聞き思ふらむとのみおぼせは、いかならむさまもわれくるしう心動くべうもおぼさねど、げにまたかうて淺からず見えらるゝふしぶしわり過すに、さるべきやんどとなきよるべの出で來なば、素より我が住みなれたらましには劣りて、はしたなくおぼえ、人々もあらひ苦しう歎しうはおぼされぬべき事をかし、かくてのみは人のおはすべき事にもあらず、さらぬさきにのどやかならむ住ひにかけはなれなむこそつひの心安きとなれ、とてもかくても我が心にはいさゝかいかになぞや思ふべきふしならぬども、唯大將殿の又あいなう胸ふたがりておぼさむも罪深く、さのみおやによからぬものを思はせ聞えさすべき事かとおぼすも、かうのたまふついでにも、さやうにはのめかし給ふも、いみじう心憂き御心なり。「かく忍びてやともかくも御覽せられむ。うちあらはれてはよし見給へよ」とすゝろに恐しげにのみ誓ひ給ふを、せめて疑ひそむくもうたてあれば、いかになりともあるに任せてあるべきにこそはあめれ、こ姫君は大將殿のうへも、世になくなさるものには、片時も見給はではえあらずおぼえたれば、いとうしろやすし、中納言の思ひも露おろかなるべきにあらず、我が身はいかで人ぎもをこがまし、いみじう思ひすますといふとも、かううらなきなからひはおのづから亂

るふしの出で來ぬさまになくなりてしがなと、佛を念じて、迎へとり給へとおぼさるゝにつけても、いとわはれなり。釣殿にみ堂作りはてたれば、佛皆遷し奉つり給ひて、はちすの花ざかりに供養ありて、これより八講行はせ奉り給ふ。御心まうけよのつねならず。塔の作られたるさま、佛の御かざり、この世のものともおぼえず、目も及ばず。いみじう供養せらるゝ日の曉に、み堂に渡らせ給ひて、御局ひらうて、大將殿のうへ式部卿のうへなど渡り給ひたるに、おのおのおはします所さまざまめでたくしつらはれたり。そこ清く拂ひなされたる池のおもて緑深う霞み渡りたるに、はちすの花のいろいろひらけわたりたるほど、誠に極樂の八功德、血の池もかうこそあらめと思ひやられてすゞしくいみじきに、あるじの中納言の御かたち有様あてにけ高ういぎやうこぼるばかりにあたりまで匂ふ心ちして、おりたちいみじう心に入れて、經佛のかざりよのつねなるまじうおぼしいとなみたるさま、いみじからん後の位も何にかはせむ、この人もかく用ゐられ思はれ給へるが限なうめでたうおぼゆるを、大將も過ぎにしかたの恨みも残りなうわはれ涙ぐまじう、いにしへは我をばかけずあるまじき事におぼして、母上の御許にもおはしながらわひむかふ事をささなくて、などかかくと、うちめしうおぼゆるをり多かりしを、もろこしよりかへり給ひて後は此の事をいかに思ひけむといとはしうおぼしめるまゝに、我をもかたじけなきものに思ひかしこまり、心よいうちとけて思ひむつび給ふなどわはれに嬉しきを、さまことにかくなり給へりとても、うち忍び時々のかよひばかりこそありとも、いとかうわくるかたなう思ひあつかはぬ人のみ

こそはあらましか、ありがたう心さへ人に似ぬ所の物し給ひけるよと、深う思ひ忍び給ふまゝに、かたがたのわはれにうつくしさもかぎりなく、我が御子どもよりもこよなう思ひますり給ふ。母上も、大將の我をうけ給はぬと言ひ恨み給ひしも苦しく、又ふさはしからぬ事に思ひすみ給へりしけしきも耻しうわびしかりしを今は皆一つにおぼしとけにたるを嬉しう思ふ事なうおぼえたる御けしきもわはれにいみじく、御八講のほど上達部殿上人などは々におはします。八月の月いみじうあかう涼しきかげに御遊などはじまりて、この夜もかの夜も尊くおもしろうて過ぎぬ。人々の御心ゆき給へるが嬉しう思ふことなうて心皆落ちぬるにつけても、もろこしに渡りしほどの姫君を見なれて程もなく立ち離れむ飽かずいみじかりしを、さばかりの道を、おほやけにわざと暇申して思ひ立ちて俄にとゞまらむも、その事となきにいと怪しかるべしと心を盡し、胸をくだきながら思ひ立ちて、いかにおぼすらむと推し量り思ひしよりも、いちじるささるしさへありて、いとほしう心ぐるしう人々の歎き亂れ給ひけむと思ふにいみじけれど、又いくばくも經ず立ちかへり來て、かくながらも我がもてなしおろかならねば、人々の御心をも少しおぼしなほるべかめるもうれしきにも、わはれ遙にへだより、夢のやうにて別れ奉りにしかうやうけんの後、われをば何とおぼさずとも、三のみこのおぼしたりしけしき、親子と結び置きつるちぎりば、身を代へ世をへだて、もかはらぬものなりけりと見まりにしかば、この若君をいとわはれに放ちがたげにおぼしたりときゝしに、又行きわひ見給ふべきやうもなくてうちおぼしおこすらむ御心のはど、思

ひやるかなしませむかたあし。世のうちのことはあるまじう思ひなることなれども、岩のうへのためしを頼む事にて、さりとて我が志積り行く事ありなむと思ふべきを、これは身をかへてのみこそ今はかの御あたりによるやうもあらめ、この世には、さんいりの春の夢を限にて止みぬるぞかしと思ひつゞけては、言はむかたなう心も肝も惑ひうする心ちのすれば、極樂の望はさしおかれ、しやうをかへても、かたみにさぞかしとおぼしかはして、我が父宮に逢ひ奉りしやうに行きおひ奉りて、后のおぼすらむ御心のうちを見まほしく思ひわびつゝ、今は唯この御あたりは今一度おひ見せ給へと、念せらるゝ事より外になきも思へば心うし、我が心はいとかく罪深き方に身を沈め歎かむとや思ひし、その思ひ離れむとてこそにくからず見とめつべき人をもとめて過ぐし聞き入れれば世の人にももどきわらはれぬべきまで心強う思ひえたゝめしかひなう、知らぬ世界の及びなき人に夢のやうなる契を結びて、長き世の思ひをも重くなして、この世もかの世も、いたづらになしつる心地するもぎり、世に似ずうらめしう悲しうおぼしわびつゝ、三吉野にみづからこそありしまゝにえまうで給はね、御せうそこは、四五日を隔て、奉り給ふ。こまやかなる御心しらひなどはすべて覺し至らぬ隈なく、多くの海山を隔て、契を結び奉りて燃えわたる胸のはのは、さむる事には、唯この事を片時怠らずおぼしいとなみてもあふ道ならねば何のしるしもなかりけり。』七月七日の夕つかたうちへ参り給へれば、風すしうて、御まへの前裁いるるおもしろきに、式部卿の宮候はせ給ひて、殿上に源中納言参り給へりと聞き召して、こなたにと召したればまゐり

給へる夕ばえいと見るかひあるを、今はじめぬことなれど猶珍しう御覽じて、近く侍ふ人もなきほどなれば、例のもろこしの事いひ出でさせ給ひて、「さしもなき事のことなくこの世にまさりたりと見ゆる事やありし」と問はせ給へば、「見侍りしことに、いと目も心も及ばぬ事のみ候ふめりしかど、この世には同じ事にてこよなうかはりて珍しう見ゆることもさふらはざりしを」とて、珍らしうは何事をかは申しはべるべき。ひやうさうの八月十五夜の月の宴に、かうやうけんのかん弾きたまひしをこそ申し出でめと思ふより、涙のさきに立ちぬべきに、つゝみて、「さきさきも申し出で、止みにしを、かう常に問はせ給ふに、よがたりにもしづべかりしことを、残しつゝ、奏し出でぬ事、人ひとりの御ゆる、盡させず戀しく、世の光を隠すやうなるも口をしければ、いみじう思ひためらひて、をのこはざえさと深うかしこう、たへなるも常の事にて、女のすぐれたること、いと珍しう侍りしか」と申し出で給へるに、「それこそいといみじかりけることよ。ゆかしくこそ」と問はせ給ふ。「かの國の一の大臣のむすめ春宮の御母一の後、ざえさと世の政かしこう、おぼえやんごとなかりしを、はじめ三四もおとるなく、皆物の上手に侍りし中にも五はすぐれて侍りき。まんなかんな人にすぐれて文の道くらからず、ことばさゝ心深うなむ侍りしありさま、並々の博士は及ぶべくも侍らざりき」とて、かの送りおこせたりし文のかたはしを語り給ふに、帝よりはじめ奉り、皆驚き騒ぎ、御涙とゞめさせ給はず。』さてはうかやうけんといふ所に住み給ひし後、第三の大臣のむすめ、かたち限なき名とりて、揚貴妃などのやうに時めきおぼされながら、一の後を

はじめ、あまたの御方々にそねみうれへられて、だいらのうちにも侍ひ給はでかうやうけんにおはせし、その宮のあたりの人などは、この世の人に物いひ有様も違ふ所なう侍りき。十月ばかりにうちまぐれつゝ、故郷の事戀しう思ひわび参りて侍りしかば、みす巻きあげて、菊の花をながめて、きん彈き侍りし人のかたち有様、琴のね心もおよばず、いみじき人をなむ見給へりし」と語り申せば「后にや有りけむ」と問はせ給へば「さしも侍らじ。それは思ひわかれ侍らず。光り輝くとはこれをいふべきなりけりと見え給へりし。女房七八人ばかり、いみじう麗しうまやうぞきて菊の花の中にまじりて蓬萊頭の月といと若やかになつしき聲を合せてすんじ候ひしこそ、その所の事にては珍しういうに見え聞え候ひしか。また三月ばかりの月かすみおもしろう候ひしに、さんいうといふ所に、月をみ花を翫ぶ所に人々の中にいみじうめでたき人こそまじりて候ひしか。又まかり歸り侍らむとせし別を惜みしに、ひやうきうといふ所に、十五夜の宴せられしになむ、道々の物の上手どもの勝れたるさえども見給へりしこそ、琴笛の音も文のつくりもいみじう候ひし事よ。月さし出で、隈なく澄みのぼるほどに、帝の御まへに女房一人を召し出でつゝ、きんひかせさせ給ひし、そのかたちありさま琴の音、この世もかの世も世にたぐひあらじと見給ひし」と唯人ひとりの御事を心にまみて、おぼゆるまゝに語り申せば「いみじうけうわりけることかな。かの國には女すぐれたるなるべし。楊貴妃、王昭君、李夫人などいひて、あがりての世にもあまたありけり。昭陽宮にながめたる女も、まなこは芙蓉に似たり、胸は玉に似たりと譽めたり。男はいとかばかり

名を傳へたるやある」と問はせ給へば「昔かうやうけん侍りけむ、はんかくといひ侍りける人などこそ、名を傳へ侍り隣なる女これと思ひかけてみとせまで見侍りけるを、はんかくはえ知らず侍りける。この頃もどきやうの中にようめいけしうはあらぬ人々侍りしかど、この見給ひし女房たちには、並ぶべきは候はざりき。いみじき楊貴妃王昭君なども唯麗しう候ひけるなめり。喩へたるさま見侍るにこればかりのかたちはいかでか侍らむ。唯麗しうけ高うのみもあらず、わいぎやうづきにはひやかなることの、あたりまでこぼるばかり見え候ひしこそ、珍らかに」と語りつゝも、うちかはるけしきの限なうも見といめけるかなと心えさせ給ふにつけても、おぼろげならざりけりと、ゆかしうめでたうおぼしやられて「猶世にありがたく珍らかなる人なりや。かゝる人の、世の中をさへ渡り行きて見るよ」と仰せらるゝを、式部卿の宮は「さる人々を見置きて我あらば歸らざらまし」とのたまはせて、猶捨てがたう思ひたる大將の姫君は、この世にまたすぐれたる人にこそあらめとおぼすに、口をしう胸痛き心ちせさせ給へど色にも出させ給はず、唯唐國のことを、鳥となりても只今一度に飛び行かまほしげに思しめいたるを、誠にかの後の御有様見給ひたらむはしも命にもかへさせ給ひなまし、我は誠にあさましう心強う思ひしづめ念じて、世にながらふると思ひ續くるもといめ難う悲しきまされに、一の大臣の五の君の事、猶奏し出で、かたちはいと名を流すばかりには候はざりしかども、なべての人に比ぶればいとをかしげにて、手書き文作り、まことしきまされのいとみじうすぐれて、出で立ちし程におこせたりし文琵琶のねいみ

じかりし事、歌など語り申せば、いみじと聞かせ給うて、「その文必ず見せよ。世に珍しき事を今まで心愛く」とさへ恨みさせ給ふ。男宮はこの式部卿の宮一所おはします。女宮はあまたおはしましたしけり。しようきやうでんの女御と申す御腹に女宮おはしますを、心苦しきことに思ひ聞えさせ給ひて、女御の御方さまにたのもしかるべきうしろみなどなくて心細き御有様なるを、かくてあるほどに中納言にゆるして、はや大將のむすめはさまことにて、うけばる事あらじとおぼしとりて、今宵かゝるこまやかかる御物語けぢかうち亂れ奏したる有様も猶めでたうおぼし召しければ、まめやかなる事ども仰せらるゝついでに「世の中の末になる心ちして、心細うのみおぼゆるに、女宮たちのあまたものせらるゝ、いと後めたけれど、かたがたの後見頼もしきはおのづからさりととも頼み思ふを、承香殿なるみこ我より外に又玄るべき人もなき心地していとかすかに心苦しう思ひやらるゝを、このみこの後見せよとなむ思ふ」と仰せ事あるにかゝはすべき、かたじけなければいといたう畏まるさまにて侍ひ給ふ。罷り出で給ひても、例の尼姫君の御方にうち休み給ひてもまどろまず、うちのうへの仰せられつる事思ひ續くるに、我が心をよの常に推し量らせ給ふなるべし、いにしへよりかやうのすぢにすべてつゆも心を亂さざるとよろづ思ひすぐして、知らぬ世の及びなき事に心を玄めにしより、我とも覺えず浮き漂ひてのみわれれば、やんどとなくかしこき御あたり御覽せらるべきやうもなし、又その中に、この女君にゆくりなうみだれあひて、程もななく遙なる世界に見捨て、漕ぎ離れにし女の心、いかばかりかは憂し耻かしくおぼし入りけ

む、心一つにだにあらず、いちじるさまるしに顯はれ出で、おと姫君を俄にひきこえて宮々に聳とり、事ども變りけむほどを、人々の思ひいひけむさまのこの御心にさしおたりて聞き給ひけむほどの御なき、さまざまにおぼし續けて、さばかり惜しげなりし髪をそぎやつし給ひけむ程は心のうちよろしかりけむや、又かばかりあたらしうめでたき御むすめを、いたづらになして、我を心やましうつらしとおぼしけむ、親の御心のうちを思ひ續くるに、この罪この世に遁るべうもおぼえず、やがてそのまゝに世を背き給ひにけりとして立ち離れましかばさてもあるべきに、このあたりを限なきよると定めていで入するを、大將もいと嬉しとおぼされたんめり、女君も今はさるものにうちとけ給へるめるに、並々ならずやんとなき事出で來なむを、我がうちうちの志はさりともおろかあるべきにあらねども、必ずさやうの事ありなむ、さらざらむさまにいかでのどやかなるすまひになりなばやと、さりげなうおぼいたんめるに、さればよとはしたなうおぼされむと、世に知らず心苦しうある人々の思はむ事をおぼしやるに、あらまし事さへ涙落ちつゝ、我が心も行ひをし山ふみしあるかむも、唯心にまかせたらむこそこの世のとどころなれ、愼みつくろひて居たらむほど、ならはぬ癖はいと苦しかるべし、人づてにだにあらず仰せられつるをいか申しやるべからむとち々に思ひあまりて、女君に、「かうかうの事こそ仰せられつれ」、我が思ふやうなど、泣く泣く聞え給ふ。女君、かゝるさまの身にてはかうち添ひ聞えたる、あるまじう、おとぎも見苦しき事と思へど心になはぬ心ちして思ひわび、又あはれにねんごろなる御心を、せ

めてもてはなれ遁れやらむことも、さのみさかしきやうに人々のおぼさむこともつゝまし
う、えあるまじき事にてこそあれ、我はともかうもさるべき事と思ひ知りてありぬべし、人
こそ心えず、思ひ歎かむかしとばかりおぼすに、もとより住み離れなましには劣ることかな
とおぼせどいかゞはのたまはむ。」などてかよのつねならむにてだにもこゝに憚り給ふべき
事にてはあらぬを、まいて今はなかなかあいなくこそ。」とおいらかにおぼさむいらへ給へ
る、心のうちしもあはれに思ひやるに、猶つきもせず隔てそめにし限をのみ聞え給ひて、よ
ろづの事残りなうかたらひ聞え給ふを、かうやうけんの後御事はかりをぞ、猶残い給へる
事なる。中將の乳母の、あづかりのわか君の事をも、「夢のやうに唯一目見し人の許にかゝる
人なむあると聞きて見しに、らうたげなるさまのしたりしかば取りはなちてゐてまうで來
しなり。やがて預け奉らむと思ひしかども、暫し外の世の人と人に知られじと思ひ侍れば隠
し置きて侍るなり」とて、忍びつゝ見せ奉り給ひけり。世に知らずめでたき御さまを、らうた
うおぼして、姫君をばうへのとりはなちて、片時も放ち聞え給はねば、「入りぬる磯の心ちす
るなぐさめに、常にあらせまほしうおぼいたれど、暫し人繁う見せじと思ひ侍るなり」とて、
わからさまにのみぞ渡し聞え給ひける。唐國の御事は忘るゝ折なければ、吉野の山を心にか
け給へれど、よろづに紛はしき御身なれば、遙なる山路思ひのまゝにもふりはへ給はぬ事々
おぼしあまりて、八月十日よひの程におはす。道すがら、あはれたれゆゑかゝる知らぬ山路
を尋ねありくぞと、風のつてにもいみじう知られ奉らまほしう思ひ續けいと物悲しう分け

入り給へば、風のけしきも秋になりけり。あはれはことに見ゆるに、千草の花のいろいろも、
都より殊におもしろくてあはれぞ深く哀られける。近うなるまゝに松風にそひてきんのね
空に響きて聞えたる、すゞろ寒う心すごきに、かうやうけん菊見給ひし夕は、ふと思ひ出
づる涙もとまらず、立ち隠れて聞かむとおぼして木の下にやすらひ給ふ。末つ方になり
ければ、おともせずなりぬ。他かず口をしうこの度はいとようつくろひなされて、よのつね
の人の心ぼそきすみかと思えたり。よろしき人だに、見えぬものならひたりし年ごろは、
さるものゝすみかにてあはれにめでたかりし御有様を心にかけて思ひ出で聞え給ひて、今
や今やと唐國の御かたみとも思ひ給ふに、いとゞしき秋の夕かすかにきり渡りたるほど、い
ひえらずめでたう清らかに立ち寄り給へるは、心惑ひもせらるばかりを見奉り給ひける。
「鳥の音も聞えざりしに待たるゝはいつにならひしひとめなるらむ。心ちがらもうちつ
けに、怪しきまでこそ」とのたまふも、いとあはれにおぼして、

「三吉野の山のかげぢにいく千たび思ひおこするこゝろきつらむ」など聞え給ひて、今造
り添へられたる廊におはしましてうちやすみ給ふ。吉野のみしやうのつかさども御まうけ
などして、このたびは水のながれも石のたゝすまひも、いたうつくろひないたれば見所ま
りて繪に書いたるやうなるに、月いとあかう澄み渡りて今宵は十五夜ぞかし、あはれこそ
今宵、ひやうさうの月の宴に、いろいろにおもしろかりし事どもよりも、後のきん彈き給ひ
し御かたち有様琴の音、只今見奉らむ心ちして、常よりも涙の残りあるまじう流れ出で、

「玄をりのほかの」と、押し返しつゝ、ずんじ給ふ。玄みかへり給へる御聲の山の鳥ども、おどろかい給ふべし。今宵しもこゝにていつよりもけに涙を流し心碎くも、折ればれに思ひしられて、こなたに渡り給ひて昔今の物語聞え給ふも、この度はかたみにこよなうおもなれ給へる心ちして、心のへだてなく昔よりの事どもかきつくしながらへわびて、後の世をだにと思ひとり、「いとかうなすらひならぬ山の奥に、尋ね入り侍りしよと、残なううきめ見盡しける契かなとたぐひなう聞かせ給はむゆゝしう耻しう侍るべけれど、思ひかけず淺からず尋ね知らせ給ふもさるべきにこそと、いとあらはに思ひしられ侍れば、何のことととき隔かは残し聞えさせ侍らむ。ひじりの問はずがたりにもおのづから聞えさせ侍るやう侍りけむ。さばかり憂きものにこそ思ひ捨て侍りし世に、猶しも思ひ捨て難きはだし、つよき人の身にそひて侍るを、親と聞えし人世にゐるかひと思ふやうにこそ物し給はざりしかど、あとはかなからぬ程にて立ち添ひ給へりしに、そのゆくへをだにかたもなくさすらへ侍りにしを、今こゝにかゝる奥山の苦のころもに身を隠し、松の葉に命をかけて侍る身にそひて、雪のうちへのみうづもれ侍りつゝ、おひたち侍る人の宿世つたなう、又かゝる身にはげにかゝる山の鳥などのおなじ事と思ひ侍れば、何かいとほしかるべきに侍らねど、世に侍らむ事の残りなうおぼえ侍るを、命はかぎり侍ることなれば立ち隠れ過ぐし侍らむとの残り多かるありさまは、いと世に類ひなう思ひやられ侍りてさすがなるを、いかでかくだにのつゆも心をわけてひたぶるに願ふ道の光をも思はむと念じ思ひ給ふるに、思ひかけぬにかう立ち寄り尋ねさ

せ給へば、ざりとも何となう侍らなむ、草のいはりのすみかは尋ねさせ給へるめりと、これこそは心きよう、ひとへに念じ奉る佛の御しるべし給ふなんめりと心え思ひ給ふが、この月頃は涼しうて今なむ心をしづめて佛をひとへに念じ申し侍る」と、言ひ續けてうち泣い給へる、聞くにいみじうあはれに悲しう「唯うちしめたらむはうちつけにおのづからあさはかなる心に任せて、尋ね聞えさせるとぞ思しめすらむ。これはさに侍らず。委しき事申し侍らむも、山鳥の耳もおどろかしうくだくだしう侍るべし。うちうちに皆思ひ給ふる故深う限なき心をするべにてなむ、尋ね聞えさせ侍る。されば何事も露ばかり淺う推し量りおぼし召すべきにはあらず。かゝる御住ひに、はかなう心苦しう承りしより、一所こそさまことに御思ひ深うてさても過ぐさせ給はめ。若うおはしまさむ人はいかでかはさる御すまひはと、心ひとつに思ひ給へあまりて、これより淺うは出でさせ給ひなむやと始めも申し侍りしなり。つゆ世に廻らひ侍らむ限は心の及ばむ程の御志の深さにまかせてうしろみ聞えさせ侍らむ。更にその御事露にてもうしろめたくな今より後は思ひ聞えさせ給ひそ」とのたまふを、「尋ねさせ給へる御志の深さを少しは推し量られて侍るにも、猶定めがたう、哀に悲しうのみなむ。さてもかう聞えさする人はかばかりうき身の名残なれば、よのつねびたるすまひ有様にてあれとは思ひかけず、唯この御すまひながら、世にあると聞かせ給はむ限、松風にくだけやうせにし雪のしたには、埋れにしなどばかり、吹く風飛ぶ鳥につけて、問はせ給はむばかりに侍れば、人めきて世にすぐせとも思ひ給へ侍らず」などのたまふも、げにことわり

にこの世ならず思ひやらるゝ人の御有様なり。世の人めき、すきずきしきかたは、なほぼしめしよらせ給ひそ。世にならわはれにし給ひし親に後れ奉りにし後、かゝる御さまにてすゞさじと思ひとり侍りながら、母上の又慰め給ふべき類ひも侍らぬばかりを思ひ給へといこほりて、例さまにて過ぐすやうも侍れど、心ばかりはこの山よりも深う住み離れまほしう思ひくらし侍りて、さてもろこしまであくがれまかりしが、今はこの山にてなむ、身をもかくし跡をも絶えむと思ひ給へれば、いかなるさまにても、この御有様を離るべきにも侍らず」とつきすべうもあらず心深うあはれなる御物語に曉方にもなりぬ。ごやの御行ひに、御堂に入り給ひて、姫君にも、「かゝる住ひなる人の、むげに引き入り、あまり物遠きやうなるも、すさまじきものぞ、人によりてぞ心もつかふ。これは誠におしなべていかになどすゝろはしう思ひ聞ゆべき人にも物し給はざんめり。物の給はゞ御こたへなど聞え給へ」と教へおい給ふ。明け行くまゝに、月いよいよすまみまさりて、瀧の音も松風の響も取り集めたる心ちするに、何のへだてなく人あるべしと思ひやらるゝ心ちするに、かゝる所に朝夕うちながめいかに物思ひしられ給ふらむなど思ひやられて、

「住みなるゝ人はいかにかながむらむふかく身にしむ山の端の月」とのたまふ。御こたへをよろしう聞えつべき人もなし。わりなうつゝ、ましうおぼしわづらひて、さんにて、

「おく山のこのまの月は見るまゝに心ばそさのまさりこそすれ」。いとよう聞えてかきならし、几帳の下より、やをらつまをさし出で、やみぬ。からぐに、て後の弾き給ひし二度聞

きしより外は、をさをさ耳なれざりし物の聲を、深き山の末にて澄める月にほのかに聞きつけたるは、めづらしういみじきに、命も盡きぬばかりに思ひ出で、聞ゆる人の御聲などをほのかに聞きつけ聞えたらむ心ちして、いと悲しう胸騒ぎて飽かずおぼゆ。さうじみの聲きかせむもうたてありなど思ひ煩ひ、さんにて答へたまふ思ひやりはやまがつめかず、心まさりしてをかしければ、「これはたゞさてのみやは。今ひとかへりうけ給はりといめてこそ」と度々心もとながり給へれど、それより外は音なければ、かへすがへす言ひ煩ひて、琴ひきよせたれば、常に弾きならし給ひける人の、うつりがなつかしうしみてしらべられたりけるを、掻きまさぐりつゝ、後の弾き給ひし折々思ひ出づるに、月の光もかき曇りぬる心ちして、涙といひるかななし。

「唐國のきりふの岡の松風の吹きしに似たることを聞くかな」。この御聲に、御堂よりも念佛といめて出で給ひぬとぞ。』ことならば松風のおとをもよの常に尋ねよりて心の慰むかたもやと思ひよらましを、唯かくのみと野山にまじりつゝ、心の静まるよなくあくがれ惑ふをも帝は知らせ給はず、かたはしうち出でさせ給ひにしことを、かく位にある程めづらしに限なきことゝ人も心動しつべきほどに、すがすがしうおぼしめした、せ給ひて、年のうちに召しよすべきやうに聞くに、げにさやうならむこそは昔の御おもひ叶ひておもだゝしく心も行くべき事なれど、かゝる世の定をうちさゝ、大將殿は胸つぶれて、かうはまじらはどのどかなるすまひにうつろひなむとおぼえたりしものを、わがあしうせめて諫め聞えけるか

な、うちうちの御心のなさげこそ絶えぬ事にてありとも、かう別る、方なき折のやうにもあらじとすることぞかしとおぼし亂る、氣色もしるく見えて、女君、我が御有様をあるまじき事におぼし知りにはかば、何の心動くべきふしはなけれど、人々の嘆き思へるなどを見給ふもむつかしう、とにかくにうき身のありさま所せう心愛かりけるかなとおぼすも苦しげに、常よりは離れたる御堂の方に、おぼしすみたる御心のわはれに心苦しければ、さはれかし、世の中を常にてあらむと思ふ身ならばこそせめて世に従ふ心をもつかはめ、あるに任せてあらむ程は、心苦しき事をだに亂れ思はず、人にも思はせ奉らでとにあらめ、衛門の督のものとらへの人々の嘆き思へりし氣色は諫め静めながらも、うち歎きおぼしたりし有様の心苦しき聞きしは、すべていみじう罪えがましういとほしかりしものを、誰もこそは思ひ諫め、とおぼし續くるに、めでたかるべきといとあいなくおぼして、月の行くへたづねし中將の内侍は、うちの御方にもかけて侍ふ人なれば、物語のついでに、「もろこしにてかしくかりし相人どもの、廿四五六過ぐさむとなむいみじう難げなるとあまたいひし折に、みづからの心にも、昔より世にあるべき人はかくはあらじものを、すゝろに心の浮びたるやうなるはと思ひ渡り侍りしに、さうしおぼせられぬる心地して、いみじう物心ほそらおぼえ侍れば、三四五年がほどは、行ひより外の事なくて試みむ。その程過ぎなば世にあるべきと思ひしづまりて、その折にともかくも身をば思ひ定めむと思ひ侍りつゝ、さるべき人々うち氣色ばむ事ども多く侍れど、聞き過ぐしのみし侍るを、身に餘るばかりかしこき御氣色を限なくう

け給はるも、それよりこなたは、さやうに馴れ仕うまつらむいみじう憚られ侍れば、その程は宮人になさげおはしまして、朝夕の宮仕を怠らず務め仕うまつらむ程に、世にありなしの命のきは見え侍りなむかし」などのたまふを、限なく思ひ定め給ふなる。おまの蓬屋より外のこととはまた心あらじとなんめりかしと心得るも、推し量り心にくう、いかばかり物し給ふにかあらむ、世を背きかはれる有様ながら、なほよこめせじとばかり、かたじけなき御事をば省きすて給ふめる目ざましきよとあさましくおぼえて、

「いかなれや浦島にのみ波かけて高瀬の濱によらじとはする」といふをうち笑ひて、まめやかに心細き身のうれへを聞ゆれば、「さもあさましう」とうらみて、

「長濱やながきこゝろを思ふまにあやふみかゝる波のたかせを」など答へてあかれぬ。内侍上の御まへにて、「この中納言、もろこしにてめでたき女どもをあまた見て、いみじとおぼし入りて、語りし氣色のおぼろげならざりけるに思ひやられて、さる事どもを見ければ、いと此世の人には心もとまらざんめるに、大將の朝臣のあまむすめこそ心にくけれ、今はさま異になりぬるとも思ひ放たず、さばかりいみじき人々を見て歸り來たるなごり、限なきよるべと定めてあるよと仰せらるゝついでに、相人のあまたしか申しければ、そのほどまでは、定めたるよるべもあらじとなむ思ふと申して、限あらむ月日を待ち過ぐさむ程は、姫宮の御方人になりて、大方の宮づかへを朝夕に仕うまつらむとなむ申し侍りし」と奏してける。此の事を限なき事と受けひき、思ふ事のなきにこそあんなれと聞き召すにいとけやけ、

れど、「人ぎ」にはげに久しくさへあらじと見ゆる人ぞかし。げにげにさもありぬべき事ぞかし」とおほやけしう仰せられなして、み心のうちには、としよはひくらゐのきはも、又あさはかにかろがるしうはおぼゆれど、唯人柄のめでたき事ばかりにかうてあるほどに、さやうにて位を高くなさむ事は我が心なりとおぼしよらせたまへるを去る去るを去る去るに思ふにてはあながちに召し寄すべきにてあらずとおぼしめしとめさせ給ひて、御装束の事ばかりを猶急がせ給ひつゝ、中納言の事は音なくなりぬるを、中將の内侍奏してけるなんめりと心得て、女君にも聞え知らせ給ふ。世に隠れなうひがひがしと、人々もどき聞ゆなりと聞き給ふ事なれど、すべてよろづを開き入れ、思ひ知り顔ならむも今は似げなきことなりとおぼし棄てはて、唯御行ひにのみ心を入れ給へり。大將殿はひとへに珍らかなりける人の御心かなと、涙さへ落ちておぼされけり。吉野の山の入道の宮の御事のうちしきりゆめに見えて、心にかゝりつゝ、つねよりも覺束なければ、よろづを棄て、十月朔日頃におはしましたれば、九月十餘日の程より例ならず惱しくし給ひけり。物などのたまふ御聲なども弱げなるを聞き驚きて、「人は覺束なからず参らするに、なかかかくなどのたまはざりつらむ」と恨み給へば、「何とかは事々しく、風などにこそはあらめ。今やみなむすと思ひ給へるに、いと苦しさのみまさり侍れば、世の盡きぬると思ひ給ふるにも、今一度見奉らまほしう侍るに」と、うち泣き給ふもいと弱げなり。「さまでおぼしめしけることを、なかか例ならずと仰せらるゝ事侍らざらむ。参り侍らざらましかばさて止み侍りなまし」とて、やましなでらなる僧と

もの中にさもありとおぼしき、召しに遣して、日々に尊き事どもをいはせて聞かせ奉り給ふ。ほとけ供養じ、ひじりのでしどもなどして宵曉に、織法阿彌陀經など讀ませ給ふ。枕ちかうて、聲たふとき僧どもして經の聲絶えず讀ませて聞かせ奉り、唯我が御心にせまほしうおぼしめしける事どもをせさせて聞かせ奉り給ふに、こなどのあらむやうにうち添ひて、おはれにたのもしげに、この世も彼の世も思ひやり深うあつかひ聞え給ふを、ゆめに見しやうに佛の御方便かぎりなう、もろこしの後のまことのかたみにこそ物し給ひけれと、哀に悲しくおぼし知られて、念佛のひまひまには、近う入れ奉りて、「とまり侍る人のうへは聞えおき侍りにしかばうしろ安く思ふ給へて、年ごろのほいのごとく、ひとへに今は佛を念じ申すが嬉しきこと」といと弱げに喜び給ふもいとおはれに、猶今しばし世にあらせ奉りて、思ひやる方なく他かず悲しき人の御かはりには、心ゆくかぎりあつかひ聞えて、胸のひまをいつしかあけむところを思ひつれ、かくてとぢめ給ひてむには、いとあかずこれさへもわびしうもあるべきかな、此の度の命は猶かけとめばやとまめやかにおぼし念せらるゝに、十五日のつとめて、姫君を「今日はこなたになおはせそ、さ思ふやうあり」とて、ことかたに渡し奉りて、阿彌陀佛の御前にいと弱げに脇息にかゝりて、ひとへに念佛をし給ふ。人々、「今日はよろしきなんめり。脇息にかゝりて居暮し給ふ」と喜びあへるに、夕日の陰になる程、ひじりを呼び寄せて、「かくの聲こそ近うする心地すれ。念佛の聲たゆまずさせ給へ」とて、聲々あまたたゆみなくせさせ給ひて、我も念佛をし入りつゝ、脇息に寄り居ながら、やがて絶え給ふを見る

程に、いひしらすかうばしきか、このほどに匂ひて、紫の雲この峰のほどに立ちめぐりたりと見驚く。今日はよろしと見喜びつる人々、このしなの上に昇り給ひぬる嬉しさもおぼえず泣き感ふを、中納言しばし庭におりて椽におしかりて、雲のたすまひ満ちたりけるかほりも、おとにこそかゝる事は聞きつれ、珍らかに新にわはれなることを見つるかなと、羨しう悲しうおぼすに、うちには「姫君絶え入り給ひぬ。いかゞ奉らむ」と言ひさわぐ者もおぼし感ふ心まよひにもせさせ給ふならむ。さりとて限あればいと御心あわたいしきやうはなきわざぞ」とのどめて、僧どもに「かれよりて護身参り給へ」と、椽に立ちながらのたまひて、おきし續くるに、さきの世にさるべきにこそ、すゝろに思ひかけぬこの人を尋ね出で、ねんごろに思ひあつかひ、聞えまほしき心の限なうわはれに聞き渡りしかばたえまなう思ひおこせしかど、この頃は思ひ立つべき事にもあらざりしが、すゝろには覺束なうおぼえて、かゝるをはりの折に來あひつらめ、我が心にこそ限なき事と思へ、風のきゝみはすゝろなるけがらひに籠りて、かゝる山に籠り居たらむ、あまりにひがひがしうびんなかるべき事なれど、うち思ふ世に人多かれど、もろこしに渡らむと思ひより渡る人多かりけれど、我ばかりの人はいと難かりけるを、かうやうけんの後に契を結び聞えさせけるえんのふかりけるに引かれて、例なきあをを改めて、我が渡りてわひ見奉るべき宿世は遠かりけれど、この若君の生れ給へる契思ふに、さすがいみじう深かりけり、かの後の親のかくなり給

ひぬるをえ知り給はで、榮華え耀に戯ぶれ花紅葉をもてわそびて、まやうじなどもせでおはすらむ、罪深きことなりかし、この後の御かはりには、わがこの御けうを送るべきも、身に取りとこの後の御事はかりおぼゆる事、さし方は更なり、今行く末にもあるべきやうもなし、いみじき心をも人につけ思ひおはしむといふとも、同じ世の中の事いまだ身に餘るべきならず、かばかり覺ゆる事ならば、つかさくらむをとられ、おほやけの罪に當らむ、苦しかるべきにあらず、ましてひがひがしうすゝろありといふ世のもときそしられめ、それをば何か願みるべき、かばかり我が心からかうも思ひやすらひおりて立てる悲しとおぼし續くるに、よろづ知られ給はずのぼり給ひぬ。何かはつゝましう、いかゞ人見むと憚りおぼさむと、心置くべきあたりならねば、姫君おはすると見る方につゝみなく入り給ひて、几帳のもとに寄り給ひて、「さていかゞおはします。人あまた侍らふや」と問ひ給へど、はかばかしき人しなかりければ、おぼゝれてのみこそあれ。近う入り給へれどかゞやかしからずはかばかしきいらへもせねば、「いで、あな、わやし、などいらへは去給ふ人はなきぞ」とて、几帳をかき上げて見給へば、白き衣どもに蘇芳なめりなよらかなる着てきぬのかぎり見えて臥し給へる傍に、髪ぞいとこちたくたゝなはりたる。すべり入りて探り給へば、息の通ふ氣色もなくかひなども冷やかにあたる。いといと淺ましく、ゆくりあうさし寄りぬるもいとほしうまばゆけれど、聊はかばかしき人もなければ、もしやとさるべき僧など此方にも召し入れて加持せさせ經讀ませ願など立てさせて、うちは暗うなりにたればさやかに見えぬに、われか人かにて

うち臥したるさま、あたりのいみじうあてにおはれげなるに、今少し惜しき心も添ひて、「何か我をばはづる。いとくらし。火近うもて參れ」とて取り寄せ給へど、少しも物おぼえ、ひとひとしき人のあらばこそは、物のまぎれと言ひながら、いとまばゆいかつと、さるいみじき人と聞ゆとも、用意する人のあらめ、何の思ひやりもなく、かばかりかすかなる有様なれど年ごろたのみをかけ奉りて、過ぐしつる人はなくなりて臥し給へる、その御名残と思ふべきは息もかよはずおぼえぬ御さまなれば、とにかくに思ひやる方なくはれ惑はるゝに、唯この殿、かうて入りおはしたる、さりともし生け奉り給ひてむと、佛などのあはれみを垂れ給はむやうに命をかけて思ふまゝに、火近う取り寄せたれども、物おぼえぬさまにて、うちみじろき顔ひき入れなどもせで誠になさひとのやうにて臥し給へる、顔隈なう白うをかしげに、こゝもところ少し後れたりけれと見ゆる所なう、あざあざと美しくしげに、わけめかんざしひたひのきはなどに至るまでめでたきを、あさましうあはれとまぼるに、涙更にとゞまらず。つと添ひ臥して、佛を我もいみじう念じ申して、顔に水をいさゝかかけなすれど、猶同じさまにていと心もとなし。とりあつめいみじき目をも、ひとかたならず見るべきかなと思ふに、人さまの世に類ひなくをかしきに今少し惜しう悲しとおぼさる。宵もや、過ぎぬらむと思ふほどにやうやう暖まりゆく。氣色も少しなほりぬるやうなるに、いみじう嬉しくていよいよ佛を念じ奉りてまぼるに、つゆばかりうち身じろき、目ほのかに見上げて、火のいたう近きに、例ならぬ人のつと添ひ臥して、顔に顔をあて、涙を落しかけ給ふもやうやう思ひ知

るべかめれば、顔をやはらほかさまに向けてひき入りつるにぞ、ことごと物覺えて生きかへりぬるなりけりと、嬉しき事限なし。人々はえ寄りつかず、知らぬ人は耻しう疎かるべきに、うちあづけ聞えたるもわはれなる人の御さまなり。ものおぼゆるなめりと見えて、後は顔もいと引き入れて、涙のみ流れ出づるさま、猶消えとまるべうも見えぬ人のさまかなとわはれにうしろめたければ、立ちものき給はず、人を召し寄せて御湯などまゐらせ給へど、いさゝか見入るゝ氣色もなし。ことわりぞかしな、わがをのこにてかばかりかすかなるにてはあゝいざりしだに、故宮うせ給ひぬると見し程の心ぎは、物やおぼえし、いみじなど人の言へど人は猶よのつねにこそあれ、さまことにたのもしげなかりし人を頼むかげにて、かばかりづきも知らぬ奥山に、おひ出で給ひたる心儀に後れて、げに何事かおぼえむと、あはれにしたことわりなさまさま盡きせぬかたみ、唯この人にこそあめれと思ふ志は、唯いひしらす恐れにて、つものなど生ひたりともうとましよう思ひ遁るべきにもあらぬに、つくづくと見つゝ、傍らにたゝなはりたる髪掻き出で給へれば、いたゞきよりすゑまで露後れたるすぢなく、誠にきんの漆なんどのやうにかげ見ゆばかりつやつやとして七八尺ばかりうちやられたる末は五への扇を廣げたらむやうに、世に知らずめでたう、顔ひき入れながら臥し給へる有様のめでたうらうたげにをかしき氣色、限なき人さまなるに、同じ人生み出でたりとも、唐國の後はさるさまことなる契おはする人にてすぐれ給へるにこそありけめ、これは何ばかりの事かあらむと思ふやうになぞらひよる事あらじと思ひあなづりしを、唯うち見るがあはれ

にいみじうおぼえて、立ち離れむともおぼえず。いたく日ごろ経べき事にもあらねば、見渡しなる峰の上に、ひじりに語らひ給ひけむゆるごんのまゝにし奉りつゝ、いみにさるべき人々僧どものざえありさとり深う尊きあまた籠め給ひて、後の世のうしろめたかるべき思ひはなく、新に尊かりし人の御最期なれど、猶しも等覺の菩薩の位にとく定まり給ふばかりの事どもを、おきてさせ給ふさまの心深き限あり。京には、母上尼姫君の御許に、「思ひかけぬあやしきけがらひに罷り籠りてなむ。人にはともかくもな聞かせ給ひそ。行ひに山寺に籠りたるなど仰せられよ」など、こまやかに聞え給へるを、母上、「いかなりけるけがらひにか。いといまいます。さやらの事はまがまがしうおぼすべきに、すべてよからぬ御有様を見るがわびしく、とく隠れなばや」と聞え給へるを何かゆゝしうおぼすべき、かばかり常なき世を、此の世はげにいと人よりは口惜しう、世にさすらひ給ふやうに物し給へる人なれど、後の世とり給へるさまこそわはれなれなど覺し續けて、我もいとわはれにうち行ひつゝ、ながめ明し暮し給ふ。春秋はさてもありけり、この頃の嵐の烈しさ、松の響きえあひて、木の葉のきはひ散り、晴間見ゆる折はすくなく、かきくらししぐるゝ程の心ほそき、山伏ならねども、涙とどめ難うわはれなるにも、まづもろこしには、わがかくおほやけわたくし忘られてこの御けうを送ると夢のうちにも知られ奉りたらしむはしも、わはれとおぼさゝらむやうはあらじ、かゝることやはあるなど知り給はで、さんうち弾きなどしてこそながめ給ふらむ御かしと、悲しうおぼしやられて、

「思ふべきおもひをひとり思ふにも行きて語らむまぼろしもがな」この天の下にも人は多からむものをふり捨て、遙なる夢のうちの契に思ひをしめ奉りて、心地わはれに悲しとも心ぼそし。珍らかなりとも唯一人の御ゆかり、さまさまにも悲しき目を見盡すかなと、事紛るゝ方なきまゝに思ひ明しつゝ、我なからましかばこの姫君いかに侘しういとゝおぼえ給はまし、うち添ひたる限はみじろきをだにせずつゝ、まじう耻しと思ひながら、たのもしき方にはさりともおぼえ給ふらむかしと、わはれなるまゝに「この世の常なき有様に、かゝる、おくれさきだつ程の思ひなくやはある。されど限ある世のならひとなりぬればいかにいふかひなく思ひ慰むること世の常なれ。かくのみ沈み過ぐさせ給ふを見侍るこそ侘しくおぼえ侍れば、いとかく絶え籠りうち添ひ聞えさせたるをすゝるなるやうなれども、少しはわはれとおぼしたる氣色ならむこそかひあらめ」など、けはひめでたくうき泣きて、盡きせずのたまふを、いとありしやうに物おぼえずはあらず。やうやう物のさこえ、目も見る程になりたれば、さばかりいみじう耻しげにておはする人の、いかにいとけぢかうなりたりし、うちとけのあさましげなる有様はいかに見給ふらむと、耻しういみじながらも、この頃のよも嵐の吹きまよふ心のすこさは、あまたとし耳馴れにしかど、この程の嵐の音は思ひやる方なく、聞くたびに心も碎け物恐ろしきに、この人の物もうち言ひ、經などを讀みて添ひ居給へれば、たのもしき方におぼゆるも、思へばいと世に知らず珍らかにおぼすにも、戀しさ嬉しさかきくらしつゝ、何事も思ひわかるべき心地もせずのみ沈み給ふを、いと心苦しうわり

なうおぼしわびて、几帳押し遣りてながめ出し給へれば木々のこのは残りなうなりたるに、雪うち降りて鳥どもの立ちさわぐ氣色もいとあはれにて、「鳥ははやしとちぎれり、林枯れぬればとり」といとおもしろうずんじ給ひて、この人を例さまに思ひ慰めさせて、少しうちとけ見なれて、かやらの空のけしきをも鳥のさへづりをも共に見ばやと心もとなくおぼえ給ふ。

「冬ごもりよし野の山にゆきふりていと人めや絶えむとすらむ」。山里などいへど少しけぢかうよのつねなるもありや、おぼろげならずおぼしとりて入り給ひけむかひありて、誠にわらたに尊かりし人の御最期かな、をとこなるひじりだにいとかくいちじるき事は難かるべかんめるを、かばかり思ひ取りて淺からざりけるはだしを置きながら、いかでいと底清く覺しすましけむと思ひやるもいとあはれにめでたし。御わざの事などよろづとりもちて、さらなりや、又は誰かはありがたうおぼし取りせさせ給ふべき。雪はいと日を経て積り行くに、御いみもやうやうはてつ方になりゆくは、さてのみえ堪へ籠り給ふまじければ京に出でなむとおぼすに、この姫君をいかでか見捨てむ、はかばかしくいさゝか物おぼえたる人もなかめり、いみじき志思ふとも、雪降り積りたる山道をさのみ立ちかへり、え渡るまじう分けあるかじを、親の御かげにてのみこそはおのづから過ぐし給はめ、今は片時もよもわとめ給はじと、我もいみじう見捨て難きに、引き續きて出でむも悪しかるべし。おはしどころなどさるべきやうにてこそ迎に來めとおぼすにもいとうしろめたら覺束なきに、おぼし煩

ひて若君預りたる中將の乳母のおと、のかんつけの國の守の、國にてありけるが、國の事どもなどもしみだれて、露の残りもなくわろびたる世をありわづらひて、さるべく樂しかるべきよすが求めてかきうつろひ、名残なく忘れにたるを思ひ歎きいかならむ見えぬ山路もかなと、なくなき十七八ばかりなるむすめの、いとをかしげなるをもに添へて、かの中將の乳母の影に隠れて過ぐるを、心ばへといひ預けたらむに人おろかなる思などすべくもわらず、哀なるべき人々をとおぼし出で、「あやしうおぼすべけれど委しき有様はみづから聞えむ。必ず若き人具しておはせよ。うしろめたき事はよも聞えじ」と返す返す書き給ひて、迎へに遣したれば、あやしう俄にいかなることならむと思へど、姉のゆかり、この君の御かげをたのもしきことに思ふ身なれば、淵にとありともいなぶべき方なきに、中將の乳母も、「悪しきさまに見苦しからむ事仰せられむやは。さらば唯疾く参り給へ」といふ。中納言は、姫君に「日ごろ御身に添ひかげのやうにて離れ侍らぬ時も侍らねど、いよいよ恐しううとまじきもののみおぼされたるはいとうらめしけれど、かくてのみえ閉ぢ籠りては侍るまじければ、いで侍りておはしますべき所などさるべきやうにて、御迎にと思ひはべる。あからさまの程もいとかうかすかなる御有様を見捨て奉らむことの、いと侘しう後めたらう、覺束なう侍るに思ひ煩ひて、えざらぬもの、侍るを、あからさまに立ち入りて侍らむ程の身の、かばかりに迎へ奉らむとて迎へにやり侍りにしむすめなども見苦しからで侍り。例ならぬ人など思し隔て、なつかしうおぼしつかはせ給へ」と聞え給へど、いらへ聞ゆべき詞などもおぼえず

耻しうてうち泣きて顔ひき入るゝ外の事なきにもいとらうたげなるを、ことわりかな、知らぬをとこの俄に一つになりて隔なく、さすがに何のすぢとなくかく添ひ居たらむは、いかでか女のふとうちいらへさはやかにおはせむと、おはれにおほえ給ひて、よのつねならぬ心の程を言ひ知らせ給ふに、迎へ給ふ人参りたり。さるべき方におろし給ひて、「かうかういと心ばそう、身にもはかばかしう添ひたる人も物し給はぬ人のおはするを、京に迎へむにもゑる人ぐし給はでは悪しかるべし。添ひたりける人々もかゝる善からぬ山ごもりに後れじと思ふ人はなきわざなりければ、ちりぢりになりていと心ほそげなるを、この人預りて、中將の、まる思ひたるやうに思ひてうしろみよ。若き人をも言ひ慰めなどして迎に來むほど、この人の御身にも離れて物し給ふべきなり」など、いとねんごろに語り給ふ。何人のいとかうあさまじき雪の中には住み給ひけるをば、いかにして尋ね出で給ひて、限なき御氣色などもおぼろげならぬにこそと覺束なけれど、かばかりねんごろにおぼしたる事をむつまじうおぼして、知らせあづけむとおぼしたるもおはれに嬉しければ、「志の限は御まへさらす侍はむ事はいとやすき宮仕に候ふなるを、知らぬ人などやとけどほく思し召さむ。その程をよく聞え知らせ給へ」と申せば「よもおはせぬやうはあらじと思ひつれど、皆さ物したるなり」とて、姫君に「聞えさせし人参うで來たり。まるおぼし召したるやうには、なうとみ給ひそ。ことひとはあいなく思ふやうもありなむ。思ひぐまありて心ぐるしう物せさせ給ふべきなり」とて、返す返す教へゑるべして呼び出で給ふ。いと俄にあされたる心地すれどいかゞはせ

む。日ごろ身に添ひ給へるたのもしき人よりはと思ひなりて、几帳のとなるはかけの心にくき程なるを、かしらもたげて物聞ゆるいらへなどほのかに芝給へる聲も有様も、いと若ううつくしう物し給ふ人かな、この殿の御心にかばかり思ひとめられ給ふ、おぼろげならじとよのつねに心得給ふ。四十九日などいふ事も唯この殿よろづにおきて給ふを、我は唯涙ばかりに浮き沈むを事にて過ぎはてぬ。いかにながらへ過ぐすべきにかと思ふにもあさましけれど、限ありける事にて、過ぎぬる日數よりはさのみもえ沈みあへず。この迎へ給へる人のおとなしきもわかきも、まだ見ぬさまに人々しう清げなるを見るにも、ありなれたる人の怪しさをいかならむと思ひやり、耻しうつゝ、ましけれども、物を深く思ひ入りてもつくりひやる方あるべき御身ならねば、唯よろづを思ひしらすおほどかなる御氣色も言ひしらすらうたげなり。中納言の日頃添ひ給へりつるには、涙に沈むより外の事おぼえで過ぎし給へるをさのみひきかづき、この人々をさし放ちて、えあるまじきが耻しさに、かまへて思しためらひかしら時々もたげ、御ぐし解きおろさせ給ひ、引きつくりひなどして、むすめのいとをかしくて御あたり離れぬぞ少しなつかしうおぼしなられて、聊もひまあるやうになり給へるを、中納言もいと嬉しう覺されて、先だちて出でむと覺すもいと後めたうて、よるよるのかたはらさびしきなぐさめにもうち添ひて、よろづに契り慰め語らひ泣きて歸り給ふにも、待ちつけ給ひては世になく嬉しきものに思ひ喜びて、のたまひし事どもなどを程遠からずおぼし出づるにも、いとわはれに戀しき事限なし。物にたのもしかりぬべき人々あまたとい

め給ひて、この程たしかにさぶらふべきよし返すがへすのたまひて、立ち歸り給ふべきかたもなし。姫君は迎に參るべきよしを淺からず聞え給ひて、この程の心ぼそさを推し量りやるに、あはれとゞめがたうて、

「君ひとりいかにながめむ見し人は煙のなかの月となりなき」。こゝらの月をろ身に添へる影のさまにてかたらし慰め給へど、いらへなど聞ゆべきかたもおほえず、せきやるかたなき涙ばかりにて過ぐすを、この人さへ立ち離れ給ふ心ぼそさいとうちつけに、又知るべき人もなきに思ひわびぬるにこそと、我ながらたぐひなうぞ悲しうおぼし知る。

「立ちのぼる煙の中にくらされて月となりけむ空も知られず」。いと黒き墨染にやつれてもてなしよしばむともなくて袖に顔を押し當て、そばみ給へるがかしらつぎやうだいな髪のかゝれるかみのつやさかりば世に知らずをかしげにて、ほのかなるけはひなども限なう若うなつかしげなるこそ、まだ見馴れぬ心地する^和や。御ぐしを搔き撫で給へれば、いたゞきより末まで迷ふ筋といふものなく、つやつやとくりかゝりて、うちさの裾にひとしき程さどあるすゑの五への扇を廣げたらむやうなる、あさましきまでありがたくめでたし。かゝる山ふところにかばかりの人のおひ出でけむ、物語などに書き續けたるもいかでかさしも、^和わらむと聞きし、誠にさもあるわざにこそありけれ。式部卿の宮の、さばかりかゝらぬ隈なく我が思ひにかなひたらむ人をと尋ね求め給ふに、え尋ね給はざりけるよ、人よりさきにかゝる人を見つけたる我が契の嬉しきもあはれなるにつけては、かうやうけんの御ゆかりをたづ

ね聞えざらましかばかゝる人も見ましやと、唯一、の御ゆかりのほんたいを思ひ出づるに哀に悲しう、この頃かゝる色にもやつれ給はで一方ならぬ花のいろいろをこそつくし重ねておはすらむかしとまづ思ひつるに、けだかくけうらにあたりも光る心地するさまは納類ひなく思ひ出でられ、この御けはひありさまはやはらかになまめいたるなつかしさも、唯かやうにこそおはせしかと、思ひなしにやいとよくかよひ給へる、あはれにこよなかるべき慰めなれど、いつしかよのつねさまにむつびよらむなどはおほえず。もろこしなどいへどせちなるこゝろのあまりは風のつてにもおのづからさてこそ慰めてあなれど聞かれたてまつらむを、いとそらおそろしう恥しう、又まぎらはすかたなう、一筋に心をとゞめ奉りて、この人を、唯かの御かたみとかしづきて大方の心は慰むとも、夢のやうなりし一筋の思ひはうつろはむ方なく、身をかへてもかの御ゆかりの草木と今一度ならむと念じても、我が心の底清くはこそ、げにあはれとおぼす心もあらめ、この姫君の御有様のかよひめでたきを見ても、かくもとの御心の思ひのみこそいよいよよまされ、それにうつろひ慰めむと思ひ急がるゝ心もなく、いかばかりなりけるにか、いとかく深くおもひしめられ給ひけむさるべきにこそあらめ、さりとらばなどか今一度行き逢ひ奉る宿世のなかりけむと、目の前に見捨て難き志のあはれはさし置かれて、雲のほかの人のちぎりはとのたまひしほどの限なきにつけて、又この人の御あはれいとゞまさり心苦しきもなのめならず、立ちかへり語らひ慰めて出で給ふを、几帳押し遣りて見出し給へれば、雪はいと高う積り今も搔き暮したるやうに降り

重なるに、山吹紅の御ぞに薄紫の唐綾の指貫、白き紋の織物の狩衣、雪うち拂ひつゝ、さし歩み出で給へる御かたちの類ひなくめでたきを、つくづくと見送られて、恥しやあさましやと思ふ思ふおそろしくはおぼえざりつるを、日ごろ年ごろ住み馴れし所ともおぼえず、さびしくおはれることを類ひなく立ちめぐるべき心地せぬや。

「みよし野の雪のうちにも住みわびぬいづれの山を今はたづねむ」。かきくらし眺め給ふ氣色のおはれるを、中納言の迎へ給へる人々、君さへ出で給ひぬればすゝろに心細けれど、この御有様に慰めておはれにおぼえ給へば、御まへ去らで都の物語ども聞き所多く語りて聞かせ奉る。むすめいと若うをかしげにて、物など聞ゆるは今少し懐かしさまざりてうち語らひて、今ぞ立ち出で、尼上のおはせし方などを見給へば、唯ありしながら明暮讀み給ひし經すゝものゝくはありながら、御かたちのみこそ見え給はね。「極樂にまうで給ひていみじき身にてこそおはすらめ」と人々いひけるに、思ひやりもめでたけれど、頼むかげもなく心細き身を捨て給へる身のうらみはつきすべし世なかりけり。降り積りたるうへに猶かきくらし眺め遣る空の絶間だにさきを、このまらうどのむすめ「いみじう心ほそきものかな」と眺め出づるをことわりといとほしう聞き給ひて、

「かきくらし晴れせぬゆきのなかにたゞ明けぬ暮れぬとながめてぞふる」とてうち泣きたまへるさまのめでたくらうたげなるに、たまのうてなもなにならずおもひさぐさめられけり。

「うき世にはふる空もなく住みわびて雪の山にぞ跡をとゞむる」など聞えつゝ、かたみに心をば慰むつまなり。中納言は心の限とゞめ置きて、出で給ひし道すがらも立ち還りぬばかりおぼされながら、姫君若君上などの覺束なういふせき程になりければ、駒うちはやめておはしましぬ。こよなく皆およすげ給ひにけり。女君も日ごろのへだてなく心の外なる山籠の怨などもなく、おはれに思ふさまなる御氣色年ごろ御行ひにやつしはて給ひて、つくろふ所なき御たゞがほの、珍しういみじかりつる人よりもけ高うあざやかに清げにはほひ満ち給へる御かたち有様、この世にこれよりまさる人あらじとおぼゆるにつけても、かつ見つゝ、飽かず口惜しき御おもひ、もろこしの御事にも劣り給はず。おはれよのつねのなからひならましかば、唯大方のむつまじきゆかり淺からずとも、すゝろに山深くあくがれ過ごさましやと御心づからありし事のやうにのみ取り返さまほしう思ひ聞え給ひても、奥山の谷の底に又いかでありがたうすぐれたる人生ひ出でけむとまづ面影に思ひ出でながら、「おぼえなきけがらひに、えさらず行きかゝりて、おはれに尊き事をなむ目の前に見侍りし」とて、紫の雲のたゞすまひなどこまかに語り聞え給へば、「同じくばさこそ心ほそく深からむ山に住み離れて、同じくばさこそあらまほしきを、さすがに心よりほかの身の有様かな」と涙ぐみて「いみじう美しとおぼしたるもおはれにて、すまひの深き淺きにもよらじ。いづくにても唯心からにてこそあらめ。市の中にてこそまことのひじりは無常菩提は取りけれ」など聞え給へば「いと深からぬ心は住ひがらにこそ」とのたまふ。「さかし、げにしゆるふつたらとぞあるか

し。暫し念せさせ給へ。姫君物の心知るまで皆出でば、かく聞えさせるみよし野の山にもさそひ聞え奉りてむ。はかなかりける命のほどぞ知り難きや」と、何事につけても大井の物語のやうに共にがくの聲を待ちつけむとのみ契りかはし給ふさま心深くおはれなり。大將はさばかりそばそばしかりし御中の名残なう、今はいみじう随ひ聞え給へるまゝに、おやがりはて、
 「あまり世にすぢかひてすゝなる山籠りがちに物せさせ給ひ、ひがひがしきやうなり」とむづかり給ふも、今はいと苦しかりけり。雪の山の人さそひ出で給はむ事、この宮のひんがしの對など善かりぬべく、女君にも心うつくしう有様語り聞えて、ひとつ心におぼしぬべき方々、覺束なからで善かりぬべけれど、内々の有様を知らぬ人は、さればいみじう思ひたれど、つひに肩をならぶる人出で來ぬめりなどいはむも苦しう、この人々も、さぞやすげなう思はめ、うちの御事をだに慎む程は、よづきたる事はあらじとかけ離れ聞えて、程も經すがくなど聞し召されむ、いとあまりひがひがしうびんなかるべければ、かたみの若君隠しすゑ給へる中將のめとのこの御里いと廣く清げなる家なれば、そこを忍びてさるべきやうにつくろひて、御調度などせさせ給ひて、年の内にとおぼしそ。女君には、「例のよのつねのさまに、いひなし侍らむすらすむ。又頼むかけもなかりける母君に後れて、心ぼそくさる奥山にひとり過ぐさむ事をば母のいみじう言ひ置きしかば迎へていもせと思ひ侍るなり。御まへにもさやうにおぼせ」など語らひ聞えさせ給ふ。「みかどのさばかり覺したりし事をだに遁れ侍りしかば、それよりほかの事は、げにさこそはと推し量らせ給へ。心のはどを

もさりとも御覽じ知られぬらむかし」などのたまへば、「かやうにのたまはするなむうたてなかなか我が心の程も推し量らるゝ心地する。かゝるさまならずとも露も物しう思ふべきことかは。さすがにつれづれなる折々もあるを唯こゝに迎へ給へかし」とのたまへば、「さなむと思ひ給ふれど、人の物言ひのあやにくに侍れば、うちに聞かせ給はむ事も、御ためも、又かたがたはいかりあれば、忍びたる所にと思ひ侍るなり。うへにだにいまだ知らせ奉らぬ」など、例のあはれにうち語らひ聞え給ひて、み吉野へ人奉り添へ給へる人々にも、この程の覺束な返す返す書き給ひて、「御前去らずよく慰め奉れ。その日ばかりになむ御迎に奉るべき」とて、さぶらふ人々もひきつくりふへさよういなどとさへ到らぬ隈なくおぼしよる。姫君の御許には、

「消えかへりおもひやるとは知るらめや吉野の山の雪のふかさを」とあり。御かへし、青にびの紙に、

「經るまゝにかなしさまさる吉野山うき世いとふとたれ尋ねけむ」。墨つき筆のながれ、まことしうじやうすめきてうつくしきをかたちはさこそさきの世の功德のむくいならめ。さるひたぶるに世を棄て給へりしうへの御かげにて、いとかう手をさへ書きすぐり給ひけむと、あさましきまでうち置きがたく見給ふ。かしこにはまらうと、その程には御迎へにおはしぬべかんなりとてふる人たちにさる用意せさせ、「御しやうぞくはいまもておはしましなむ。御ふすまをなつかしかりぬべく」などよろづにいそぎたるを、言はむ方なく心ぼそ

く物恐しきかたは、げにさそふ水あらばと思ひぬべけれど、この山をあくがれ出でむ行く末知らず跡はかみなき身の有様なれば、いかでかはと聞き給へれど、さかしうともかくも言ひ出づべき方もなし。もとよりの人とても思ひやりありて、げに懐かしう言ひあはすべき人もなし。人わろく思ひわびかたる心にはのち行くさきの事もたどりも知らず、いづちもいとくはけしからぬ世界に行き離れなばとひとへに思ひ悦びたるもあはれに口惜しく、唯心一つに思ひ餘りこの若き人のなつかしきにぞ「かれえぬであはれせ給ひなむ時に」などいふついでに、「かゝる色の程はこれより深くもところ思ふを、いかでか浅くはなるべきにか」とばかり涙のこぼれぬるを、母君にまねびやしけむ、中納言のおはしたるに、さなごさこゆれば、いみじうつゝ、ましげなる几帳押し遣りて、「限なく覺束なう思ひあまりて、常よりもわりなき細道をそぼちつゝ、御迎へに参り來つるをこれより深くも、もの憂げなる御氣色に侍るとか。これより深く尋ね入る志もこそ」といみじうにはひやかには、ほゝゑみ給へる、耻しさにあせになりて、聞えむ方もおぼされず。心一つには、住み馴れし所をさし離れて、行く末も知らずわくがれ出でむ、いとすゝろに心ほそさもまさりぬべけれども、われと言ひ出づべき方なく、耻しきにおしこめて思ひやすらふ方もなく、ひたぶるに身を任せたるもあはれに心苦しうて、泣き給ふより外の事なし。中納言はひじりに逢ひ給ひて、「誠におぼし取りけむひとゝころの御かげにてこそかく世づかぬすまひにも過ぐし給ひけめ。今はさてもいかゞと思ひ給ふれば、忍びて京へうつろはひ奉るべき」よし語らひ給へれば、「こ尼上は、唯この人に引

かれて、我がごしやうの思ひかなふべうは、まづこの人の世におはしぬべきたよりを見せ給へと、年ごろ思し念じなにかしにもいみじう祈らせ給ひしに尋ね出でおはしましにしかば、かへすがへす我が思ひのかなひぬるなり、今なむひとへに後の世の事思ふと喜び給ひしに違はず、いと尊くいみじき御事に侍りしを、たゞし返す返す見給ふに、又ならびなくかしこくおはしぬべきを、甘がうちに世を知らせ給はゞ、わがみやられ給ふべき宿世のおはするぢむいと恐しう侍るべき。この頃もこの事とごまかうさまに見たまふるに、甘がうちににんじ給はゞ過ぐしとほし難うおはします人と見え給ふこそいとたいだいしけれ。ことし十七歳にやならせ給ふらむ。今三年は猶謹み給ふらむや善からむ」と申すを聞き給ふに、いといとほしく、我が世の常に心いられるやうにもあらましかばと驚かれて、「いとたちまちにさやうにもてなしむつび聞えむとは思ひより侍らぬをかう聞き侍りなばその程はいとゞこそ謹むべかなれ」。さてこゝはかくても何にかはせむ、堂になさむと思ふを、年かへりて春の頃より覺しいそぎ、つくらすべきやうなど委しく言ひ置き給ふを、限なうなく喜び曾み申して、萬をうけ給はる。うへの御乳母の六十近うなりて、法師尼などは、「何か今さらここの山を出でむ」と泣く泣くとゞまれば、こゝなる御調度ども着かへ給ひ御どどもひじりと尼君とに分け賜はらせなどして、近う参り仕うまつれとのたまはせし御しやうのものに變らず、この人をとぶらふべきよし言はせ給ふ。住み馴れ給ふ真木柱をさへ心よりほかにたちはなれ、我にもあらずさそはれ、年ごろの御有様目の前のおもかけに見えつゝ、かきくらし御

車に乗りやり給はず。

「涙さへいづちとさきにすゝむらむ我だにゆくへ知らぬところにて」。雪のいみじう降れば、さきさきの御なかやどりの所に、日高うとままり給ひて、御車のもとに寄りておろし奉り給ふに、げに月比も名残なう馴れ給へれど、奥深ううづもれて、おながちに几帳にはた隠れそばみなど紛れ過ぐすを、いとあきらかにゐざり寄りおりむもわりなく、唯ゆめぢに迷ふ心地しながら、おりてまぶり居たらむもあやしかるべければ、扇に顔ばかりを紛はして、おるにもあらずるざりおり給ふさま言ふ限なし。かりそめにはしぢかなる御志つらひもまばゆければ、やがて涙に浮きて臥し給ひぬるを、げに住み馴れ給ひぬる山の蔭を俄に立ち離れすゝろに浮きたる世界に立ち出で給ふをおぼし亂れむもとわりに、おはれなる事のさまなれば、雪は降りながら月のいと明うさし出でたる、軒の程もなき所なれば隈なくさし入りていとをかしき程なるを、みす巻き上げておながちに慰めていざなひ出で給ふに、さすがにあまりうづもれ入るも物そばしげにはあらず、いとわえかになよなよと風に隨ふ青柳の氣色して、さばかり處せげなる涙をさりげなうもてかくし紛はしてらうたげに眺め出で給へる、心の内もげに淺からずあはれに思ひやられて、隈なき月影に、とてみかうて見るにも、猶わりがたうすぐれ給へる人かなとのみ守られて、皆うち休みにたればいとのとやかなるに、袖ばかりは引きかはしとひ臥してよろづを契り慰むるに、いとつゝましげにてはかばかしうことつけたるいらへなどはなければ、身に近うそひたるけはひなどのいとよう物思ひ

出でらるゝにえ堪へ給はず、よろづを隔なく聞ええらする大將殿の君にだに、一言を深く殘し置きてさこえ出でねと、唐土の御文にもかすめ書き給ふめりし。若君をも心えてこの人は見給はむこそよからめ、これにさへのこすべき心地のせねば、唐土に思ひ立ちし程の道の程の有様、かしてこにいさ着きての事ども語り出で給ひて、かうやうけんの花見給ひし夕、さん彈き給ひし御有様見しより、あるまじき思ひつきて歎き渡りつゝうち出づべき方もなかりしに遁れぬ契のいみじかりければ、さんいうの春の夢に、唯一目見奉りたれどもゆくへも知らずえらぬ世界にて尋ねべき方もなく歎きわびにしに、僅に尋ね聞きて、又も行きあひ聞き奉るべきやうもなく、若君ばかりを夢のやうなりしと聞つきけて、ゐて渡りしほど、折々の後の御有様などせきやる方なく語り續け給ふを、知らぬ世の物語と聞かむだに、めでたうおはする人のおはれげに思ひ入り言ひ出で給はむを聞かむ人涙とままるまじきを、まして幼くより我がはらからは、えらぬ國におはするぞかし、親はさまことに心もこの世の外に思ひすまして、鳥のねだに聞えぬ奥山におはするばかりを頼むかげにて、月をも雪をも諸共に見はやしわはれとも心細しともうち語らふべき人もなく、つれづれなりしまゝに、など同じ世におはせむ、さあらししかば諸共にかゝる住ひ有様こよなく慰め所もありなましものをと、うち思ひ知られしまゝに悲しかりしを、遙に御文ばかりを、わづかに傳へ見しは、いとゞいかならむ世にかは、ゆめなりでは見聞き奉らむと悲しさまざるに、まいてこの月ごろの心ぼそさ悲しさまゝには、この世の后にておはせましかば、我が身行くへな

きやうにて、世を過ぐしわびまじやとは思はぬ時なき人の御事を、さし向ひて見奉らむやうに語り聞かせ給ふに、恥しきもつゝましきもうち忘れて、この人に逢ひ奉らざりましかば、いかでかはかばかりの御有様も聞かまじと、空にまめゆふ戀しさに、いとしいき涙は一つにながれぬもかたみにあはれになつかし。そのゆかりと思ひわび尋ね出で奉りしなれば、かたみにそのゆかりとおほせ思ひ聞ゆるなり。かの御かたみのちどの侍る所になむおはしますべければ、遙なる御かたみなむおぼすべきぞ」と、長きよすがら聞え明し給ふに、あけがたの月心ほそきに、空は淺緑にさえわたたりて、雪の光りあひたるほど盡させずうち語らひて、眺め出で給へるさまども、この世ならずぞめでたきや。

「うたゝぬの夢のゆかりを尋ねつゝ、かたりあはするほどを悲しき。われながらうつゝの事ぞと、更におぼえぬ」とのたまへば。

「聞くまゝにはかなき事ぞ知られる夢のゆかりのまぼろしの身は」。げにいと物はかなく心苦しげに言ひなし給へるけはひいみじうらうたげなり。中將の乳母の子にも、ごんのかみなど言ひていと物のゆくへ知りたるに言ひ置き給へれば、御帳など立て南ひんがしかけていとけ高うまつらひ、北おもて臺盤所あるべきさまにま設けて待ち聞ゆるに、おはしまし着きぬ。けはしき山のふところにて松風のおとをのみ聞きわたしならひ給へるに、いとおもひかけぬさまに名残なくわくがれ出でぬるも、語り給ひしゆめの心ちして、あされいたくおぼゆれど、心深く物思ひ入りてもいふかひあるべき身ならねば、唯我が人かともあらずもて

なされ給へるに、若君の言ひ知らず美しくしげにて走りざれありき給ふを、まづるて渡し給ひて、「これぞかの御文に侍りけむゑるしよ。心より外にあるはあるともおぼえ、うつし心もなきやうにて過ぐし侍ればつひにはかくてもありはつまじきを、この人をば御まへに譲り聞えさせつるぞ」とのたまふ。いかゞはせむといふかひなく身を任せ奉りたる頼もし人も、さは世におはしつべき御心もなかりけるはと聞くも、いみじく心細ければ、御答も聞えず、涙ばかりをのみ事にて、若君をいみじうあはれとうちまぼらるゝに、「これを母よ」と言ひ知らせ給へば、いとひとつきにうつくしげに、さるべき者のゆかりは空に知らるゝにやと見え、うちつけに聊立ち離れず、母とつけてよるも唯ふところのみにあはれ給ふを、あはれに悲しともてあそぶにぞ物の悲しさも行くへなき心地する。身の有様もこよなく慰められて、おのづから明し暮さるゝ。吉野山に迎へ給ひし御うしろみのむすめは少將とつけ給ひてこの乳母のやうにて、御身にそひて、ひんがしの對を局にて、年ごろの人々の御許に參るもあり。よくだづきなかるまじきやうにおのおのみなまそゑ、限なく御心に入るゝ事と見ゆれば、中將の乳母こなたに參りて見奉るに、大將殿の尼姫君をこそこのよには類ひあらじと見奉りしに、さは又かゝる人こそ世に物し給ひけれとあはれに悲しきまで見奉り驚かれて、君おはせぬ程はつと御まへにて見奉るに、命延ぶる心地して、若君の御さまにこの人こそいとよくたぐひ聞え給ひぬべけれ、いかでかゝる人を尋ね出で聞え給ひけむと見奉りかしづき奉る。君は又なからむひとりむすめなどのやうに、暫しも目放ち聞え給はむことは後めたら覺束な

くおぼえつゝよろづにいかでこの御かしづきを心に入れてもてなし聞え給ふを、御去つらひ有様などに、かくこそはありけれ、三吉野の有様住ひを見給ひけむ、耻しまささりておぼし知らるゝに、何事もいふかひなければよろづを知らずおほどかにあつかはれ過ぐす。御氣色も有様も見馴るゝまゝにいみじう思ふさまに限なくおぼえつゝ、心あやまりしぬべき折々多く、人やりならず忍び難けれど、世に似ぬ御物の珍しさはひじりの言ひし事も恐しう、又うちの御事をだによく聞き過ぐしにたるありがたさを、大將も姫君も浅からずおぼしとり、今はかうながら並ぶ方はあるまじきにこそとうらなく覺しうちとけたんめるに、なかなかやんごとなからむことのうちうちの志うすからむ事は、さてもありぬべし、この人に今少し見なれてよるの枕に夜を隔てむもいとほしかるべし、さりとしてよのつねのすぢにはあらねど、人を見るにも又ありがたうすぐれ給ひにける御かたち有様は惜しうあたらしうのみおぼえて、朝夕かの御傍らをすみかとならしたるに、名残なくかさうつろふ事はなくとも、又わくるかたありてかなたこなたと通ひつゝ見え奉らむといはしう、こゝにも又何となくうたのめられたるは、露の恨あるべきやうもなきに、さてはさまよくと、枝さしかはすなよ竹の一よのふしの絶間などをさすがにいかゞはおぼえ給はむ、さはた恨み置かれ聞えむも我ながら苦しかるべうおぼえぬべきぞかしなどおぼしつゝくるに、猶今しばしはひじりのさうをもたがへしと、せめての志のあまりに、あぢがちにおぼし忍びて過ぐし給ふも人やりならず苦しなから、よるなどは猶女君の御方にのみありしに、かはらすまひ給ふ。今は

さるかたにうち解け聞え給ひてこの姫君の御事などをものたまひ合せつゝ、あつかひ聞え給ひけり。大將殿の造り給ふべき處ありければ、つごもりに式部卿の宮のうへ皆引き連れて中納言殿に渡り給ふ。うへはひんがしの對にうつろはせ給ひて、寢殿さりておはしまさせ給ふ。ついたちの日は、御方々のありさまいづれもいとあらまほしう、かたがたさへ集ひ給へれば、物騒しきまで今めかしきに、殿の上、姫君、宮の上などひとつにて、姫君年まさり給へる見奉りて、うつくしがり聞え給ひてひとつにおはするを、去べき物の隈に立ち隠れて見給へば、母上白き御を入つばかり、紅の黒むまで清らなる、うちとけ安らかなる御もてなしも、いみじう華やかににはひ多く若う清らげにて御ぐしのいとさはらかなる程にかゝれるさまなどめでたく見え給ふ。宮の御方は、紅梅どもにその色の織物、梅の小袿、見そめし春の夕暮よりはいとこよなうおとなび給ひけり。「あてに心にくうなまめかしき御さまいとをかしけれど、我が御方の大將の餘りほけづきてもてなし給ふ」とむつがり申し給ひて、殊更にして着せ奉り給へるかう染の御を入つばかり、色濃き鈍色の無紋の織物の小袿着給へる、いとけ高うおいぎやうづきにはひ多く心耻しげなるさまは、いと物より殊にきはまさりて、ぬたけのほどに御ぐしひまなうかゝりて何のげぢめも見えず。ひたひのほどふさやかにそぎかけられたるもはづれて見えたる顔つきの華やかに、なかなかさまかはりて懐かしげにをかしう見え給ふほど類ひありがたう覺えて、けぢやうしつくるひたるはめもたゝずあやまりて、けうとき心地せられぬべく覺されて、何の美しきげぢめもなう覺ゆるは、唯この御有様にけ

おされ給ひぬるなるべし。これを又よのつねに八尺の御ぐしをかき垂れていろいろの御ぞをたち重ねつゝ昔ながらの御有様にひきつくるひたらむは、この頃今を盛にいとゞいかに光を放つ心ちして、目もあやにかゝやかましと、さまざまおぼし續けつゝあさましうも心苦しうもつらうもうらめしくもひとかたならず御涙こぼれておぼし歎かるゝ御心のうち、新しき年とも言はず苦しきに、大將ものものしう清らにて入りおはす。うち見渡し給ふに、この御方のさまことなるを猶いとわたらしう口惜しげにこといみもせず涙ぐみつゝうちまぼり聞え給へるを氣色見るに、いとゞいとほしう苦しくて、我がをこたりにかうなりにし人ぞかしとわりなうおぼし知るゝに、今も猶かうながら露もこの人の御ためにおるかに見え聞えむ事はあるまじうおぼえ給ふ宮の御方ははひこそこよなる劣りけれど、あてにをかしう心にくげなる方などは又をかしかんめりなどさまざま見ゆる中に、小姫君、今咲き出づる花のにほひしていみじうをかしげにおはするを、大將ひぎにすゑてかい撫でつゝもちひかゝみ見せ奉り給ひて、こちたう祝ひ給ふ氣色「母君の口をしう身をもてやつし給へるかはりをさへ取りそへてこの世の我が胸をあけむ」とのたまはするぞいみじきとわりなるや。御いたゞきもちひにぞ「中納言殿こそ奉らせ給はめ。すきにたり。あん内申せ」との給ふを聞きてぞ立ち出でたれば、「大將殿かうなど申させ給ふ」と人聞ゆれば「殿こそわざとも奉らせ給はめ。我にはいと淺からむこそ知もさこそありしか」などの給ふを聞き給ひて「さはつかまつるばかり」とてこなたに渡り給へば、中納言抱き奉り給ひて、大將殿いたゞかせ聞え

給ふ。大將殿の君達こゝに皆おはしまし集りて引き續きうちに参り給へれど、我は若君のいたゞきせさせ奉らむとおぼして立ちとまりおはしたれば、この有様も清げなれど限あるいろの程は華やかならず。鈍色青鈍など御玄つらひあざやかにつくるひたれどはねばえしからず。たとしへなくのどやかに見渡さるゝに、君は帳の内に三尺の几帳引き寄せて隠れ給へるに、鈍色ばかりにうへに白き御袴かさねて、御ぐしのこちたう扇などを廣げたらむやうに鈍色の袴にけさせたと見えたる、繪に書きたるやうにめでたければ「今年だにありつかせ給へ。よのつねにはればれしからむ御氣色見むとそうへより先に急がれ侍りつれ」とて、几帳おしやり給へれば、さまざま程に扇に紛はして少しそばみ給へる今日は常よりもひきつくるひたまへるにいとゞ目も及ばず、をかしげにはどのいとゞ、やかにらうたげなるに、かゝれる髪のかんざしよりして、言ふ限なう清げに薫るばかりに匂のいみじう美しくしげなる程、おほえのわう子のむすめの王女の秋の月によそへられけむはかうこそありけめと、たをたをとやはらかに、なまめかしきもてなしなど、さまざまめでたしと見えつる御有様どもにも劣らずいみじう目も驚かれぬるを、かれはめでたきもとわりに、人の御有様もてかしづかれ給へるより始めて、おろかならむは又口惜しかりなむかしと思はるゝ方もあるぞかし、さばかりはげしき奥山の中よりいかでかゝる人おひ出でけむと、竹の中より見つけたりけむかぐや姫よりもこれは猶珍しうありがたき心ちして、式部卿の宮の、さばかり天の下はひとの國世界までもすぐれたらむ人をもとめ出さむとおぼしかゝらぬ限なめるに、かゝる人

のありけるをえ尋ね出で給はざりけるにこそ、我れ唯他かず悲しき人のゆかりに母君を尋ねしほどに、かゝる人をさへ見つけたるは、我が宿世さへ人よりことなりかし、大将の御方の他かず口惜しきなぐさめにも心安きわたくしものなりやと嬉しうおぼえて、つくづくと外へも見やられずまぼらるゝに、からくには猶物より殊にけ高うあたりさへ光りて見えし、猶こよなう思ひ出でらるゝに、こといみもせられず、やがて涙のこぼれ出でぬるを、かう思ひ渡さるゝかたみを尋ね出でば、やがてもむつびよりて心も慰むべきぞかし、されどこの人をせちに思ふ志にひじりのいひしさも恐しう、思ふ方の御かたみと限なき心をつかふこそかの御爲に志の猶限なきにてはあれ、よのつねのすぢになりなば我が心なぐさみなむことも他かず口惜しくおぼえ、一すぢの思ひにまみてあらばや、そこにあはれとおぼし出づる心のつき給はむと思ふ心のせちに深くなりまさりつゝ、かくては隔つるよなよなもかたみに心置るゝふしなきを、さだになりなば一夜も隔たらむの事の出で来むはいとはしかるべし、この人もうらめしと思ふ心や出で来む、さりとて大将殿の君にさまことながらも唯御傍らをよるとまるとならはしたる名残なう引さうつろふべき心地もせず、いかならむ事を、思ふとも又この御有様には人をならべてこの世に見るべきことならぬぞかしと、思ひとりにし大かたの心苦しきよりもさまことにやつし捨て給へる御かたち有様の猶物より殊にすぐれ、いみじうめでたしとのみ驚かるゝ心ちせらるゝは、なべて世にためしありがたうもおはしける人の御かたかなと、まづよろづの事にも思ひ出で聞えぬ折なきにつけても、か

の御あたりはあくがれ難う、さまさまかばかりめでたき人をうち守りても思し續くる事繁きまゝには、せめて思ひ餘りぬる折は、諸共にうちふしおさし、見馴るゝをことにてうちとけやらぬは我ながらわやしあさましとおぼし知る。若君は年のまざるまゝに、いと美しく、この人の渡り給ひし後に乳母のあたりにもよらず、夜も晝も母と言ひてあたりも離れずまとはれたるもあはれに見ゆ。三日過ぐして夕つ方かへる程に、いと忍びて式部卿の宮渡り給へり。中納言、あるじだちてけいめいしつゝ御車副ひまでもてはやし、殿の君達も参りて御前にて盃さし、春の始のよろこびにもてさわぎ奉るに、宮は中納言と離れたる方にて例のよろづの御物語盡きぬついでに、「昔よりいかでと常にむつび聞えまほしきを、物ぐるほしうふさはしからぬものにおぼし放ちて、立ち寄らるゝ事だに、おぼろげにてはありがたきがほいなく口惜しき事なりかしや。そのうけられぬ故も皆心得たりや。我がやうにはひじりつぐらすとか」などのたまはするさまのをかしうにくからぬを、うち笑ひ給ひて、「そはひじりぞまたは凡夫ぞ」と聞え給へば、「さかし、夜は忍びつゝもろこしまで尋ね行きてさまさまの人をば見給ひしぞかし。ことびとはこの世の限をともかくもある。まろをかゝらぬくまなきものに思しそしらるゝこそをかしけれ。いみじからむ天の岩屋よりも、唯我が心につきて思ふさまならむ人をだに見つけたらは、それにやがて、我が世のとまりに定めて動きなくなりなむと思ひつゝ、人のそしりもどかれも憚らず、うちにもさいなまれ奉りつゝ見渡さるゝに、わろさはあしとよ。皆さまさまにめでたながら、我が心につくは又ありがたき世なれば、

又人々にはつとふるやうなれど、かたしく袖ながらなむ一人寝がちにて夜を過ぐすに思ひ
わび、もろこしにや渡りて、よき人あらむ、見ましとさへこそおぼゆれ」とまめやかにうち歎
き給ふに、わか女君、み吉野の姫君を見せ奉りたらしむ時いかばかりいみじうおぼさまし、と
かくおながちに求めおぼす人にも聞きつけられ給はで、思ひかけず我が物となるべかりけ
る契のいづれもおはしけるほど、おはれに思ひ續けられ給ひて、「山里にうち隠れは見ては
めやすき人は、おのづからあるやうも侍らむかし。わるく聞し召しつけられぬにこそ侍ら
め」と申し給へば、「さもありぬべきあたりと聞けど、又ちかおとりするぞや」とのたまふに、
をのゝしぐれのやとならむかしと見奉り給ふ御氣色を、かしこうもいとほしうも思ひ合せ
られて、たえま久しうありて、まれまれおはしましてはうちに入らむの御氣色もなく、
かゝる長物語に夜ふかい給ふもいと見るが苦しういとほしうおぼゆれば、「夜更け侍りぬら
むかし」とて立ちぬべきを、猶とつきせずおぼしたるを、待ちつけ奉り給へる人のおぼさむ
心のいとほしければ、せめてすゝめられ奉りて、我は女君の御方に入り給ふを、いかばかり
のかたち有様にてさしも淺からぬ心をとゝめられ給ふらむと、ゆかしき御心絶えず胸いた
し。女君はこの年月とりわきたる御行ひに御堂に渡り給ひて、暇惜しげにおぼしたるもさま
ことなるに、雪うち降りてけはしげなるに、嵐の氣色もむげにかたはらさびしければ、吉野
わたりに立ち寄り給ひぬ。若君ふところに臥せて皆寝給ひにけり。少將は、御傍らなる皆驚
きてるざり出でぬれば、ふしかはり給ひてよのつねにうち語らひつゝ、臥し給ひぬ。何事も今

少しおも馴れて、始の頃のやうにいとわりなくもおぼえず。うち添ひたる手あたりの近ま
りの限なきに、式部卿の宮の、まめやかなりつる御物語を覺し出でつゝ、女君のさまことに
なりにしをさきくも今に思ひ絶え給はぬ御氣色なんめるを淺からず忍びて隠しすゑたる
人ありと聞き給ひては、必ずゆかしう心にくしとおぼえて、思ひよらぬくまなくかまへ見給
ひてはたゞ人の思はむ所なども忍び給はず、必ず我が物にせむの御心いられいみじかりな
むかし、おろかならぬ志限なけれど、姫君の御心も、我はよのつねならずよろづを思ひしみ、
ひじりの御さうを思ひおどて、み年ばかりをかく見馴るゝに心を慰めて過ぐさむと、あまり
の思ふかたに忍び過ぐすを、人の心、我をば身に近からぬものにさし放ちて、こよなくよの
つねにて語らひそめ給はゞ、そなたに通ふ心はありなむかしとさへ、おながちにすゑるに後
めたくさへなりて、「疾く参らむとし侍りつるに、式部卿の宮の渡り給ひてよろづの事人の
うへのたまひつるを、え聞き捨て、立ち侍らざりつる程、夜こそ更けにけれど、いとよう御
殿籠りにけるは、待たれ奉らざりける身のおぼえこそ心おとりすれ」などあいなく恨みて、
うちねくれたれて、「この宮はしも、このわたりに必ず尋ね寄り給はむものぞ。一目も見奉り、
わりなき御文も一度通ひぬる人、必ず救ひ給はず、人の心怪しきまであひかい給へる辯おは
する人なれば、聞きだにつけ給ひなばすべて疑あるべき事にもわらずかし」など事多くわら
ましごと言ひ續け給へど、かけても心得聞き知りがほならで、何心なき氣色もいとらうた
ければ、つとめてもことゝ日高うあるまで御殿ごもり過ぐしたるに、いづくよりともなき文

のいとえんなるを取り入れたり。だいにの御むすめのにやと思ひてひきあけたれば、式部卿の宮の御文なりけり。「夜の御氣色しづ心なげなりしもことわりなりけりと見顯し侍りぬるかな」とて、

「うへこそは急ぎ立ちけれとこの浦の浪のよるべはなかりけりやは」。もじやうなど、わざとをかしげならねど、書きざま墨つきなど書き馴れ見所あるさまぞをかしきや。「これぞ聞ゆる宮の御文よ。かゝる御書きさまにいみじき言の葉を盡し給ふはいかならむ。ひっきの井しかなびかざらむ」とて見せ奉り給へば、そばみなどもせず、言ひしらす美しくしげなるぬくたれ髪言はむかたなきを、うちかたぶきてしりめに見おこせ給へり。こぼれかゝれる額、たえまたえまのなごめかしきなどに、とばかりまほり入りて御返りふと書かれず、「進め入れ奉りてしを覺しあやめて、人つけ給へりけるなめり。猶恐しうおはする宮なりや。かけても人の思ひよるまじきを、かやうにしつゝ、人の氣色を見ておぼしよる事どもあるなり」と聞え知らせ奉り給ひて、御返事に、

「にはの海の蟬もかづきはせぬものをみるめよせける風の吹くらむ。おのづから聞し召してむ。あなかしこあなかしこ」と聞え給ひて、「あながちに、我が行く末をあやめしり給ふもあやしめて、御後見なからむほど、あなかしこ、御あたり離るな」としなののたまひて、君にもをりをりと、この宮の御有様隈なくあやにくにおはするよしをのみ言ひうとめ給へど、何事と耳にもとめぬやうにのみもてなし給ふ。こゝもかしこも、すゝなるみつ

うまやにて通ひ渡り給へば、ひまひまには大貳のむすめにも忍びて絶えず。女もいみじう心を寄せたれば、わりなき折々もあながちにて行き逢ひ奉るにも、いとあはれにくからずみえなつくもあらず。女も物歎しげなる氣色も心え給へるに、心苦しうなどさすがにこそ。ちぢに別るゝ御心も、唐國の御方をだに思ひ續け立ちぬればよろづも忘れ、など今一度見奉るべき契のなかりけむ、年月の過ぎゆき、その夜の名残遠くなるまゝ、にもあはれに悲しく、見所あり、隔なき御名残、朝夕に見馴るゝにつけてもさりとして戀しさの慰むやうはなく、いよは娘捨山の月を見む心ちして悲しきに、正月十月よひの頃より、からやうけんの後、つゆもまどろめばいみじうなやみ煩ひ給ふとのみ見えつゝ、おそはれおそはれして、常よりも面影に見え給ひつゝ、堪へ難きまでおぼゆるに、夜をならべて、まどろめばありし御さまながら違ふ事なくて、物心ぼそげに惱み臥し給へりとのみ見ゆ。いかなればかゝらむと思ひ亂るゝに、三月十六日の月いみじうおもしろきに、はし近うすだれ巻き上げて、みよし野の君とあがめ出で給ひて、今宵のことどかし、さんいゝの夢は思ひ出づるに、雲井の外のとのおまひし御けはひ、今も聞くやうにおぼえて、

「見し夢はあはれこよひの月のみぞそのをり知れるかたみなりける」。うち泣き給ひて添へ給へりしきんをかきならしつゝ、眺むれば、更け行くまゝに、浮雲たなびきかすみまされるに、常よりも心くだくるねざめは空しき空に満ちぬる心地して、月のかはつくづくとながむるに、空に聲のかぎり聞えて、「からやうけんの後、今ぞこの世のえん盡きて天にうまれ給ひ

ぬる」と聞ゆ。いであな物ぐるほし、わがせちに物おもふ思ひなしに聞ゆるかとおぼすに、さ
たざたと二度同じ聲に聞ゆるほど、苦君おびえて、例ならずいみじうなき給ふに、人々驚き
さわぎ、うちまさの音などに紛はしくなりて、ありつる聲も聞えずなりぬ。心も碎け慄ひて、
げにかの御身もちとせの松かは、世こそかはれ、常なき事は同じ事なんめり、夢のうちなら
ばこそ思ひも慰め、空のつげに聞えつる聲はいかになど思ひまがふべくもわらず、志のひ
とへに切なればかゝる事も聞くなんめりと、疑ふ方なく悲しう思ひやるに、菊の花見給ひし
夕よりかきつらね、さんいりの春の夢、ひやうさうの十五夜の宴にきん弾き給ひし御有様
ど、唯目の前に見奉る心地して、聲もえ忍ばずまどろまず聞き明し給へる名残いと苦しうて
うち臥し給へり。「みだり心地こそいみじう堪へ難けれ。この胸に押しかゝり給へ」と聞え給
へば、例ならぬ御氣色いとほしうて、寄りかゝりそばみ給へるかたはらめ髪のかゝりなど、
いみじう美しくしげなるを見るにも、いと涙せきやる方なく流れ出づるを、いかなれば氣色
もうちかはり、思ひ驚き給へるさまのいとらうたげなるに、忍びがたくて、傍にかき寄せ聞
え給ひて、「よなよなもろこしの御事の、つゆもまどろめば夢に見えつ、あやしう心さわぎ
のみしておぼえつるに、かゝる聲をきむ今宵聞きつる。いかある事ぞと思ふにいみじう」と
てなき給ふに、いらへはせで、顔をひき入れて涙の落つる氣色も、同じ心にあはれなる事か
ぎりなし。

「思ひやるかたもなく感はましこのひともとを尋ねざりせば」。いかなる事にてとて

人をたてまつるべきにもあらず。渡り來て語る人もやと待つべきにもなきを、思ひわびては
五年をだにすぐせと、さばかりといめられしに、さこそあるべかりけれなど、せむかたなく
おぼゆるまゝに、この明くるあしたより、千日のまやうじ始め給ひて、法華經萬部讀み奉ら
むとおぼして、人々にはともかくものたまはず、きびしう籠り居などま給はず。うちなど
に參らむ折はうちまゐり、いと大事ならざらむ折は、さてもわれかしておぼして、例の大
將殿の君には、「世の中に猶あるまじきさまに度々夢に見え心ほそければ、かゝるまやうじ
始めて經讀み奉らむと思ふなり」と語らひ聞え給ふ。「この迎へ給へる人は、限なく御心とま
るべし」と人々もさゝめさけるに、淺からぬ氣色の見ゆるにも、おぼろげならぬ人にこそあ
らめと推し量り給へど、げにのたまふやうによのつねのすぢにおぼしとれるにはあらざり
けりと見知られ給ふ事もありて、かうのみありつき給ふべき有様にもわらずのみあるは、げ
に世に久しうも物し給ふまじき人にやと、さる方にたのみをかけ、朝夕に見馴れては片時離
れ聞えずならひぬるを、立ち後れてはあるべき心地もし給はず、このみけしきあやしう例な
らずけなるも歎しうおぼし亂れたり。このごろはあまり夜晝とまらぬ御涙も、猶あやしと人
の見咎め給ふべく、「うへ、大將など聞き給ひては、ことごとしうおぼし騒ぎ問ひ尋ね給はむ
も、申さむかたなくむつかしかるべければ、殊更にこの頃ばかりはかくるへてのどやかに經
讀み奉らむと思ひ侍るに、人さわがしう、との、うへなども、かゝるしやうじ始めたるはいか
にぞあど尋ね問ひ給はむむつかしければ、見咎むる人なき所と思ひ侍る」といとま聞え

給ひて、吉野のわたりに若君の何心なう走り遊び給ふなども、常よりはめかれせず見給ひつゝ、夜なども殊にまどろみ給ふとも見えず經を讀みつゝ、明し給ふ氣色の、類ひなうあはれげなるを、姫君もおはしけむ有様などは見知り奉らざりしかど、世を隔てゝもさる人おはするぞかしと思ひやるに心をかけて過ぐさるゝに、さは世になくなり給ひにけるかと、心ぼそざも類ひなきに、たのもし人のいとかく物おぼし入りたるさま見るも物悲しう思ひいらるれど、色に出で、涙ぐましううち泣きなどするさまはもてかくしながら、常よりもいみじう思ひしめり給へる氣色有様の、いと心苦しうらうたげなるを、ありしよりもいとあはれに思ひなされて、几帳ばかりの隔だになく、明暮傍らにて經は讀みつゝも、おはせし有様のたまひし事など盡させず語り出で給へば、ひとつ涙に浮み給ひて明し暮し、かつは言ひ慰め、いとかる氣色を見知りて世を心細げに思ひくんとしたるもいとらうたげなれば、「かつはかたちをかへて入りなまほしけれど、唯一所をほだしに思ひ聞えてなむ。さまではえ思ひ立ち侍らず」などよろづに行く末遠く、淺からぬ心のうちを言ひしらせ契り給ふを、唯つくづくと聞きつゝ、をかしうたをやかなるさまに添ひ臥して、手ならひするまゝに、

「見もはてし別れやしなむと給ふかなかたみにかゝるかたみと思ふに」いとをかしげに書きすさび給ふを、あはれと見給ひて、

「思ひわびあらじとおもふ世なれどもたれゆゑとまるこゝろとかしる」など、せめやかにもをかしくも、うち泣き笑ひつゝのたまひかはし、あはれをもいと添へ、胸のひまをもあ

けつゝ、やうやううちとけ見馴るゝまゝに、かたちはさもこそあらめ、心ばへなどさへ、さる奥山のふところより生ひ出で給へる人ともなく、いとあてにおほどかにおびれたるさまながら、らうらうしうにはひ多かる方さへ後れず、思ふさまに飽かぬ事なうよろづにすぐれ給へるさま、大將殿の君の御心さまだけはひもうち通ひたる心地して、かれは限なきなつかしさながら、猶いと心恥しうあなづりにくき御氣色立ちまさり給ひて、大方ばかりはへだてなううらゝかにうち解け給へれど、うちうちの御もてなしこよなう、あながちにちかづきむつれ聞え給ふをば、深うあるまじき事とふさはしからぬ事にのみ背き離れ給ひて、さりげなうけどほうのみもてなし給ふを、強ひて知らず顔に亂れ給はむも、今はやんとなう恐しき方さへ立ち添ひ給ひにたる人の御有様なれば、いとしも思のまゝにも御心に任せ難きを、これは心安うあなづらはしき方につゝ、む處なうおぼされて、誠に侘しく碎くる心ながら、えさらず世にながらへむ程の我が心のいさゝかのとまり、こればかりにこそはと、唯この人に盡させぬを、心をも涙をも慰むべきものに、かうやうけんの御方さまのことをば深う思ひとゞめ、露ばかりをかしうらとまじき氣色そへず、世に知らぬめでたき御さまにて心深ういみじうもてない給ふを、いかばかりのいはさかは見知らざらむ、あはれになつかしう、ひとへに思ひ頼みたるさまにて、うらなくなりゆくも、昔より、などかいもうとなどのおはせざりけむ、いみじう思ひかしづき、おぼしき事をも言ひ語らひつゝ、いかに嬉しからましと、夜晝口惜しうおぼえしを、誠の妹とは限ありて思ふまゝにもえ身は近うかゝらざらましと、これはさま

ことに珍しう限なき思ひをかはして、この人なからましかば、限あるべき身と言ひながらからぐに、は限なき思ひを留め、我が世に浅からぬよるべとうち頼み聞えさせて歸り來し大將の君は、背きはて給ひにしうらみ解くる世もなきなげきには、限ある命といふとも今日までもめぐらざらましを、かゝればとていづかたも思ひのおろかに忘るゝひまこそあり難けれと、唯見るめ有様の劣らずをかしうめでたきに、聊心を慰め過ぐすぞかしのみ思ひまさられ給ふに、式部卿の宮は、とこの浦の浪かけ給ひてしより心を添へ給ひて尋ね聞き給ふに、吉野山より尋ね出で給ひて、その母君のけがらひにこもりて、むごにその山に跡を絶えて、少し居て後に迎へ出で給ひて隠しすゑて、限なきさまになむ思ひとゞめ給へるなど、さだかなるたよりに聞きつけ給へる御心ち、いとめづらしう、吉野山には何人のいかなりけるを尋ね出で給へるならむ、思ふにちのめなる人にあらじかし、さばかり、おぼろけの人に、心をとゞむべうもあらず、もろこしまで見盡したる人の雪の中を尋ね出で、見るらむ、よろしうはあらじ、うべこそ山隠れなどにかくろへてなかなかさてもありぬべき人はあらめと言ひけれ、などてわれ吉野の山に思ひよりざりけむ、いみじう我が心にかなひて、かゝらぬ限なう尋ね出づと思ふ人々はわろくこそありけれ、色にも出でずざりげなうてかしこくは思はぬ山を尋ね出でけるかな、大將の尼姫君、わがさばかり年をへ心をくだきて言ひ渡りつゝ、さるべき事と定まり出でにしを、さこそ親しきゆかりと言ひながら、憚る處なういひよりて女君をもいたづらになしはてにき、それをも又つらさふしに思ひはせず、女も深うゆはれ

をまして、さばかりかくと聞きて後しもよのつねならぬ有様ながら、見まくほしき事のせちなれば、心を盡し言ひ渡りつゝ、猶もうちしのび、そなたのたちき、かいまみには心を入れ給へれども、ひとくだりの返り事までは思ひもよらず。おのづからはづれたる女房などのけはひあり様をだに漏り聞かず、深う心にくう妬げなるもてなしにて過ぐしはてつゝ、今は又淺からぬよるべと定まりはてぬるが胸痛う苦しきにも、いかでこの人をだに見てしがなと、あいなるゆかしうねたきに、御心いらせ限なうおぼし渡りて、この御心にかなふ人々を恨み仰せらるゝに、誠にいかで思ひよりざりけるぞと驚かれて、そのえんをさりげなうて聞きあんな内させ窺ふに、ふとさるべき人語らひよらむ事もありがたうて過ぐすを、五月ばかりに姫君わらはやみに煩ひ給ふを、中納言いみじうおぼしなげきて、よろづにまじないのりなどおぼし残すかたなけれど、更に怠り給はず。いと暑きほど白くおも痔せ給へるかたちのいよいよらうたげに美しくしきを見給ふも、この人の苦しげさを我が身に代へばやとおぼし惑へど、六月もさて過ぎぬ。まわづらひて、七月ばかりに清水に忍びてこめたてまつり給へるを影につきたるやうにて尋ね聞きあんな内する人は聞きつけて「さこそ坐すなれ。おはする所にて、ほとりの人々には物言ひふるべきにもあらず。この程こそよきひまならめ」と構へて、宮を清水にゐて奉りてけり。いかに構へたりけるにかほのかに見給ひて御心惑ひよろしからむやは、推し量りおぼされつるよりも、世にはかゝる人もありけるはとあさましきまでおぼされて、若君の「母」など呼びむつれ給ふを、いみじういまだあえかなりと見ゆれど、子な

どわりけるは、今始めたることにはあらざりけりと心得給ふに、若君かばかりおとなぶるま
 で忍びかくろへて人知れぬさまなるはこと事ならじ、大將の女君に憚り聞ゆるならむかし、
 かばかり美しくしき人を思ふあらずいたく忍びつゝ、む志にも、猶かの君はおぼろけならずあ
 りがたき思ひにこそとおぼすにも、めでたき人はさし措かれて尼姫君のゆかしき心は立ち
 まさりぬるぞ、一方ならず色めかしき御心なるや。かの中納言の、かばかり深き志になれた
 らむ人、いみじき言の葉をついて言ひよるとも、我に更に思ひこそ靡かざらめと口惜しう
 侘しう思して、事の聞え隠れなくば中納言の思はむ事こそいとほしう耻しかりぬべけれど、
 いかかはせむ、人の思はむ所世の誇りも事よろしき時なり、かくてある程に恨み隠してむ
 とおぼしたばかりなる、をも知らず、中納言おはしたり。暑きほどかく久しう煩ひ給へれば、
 いとあえかに心苦しくなよなよとして痛うおもやせたるしもいと、かをりをかしげなる
 事はまさりて、珍しとうち思ひたる氣色もあはれにらうたければ、忍びてと思ふに、うち添
 ひ聞えたらむ、事々しきやうなれば、身のかはりにほとけまぶらむと思ひ譲り聞えて
 過ぐす程、つれづれ覺束なきさまなどのたまふに御前なる人々「をこたらせ給ふ事はこの四
 五日侍らず。よるよるなどを猶いと苦しげにてつゆばかり御くだものなど御覽じいれぬな
 ど、わりなく」となむ愛へ聞ゆれば、「すはふを今少し延べてさはやかになしてこそ出でたま
 はめ。わりなう碎くる心を唯一所に慰め奉りてこそはあるかなきかにすごしはべれ。今暫し
 世にあれと覺し召さば、つゆばかりにても物など御覽じ入れ、さはやかにやはならせ給は

ぬ」。立ち離れ奉りて日頃はかきくらす心地してわりなう明け難う暮しがたき戀しさ覺束な
 さを、いみじうめでたきかたちさまして、誠に淺からず涙落してのたまふを、いとあはれと
 見て、知らぬ人の耻しうおはするに、思ひもかけず見ゆるかなと、あさましながらもいふか
 ひなく、又頼むかひなく見馴れ奉りぬる心ちして、げに日ごろの覺束なき我が心細う思ひ續
 けられつるに、同じ心なるもいとあはれにて、顔に袖をまぎらはしてうちなきたまへるさ
 ま、いみじからむ荒えびすも泣きぬばかりに、飽くまでなつかしう心苦しき氣色を添へ給へ
 る人さまなり。日くらし添ひ臥してよろづに語りひあつかひ暮して、今宵は廿一日にて方違
 ふべかりければ夕つかた出でたまふほど、山風涼しう吹きたるに、入相の鐘の響きそひたる
 も、吉野山に思ひよそへらる。立ちかへりやすらひて出でもやり給はず。
 「思ひいづや見し山かげのゆふぐれに心ぼそさはおとりこそせね」。いとなやましな
 少し起きあがりて見送り給へるも、常より殊に立ち離れにくうおぼさるゝに、
 「住み馴れし峯の松風それとたゞ聞きわたすにもものぞかなしき」。いとかうさまことに
 わはれにたぐひなき御中のおもひを、いとほしう暮るゝまゝには、式部卿の宮、例のいとあ
 ながちなるさまにかまへて、今宵かならずるて隠してむとおぼしておはしましぬめり。いか
 ならむとぞ。

舟載本有以下三頁、他本無之
在他書「缺物語歌

渡唐の船に乗るとて都人

中納言

かさくらす涙はそでにさわぎつゝもろこしぶねに今どのりぬる

中納言唐に渡りて後さまさまおもひくだけて

大將の姫君

憂しとだに思ひ出でじと玄のべどもな波天の戸をあけがたの空

吉野より出で、侍りけるころ花の散るを見て

濱松の帥宮中宮

中納言もろこしへ思ひ立ち侍るとていとま聞えけるに月いとあかりければ

濱松の東宮

いかばかり涙にくれておもひ出でむ西へかたぶく月を見つゝも

御かへし

ふるさとのみかさの山を思ひいで、我もいかゞは月を見るべき

唐に渡るとて道より女のもとにつかはしける

濱松の中納言

重ねけむことぞくやしき唐ごろも袖のみぬるゝつまとなりけり

かへし

山の僧正の母

から衣たちはなの名は我のみぞうらむるそでも朽ちはてぬべき

この世の外になりなばあはれと思ひなむやと申し侍りける人に

濱松の左大將の女

けふりけむ人を誰ともしらぬ間にゆふべの空はあはれならずや

人をゆくへ知らずなして歎き侍りけるころ尾花の風になびくを見て

濱松の中納言

尋ぬべきかたしなればふるさとの尾花が袖にまかせてぞ見る

何となく見馴れ侍りける女をゆくへ去らずなして侍りける所にて月を見て

濱松の中納言

思ひ出づる人しもあらじ故さとにこゝろをやりてすめる月かけ

中納言の許にあかつき立ちより侍りけるにいみじくたふとく經を讀みすまして

濱松の宰相中將

ひとりしも明さじと思ふとこの浦におもひもかけぬ浪の音かな

濱松中納言物語

終

落窪物語

今はむかし、中納言なる人のむすめあまたもたまへるおはしき。大君、中の君には聲どりして、西の對、ひんがしの對に華々としてすませ奉り給ふ。三四の君にも裳させ奉り給はむとてかしづきぞ玄給ふ。又ときどき通ひ給うけるわかんどほりばらの君とて、母もなき御むすめおはす。北の方、心やいかおはしけむ、仕うまつるこだちの數にだにおほさず、寐殿のはなちいで、又一間なる落窪なる所の二間なるになむ住ませ給うける。君達ともいはず、御方とはましていはせ給ふべくもあらず。名をつけむとすれば、さすがにおとこのおぼさむ心あるべしとつゝみ給うて、「おちくばの君といへ」とのたまへば人々もさいふ。おとこもちこよりらうたくやおぼしつかずなりにけむ。まして北の方の御まゝにて、はかなき事多かりけり。はかばかしき人もなくめのともなかりけり。たゞ母のおはしける時より仕ひつけたるわらはのざれたる女を後見とつけて仕ひ給ひける。あはれに思ひかはして片時はなれず。さればこの君のかたちはかくかしづき給ふ御むすなどにもおとるまじけれど、出で交らふこともなくて、ある物とも知る人なし。やうやう物思ひまゝに、世の中のあはれに心憂き事のみおぼされければ、かくのみぞうちなげく、

「日にそへてうさのみまざる世の中に心づくしの身をいかにせむ」といひて、いたう物思

ひ知りたるさまにて。おほかたの心ざまさとして琴なども習はず人あらばいとよくまづ
けれど誰かは教へむ。母君の六つ七つばかりにておはしけるに習はしお給うけるまゝに、
箏の琴を世にをかしくひき給ひければ、むかひばらの三郎君、十ばかりなるに、こと心に入
れたりとて、「これに習はせ」と北の方のたまへばとささき教ふ。つくづくといとまの
まゝに物縫ふ事を習ひけれど、いとをかしげにひねり縫ひ給ひければ「いとよかめり。こ
となるかたちなき人はものまめやかに習ひたるぞよき」とて二人の聲のさうぞく、いさゝか
なるひまなくかきあひ縫はせ給へば、まばしこそ物いそがしかりしか。よるもいもぬす、い
さゝかおそき時は、「かばかりの事をだに物愛げにまたまふは何をやくにせむとてならむ」と
と責め給へばうち泣きて、「いかでなほ消えうせぬるわざもがな」となげく。三の君に御もき
せ奉り給ひて、やがて藏人の少將にあはせ奉り給うていたはり給ふ事かぎりあし。落窪の
君、ましていとまなく苦しきことまざる。若くめでたき人は多くかやうのまめわざする人や
少なかりけむ、あなづりやすくていと倦しければ、うち泣きて縫ふまゝに、

「世の中にかであらじと思へども適はぬものはうき身なりけり」。後見といふは髪長く
をかしげなれば、三の君の方にたゞめしに召し出づ。うしろみ、いとほいなく悲しと思ひて、
「我が君に仕うまつらむと思ひてこそ親しき人のむかふるにもまからざりつれ、何のよしに
かこときみどりはま奉らむ」と泣けば、君、「何か、同じ所に住まむかぎりはおなじ事と見て
む。きぬなどの見苦しかりつるに、なかなか嬉しとなむ見る」とのたまふ。げにいたはり給ふ

事めでたければ、あはれに心細げにておはするを守らへならひて、いと心苦しければ常に入
り居れば、さいなむ事かぎりなし。落窪の君の「是をさへ呼びこめ給ふ事」と腹だれ給へば
心のどかに物語もせず、うしろみといふ名びんなしとて、あこぎとつけ給ひき。かゝる程に、
藏人の少將の御方なるにたちはぎとていとぎれたるもの、このあこぎに文通はして、年経て
後いみじう思ひて住む。かたみにへだてなく物がたりしけるついでにこの姫君の御事を語
りて、北の方の御心のあやしうて哀にてすませ奉り給ふ事、さるはみ心ばへ、みかたちのお
はしますやう語る。うち泣きつゝ、「いかで思ふやうなる人にぬすませ奉らむ」と明暮あたら
ものにいひ思ふ。このたちはきがめおやは左大將と聞えける御むす子左近の少將にておは
しけるをなむ養ひ奉りける。まだめもおはせはよき人のむすめなど人に語らせて問ひ聞き
給ふ。たちはき、落窪の君のうへを語り聞えければ、少將耳とままりて静なる一間にこまか
にかたらせて、「あはれ、いかに思ふらむ。さるはわかうどほりばらなかりかし。我にかれみ
そかにわはせよ」とのたまへば、「唯今は世にもおほしかけ給はじ。いまかくなむとものし侍
らむ」と申せば「入れに入れよかし。はなれてはた住むなれば」とのたまへば、たちはき「あこ
ぎにかくなむ」と語れば「唯今はさやうの事かけてもおぼしたぬ中に、いみじき色ごのみ
と聞き奉りしものを」ともてはなれていらふるを、帯刀怨むれば、「よし、今御けしき見む」と
いふ。この御方のつゞきなる廂ふた間、曹司にて得たりければ、おなじやうなる所は忝しと
て落窪一間をまづらひてなむ臥しける。はつきついたちごろなるべし。君一人臥していもぬ

られぬまゝに、「母君、我を迎へ給へ。いとわびし」といひつゝ、

「我に露あはれをかけば立ちかへりともを消えようきはなれなむ」。心なぐさめにいと
かひなし。つとめて、物語のついでに、「これがかく申すは、いかゞはま侍らむ。かくてのみは
いかゞはまはてさせ給はむ」といふにいらへもせずいひ煩ひてゐたる程に、「三の君のみて
うづまるれ」とてめざるれば立ちぬ。心の中には、とありともかゝりともよき事はありなむ
や、めおやのおはせぬにさいはひなき身とまりて、いかで死なむと思ふ心深し。尼になりて
も殿の内はなるまじければ唯消えうせなむわさもがなとおもはず。たちはき、大將殿に参り
たれば、「いかにぞかの事は」「いひ侍りしかばしかじかなむ申す。まことにいとほるけい
なり。かやらのすぢは親ある人はそれこそもかくもいそげ。おとゞも北の方に取り籠められ
て、よもま給はじ」といへば、「さればこそ入れにいれよとはいへ。聲どらるゝもいとほしたな
きこゝちすべし。らうたら猶思えばこゝに迎へてむ。さらすば、あなかまとともやみなむか
し」とのたまへば、「その程の御さだめよく承りてなむ仕うまつるべかなる」と申せば、少將、
「見てこそ定むべかなれ、そらにはいかでかは。まめやかに猶たばかれ。世にふとは忘れじ」
との給へば、帶刀、「ふとはあぢなき文字なり」と申せば、君うち笑ひ給ひて、「長くとい
はむとまつるをいひたがへられぬるぞや」などうち笑ひ給うて、「これを」とて御文給へば、
まぶまぶにとりて、あこぎに御文とて引き出でたれば、「あな見ぐるし。何しにぞとよ。よし
ない事は聞えで」といへば、「猶御かへりさせ給へかし。世にあしき事にはあらじ」といへ

ば、取りて参りて、「かのきこえ侍りし御文」とて奉れば、「何しに。うへも聞き給ひてはよし
とのたまひてむや」とのたまへば、「さてあらぬ時はよくやは聞え給へる。うへの御心になつ
ゝしみ給ひそ」といへどいらへもまたまはず。あこぎ、御文を紙そくさして見れば唯かくの
みぞある。

「君わりと聞くにこゝろを筑波ねの見ねど戀しきなげきをぞする」をかしの御手や」と
ひとりごち居たれど、かひなげなる御けしきなればおし巻きて、みぐしの箱に入れて立ち
ぬ。たちはき、「いかにぞ。御覽じつや」「いで、まだいらへをだにせさせ給はざりつれば置き
て立ちぬ」といへば、「いでや、かくておはしますよりはよからむ。我らが爲にも思ふやうに
て」といへば、「いでや、御心のたのもしげにおはせば、などかはさむ」といふ。つとめて、おと
ゞ、殿におはしけるに落窪をさしのぞきて見給へば、なりのいとあしくてさすがに髪のと
うつくしげにてかゝりて居たるを哀とや見給ひけむ、「みなりいとあし。あはれとは見奉れ
ど、先やんごとなきことどもの事をするほどにえ心まらぬなり。よかるべき事あらば心と物し
給へ。かくてのみいますがいとはしや」とのたまへど、はづかしうて物も申されず。かへり給
ひて北の方に、「落窪をさしのぞきたりつれば、いとたのみすくなげなる、白き拾一つをこそ
きて居たりつれ。子どもの古きぬやある。させ給へ。よるいかに寒からむ」との給へば北の方
「常に着せ奉れどはふらかし給ふにや、あくばかりもえ着つき給はぬ」と申し給へば、「あな
うたての事や、親に疾くおくれ心もはかばかしからずぞあらむかし」といらへ給ふ。聲の

少將の君のうへの袴ぬはせにおこせ給ふとて、「これはいつよりもよく縫はれよ。祿にきぬ着せ奉らむ」とのたまへるを聞くに、いみじきことかぎりなし。いと疾く清げに縫ひ出で給へれば、北の方よしと思ひて、おのがきたる綾のはり綿のなえたるを着せたまへば、風はたいはやにまるまゝにいかにせましと思ふに少しうれしと思ふぞこゝちのくし過ぎたるにや。この舞の君はあしき事をもかしがましくいひ、よき事をばけちえんに譽むるこゝろまなれば、「このさうぞくどもいとよし。よく縫ひおほせたり」と譽むれば、子たち、北の方に申せば、「あなかま落窪の君に聞かすな。心おごりせむものぞ。かやうのものはくせさせておくぞよき。それをさいはひにて人にも用ゐられむものぞ」とのたまへば、ごたち「いとみじげにもなたまふかな。あたら君を」と忍びていふもありかし。かくて少將いひそめ給うてければ又御文すゝきにさしてあり。

「穗に出で、いふかひあらば花すゝきそよとも風にうちなびかなむ」。御かへりなし。時雨いたうする日、

「さも聞き奉りしほどよりは物おぼし知らざりけり」とて、

「雲間なきしぐれの秋は人こふるこゝろのうちもかきくらしけり」。御かへりもなし。又、「天の川雲のかけはしいかにしてふみ見るばかりわたしつゞけむ」。日々にあらねど絶えず言ひわたり給へど、絶へて御返りなし。「いみじう物つゝましきうちには、かやうの文もまだ

見知らざりければいかにいふともしらぬにやあらむ。物思ひしりげに聞くを、なかかははかなきかへり事をだに絶えてなき」と帶刀にのたまへば、「知らず。北の方のいみじく心のあしくて、我が許さむらむ事つゆにて侍もし出でばいみじからむと明暮おほひたるにおぢつゝみたまへるとなむ聞き侍る」と申せば「我をみそかに」といひ渡り給へば、わが君のみことをいなび難くやありけむ、いかでと見ありく。十日ばかり音づれ給はで思ひ出でのたまへり。「日ごろは、

かき絶えてやみやしなましつらさのみいとます田の池の水ぐき。思うたまへ忍びつれど、さてもえあるまじかりければ人しれず人わろく」

とあれば、たちはき、「このたびだに御かへり聞え給へ。しかじかなむのたまひて、心に入れぬぞとさいなむ」といへば、あこぎ、「まだいふらむやうも知らずとていと難げにおもはしたるものを」とて参りて見奉れど、中の君の御をとこの右位中辨とみにて出で給ふうへのきぬ縫ひ給ふほどにて御かへりなし。少將、げにいひしらぬにやあらむと思へど、いと心深き御心も聞きしみにければさる心ばへやふさはしかりけむ。帶刀を「おそし」とせめ給へど、御方々すみ給うていとさわがしきほどなれば、さるべき折もなく思ひありく程に、この殿、ふるき御ぐわんはたしに石山にまうで給ふに、御供にしたひ聞ゆるまゝにゐておはすれば、おんなさへといまらむ事を耻と思ひてまうづるに落窪の君人かぞへのうちにだにも入らざれば、辨の御方、「落窪の君ゐておはせ。一人とまり給はむがいとはしき事」と申し給へば、「さ

てそれがいつありきしたる。旅にては縫ひものやあらむとする。なほありかせめじ。内に籠めておきたらむぞよき」とて思ひかけでやみ給ひぬ。あこぎは三の君の御かたうどにていけがれ侍りぬ」と申してとまれば、「世にさもあらじ。かの落窪の君の一人おはするを思ひていふなめり」と腹だてば、「いとわりなき事にて侍るなり。さむらへとあらば参らむ。かくをかきこと見じと思ふ人ありなむや。おんなだにしたひゆく道にこそあめれ」といへば、げにさや思ひけむ、はしたわらはのあるにさうぞかせてとめ給ひ、のしりて出で給ひぬれば、かい住みて心細げなれど、我が君とうち語らひ居たるほどにたちはさかもとより、「御ともにもまゐり給はずと聞くはまことか。さらばまゐらむ」といひたれば、

「御方のなやましげにおはしてとまらせ給ひぬれば、何しにかは行かむ。いとつれづれなるをなむ慰めつべくはおはせ。ありとの給ひし繪、必もておはせ」といひたるは「女御殿のかたにこそいみじく多くさむらふべけれ。君おはし通はし見給ひてむ」といへるなりけり。帯刀やがてこの文を少將の君に見せ奉れば、「これや惟成がめの手、いたうこそ書きけれ。よきをりにこそありけれ。いきてたばかれ」とのたまふ。「繪一まさおろし給はらむ」と申せば、君「かのいひけむやうならむをりこそ見せめ」とのたまへば、「さも侍りぬべきをりにこそは侍るめれ」と申す。うち笑ひ給うて、御かたにおはして白き色紙に

こゆびさして口すばめたるかたをかきたまひて、

「めし侍れば、

つれなきをうしと思へる人はよに仕ゑみせじとこそ思ひがほなれ。をさな

とかい給へれば、出づとて、親に「をかきさまならむくだもの一餌袋しておい給へれば、今唯今とりに奉らむ」と言ひ置きていぬ。あこぎ呼び出でたれば、「いつこよりか」といへば、「くは此の御文見せ奉り給へ」、「いでそらごととにこそあらめ」といへどとりていぬ。君いとつれづれなるをりにて見たまへば「繪や聞えつる」とのたまへば、「帯刀がもとに去か去か言ひつるを御覽じつけゝるにはべるめり」といへば、「うたて、心なしと見えられたるやうにこそ。人に去られぬ人は無心なるこそよけれ」とて物しげにおもほしたり。帯刀が呼べばいぬ。物がたりして「誰々かとまり給へる」とさりげなくてあない問ふ。「いとさうさうしや。おうなどもの御許にくだもの取りにやらむ」とて、「何もあらむ物たまへ」といひにやりたれば、餌袋二つしてをかきさまにして入れたり。今一つのおほきやかなるにはさまさまのくだものいろいろのもちひ、薄きこき入れて、紙へだて、やいごめ入れて、

「こゝにてだにあやし、あわたしし口つきなれば旅にてさへいかに見給ふらむ。はづかしう。このやいごめは露といふらむ人に物し給へ」といへり。さうさうしげなるけしきを見て、いかで、はかなき志を見せむと思ひて去たるなりけり。女見て、「いであやし。まめくだものやけしからず、そこに去給へるにこそ」とるんず

れば、たちはき打ち笑ひて、「知らず。まろはかやうに見苦しげにしてむや。おうなどもの御さかしらなめり。露、「これ取り隠してよ」とてやりつ。二人ふして、かたみに君の御心ばへどもをかたる。こよひ雨降ればよもおはせじとて打ちたゆみて臥したり。女君、人なきをりにてこといとをかしうなつかしう弾き臥し給へり。帯刀をかしと聞きて「かゝるわざし給へるは」といへば「さかし。故うへの、六つにおはせし時より教へ給へるぞ」といふ程に少將いと忍びておはしにけり。人を入れ給ひて「聞ゆべきことわりてなむ。たちはき出で給へ」といはずればたちはき心得て、おはしにけりと思ひて、心あわたしくして、「只今對面す」とて出でゝいぬれば、あこぎ前に参りぬ。少將、「いかに。かゝるあめにきたるを徒に歸すな」とのたまへば帯刀「まづ御せうそこを賜はらで候音なくともおはしましにけるかな。人の御心も知らず、いとかたき事に侍る」と申せば、少將、「いといたくなすぐだちそ」とて、まろうち給へば、「さばれおりさせ給へ」とて諸共に入り給ふ。「御車はまだくらきにこ」とてかへしやりつ。我が曹司の遣戸口にまばし居てあるべき事きこゆ。人すくなゝるをりなれば心やすしとて、「まづかゝまみをせさせよ」との給へば、「まばし。心おとりもぞさせ給はむ。物忌の姫君のやうならば」と聞ゆれば笠もとりあへで袖をかづきてかへるばかり」と笑ひ給ふ。格子のはざまに入れ奉りて、留守のとのゐ人や見つくとおのれもまばしすのこにをる。君の見給へば、消えぬべく火ともしたり。几帳屏風だになければよく見ゆ。向ひ居たるはあこぎなめりと見ゆる、容體かしらつきをかしげにて、白ききぬうへにつやゝかなる搔練のあこめき

たり。そひ臥したる人あり。君なるべし。しろききぬのなえたと見ゆるを着て搔練のはり綿なるべし、腰よりしたに引きかけてそばみてあれば顔は見えず。かしらつき髪のかゝりはいとをかしげなりと見る程に火消えぬ。口惜しとおもほしけれと遂にはとおぼしなす。「あなくらのわざや。人ありといひつるを、はやいぬ」といふ聲もいとみじくあてはかなり。「人にあひにまかりぬるうちに、お前に侍はむ。大かたに人なければ恐しくおはしまさむものぞ」といへば「猶やは。おそろしさは目なれたれば」といふ。君出で給へば、「いかゞ御送り仕らまつるべき。み笠は」と申せば、「めを思へば、いたくかたひく」と笑ひ給ふ。心のうちには、きぬどもぞなえためる、耻しと思はむものぞとおもほしけれど、「はやその人呼び出でゝ寝よ」とのたまへば、さうしにゆきてよばすれど、「こよひはおまへに侍ふ。早うさむらひにまれおはしね」といへば、「唯今人のいひつる事聞えむ。唯あからさまに出で給へ」と聞えさせれば、「何事ぞとよ。かしがましや」とて遣戸おしあけて出でたれば、たちはき捕へて、「雨降る夜なめり。一人な寝をといひつればいざ給へ」といへば女笑ひて、「そよ、となかり」といへど強ひてゐて行きて臥しぬ。ものもいはで寝入りたるさまをつくりて臥せり。女君なは寝入られぬばことを臥しながらまきぐりつゝ、

「なべて世のうくなる時は身がくさむいはほの中のすみかもとめて」といひてとみに寝入るまじければ、又人はなかりつと思ひて格子を木のはしにていとよう放ちて押しあけて入りぬるに、いとおそろしく起きあがる程に、ふとよりてとらへ給ふ。あこぎ格子をあけら

る、音を聞きていかならむと驚き惑ひて起れば、帯刀さらけに起さず。「こはなぞ。み格子の
 鳴りつるを、などと見む」といへば「犬ならむ、鼠ならむぞ。な驚き給ひそ」といへば、「なでふ
 事ぞしたるやうのあればいふか」といへば「何わざかせむ。寝なむ」といひて臥したれば、
 「あなわびし。あなうたて」といひてはしく腹立てど、動きもせず抱き籠められてかひもな
 し。少將とらへながらさうぞくときて臥し給ひぬ。女、恐ろしう侘しくてわなき給ひて泣
 く。少將「いと心憂くおぼしたるに、世の中のあはれなる事も聞えむ。岩波の中もとめて奉
 らむとてこそ」とのたまへば、誰ならむと思ふよりもきぬどものいと侘しう袴のいとわろび
 過ぎたるを思ふに、唯今も死ぬるものにもがと泣くさまいといみじげなる氣色なれば、わづ
 らはしく覺えて物もいはで臥したり。あこぎがふしたる所も近ければ泣い給ふ聲もほのか
 に聞ゆれば、さればよと思ひて惑ひおくるをも更におこさせねば「我が君をいかにしなし奉
 りてかくはするぞや。あやしとは思ひつ。いとわいぎやうなかりける心もたりけるものか
 な」とて腹立ちかなぐりて起れば帯刀笑ふ。「事こまかにしらぬ事も、たゞおほせにおほせ
 給ふこそよからめ。うへにこの時ぬすびと入らむやは。男にこそおはすらめ。今はまゐり給
 うてもかひあらじ」といへば、「いで、猶つれなく物ないひそ。たれとだにいへ。いとわいぎ
 わざかな。いかにおもほし惑ふらむ」とてなけば、「あなわらはげや」と笑ふ。妬き事添ひて、
 わいおぼさうりける人に見えける事といとつらしとおもひたれば、心苦しうて「誠に少將の
 君なむ物の給はむとておはしたりつるを、いかならむ事ならむ。あなかま。とてもかくても

御すくせぞあらむ」といふを、「いとよくけしきをだに知らねど、君は心あはせたりとおぼさ
 むが侘しき事。何しに今宵こゝに來つらむ」と怨むれば、「知らぬけしきをだに見給はずやあ
 る。腹立ちな怨み給ひそ」と腹だ、せもあへずたはむれしたり。男君、「いとかうしもおぼい
 たるはいかなるにか。人かすにはあらねど、またかうまではなげい給ふ程にはわらずおぼゆ
 る。たびたびの御文見つとだにのたまはざりしにびんなき事と見てき。聞えでもわらずおぼ
 思ひしかども聞えそめ奉りて後、いと哀におぼえ給ひしかば、かうにくまれ奉るべきすくせ
 のあるなりけりと思ひ給へらるれば愛さもうからずのみなむ」と搔い抱きて臥し給へれば、
 女死ぬべき心地し給ふ。ひとへきぬはなく、袴一つきて所々あらはに身につきたるを思ふに
 いとわいぎとはおろかなり。涙よりも汗にしととなり。男君もその氣色をふと見給ひて、い
 とはしう哀に思はす。よろづ多くの給まへど御いらへあるべくもおぼえず。はづかしさにあ
 こぎをいとつらしと思ふ。辛うじて明けにけり。とりのなく聲すれば、男君、
 「君がかくなきわかすだに悲しきにいとつらめしきとりのこゑかな。いらへ時々は玄給
 へ。御聲聞えずばいと世づかぬ心ちすべし」との給へば辛うじてあるにもあらずいらふ。
 「人ごゝろ憂きにはとりたぐへつゝなくより外の聲はきこえじ」といふ聲いとらうた
 ければ少將の君なほざりに覺しゝを、まめやかに思ひ給ふべし。「御車ひてまゐりたり」とい
 ふを聞きて、帯刀、あこぎに、「まゐりて申し給へ」といへば、「よこはまゐらで今朝まゐらむ、
 げにまろが知りたる事とこそ思さめ。腹きたなく人にうとませ奉る事」と怨する、いはけな

さものからをかしければうち笑ひて、「君うとみ給はゞ、まる思はむかし」といひて格子のはざまによりてこわづくれば少將起き給ふに、女のきぬを引き着せ給ふに、ひとへもなくつめたければひとへを脱ぎすゞしておき出で給ふ。女、いと耻しき事かぎりなし。あこぎあいなくいとほしけれど、さてもはひり居たらぬば参りて見るにまだふい給へり。いかでいひ出でむと思ふほどに、帯刀のも君のもあり。たちはさのには、

「夜ひと夜、知らぬ事によりうちひき給ひつるこそいとわりなかりつれ。御ために少しにてもおろかならむ時は参らじ。まいていかなる目見せ給はむ。かねておそろしき御心ばせかな。お前にもいかに、よくもあつらひけるものかなとおぼしのたまはすらむと思ふ給ふれば、御文侍るめる、御かへり聞え出でたまへ。この世の中はさるべきにや、なにかおもはず」

といへり。もて参りて、「こゝに御文侍るめり。よべはいと怪しく思ひかけずして臥し侍りし程にはかなく明け侍りにけり。聞えさすともあらがふとぞおしはからせ給ふらむと推しはかるはことわりなれど、このけしきをだに見て侍らば」とよろづ誓ひ居たれど、いらへもせず、おきもあがり給はねば、「猶しりて侍りとおもはずにこそはべるめれ。心うく、いらの年ごろつからまつり侍りて、かくうしろめたき事はし侍りなむや。一人おはしまさむを思ふ給へて、をかしき御供にもまわり侍らずなりにしかひなくかゝるとわりを聞かせ給はず、かひなきみけしきならば、さむらはむもいとほしう侍り。いづちもいづちもまからぬむ」

とてうちなげゝば、君いといとほしうて、「そこに知りたりむとも思はず。いとあさましう思ひもかけぬ事なれば、いと心うく思ふ中に、いとみじげなる袴のありさまにて見えぬるこそいと言はむ方なく侘しけれ。故うへおはせましかば何事につけてもかくうきめ見ましかは」とて、いみじう泣き給へば、「げにことわりに侍れど、いみじき繼母といへど北の方のみ心のいみじうあさましきよしは、さきさきも聞かせ給へればこそはおぼすらめ。唯御心だに頼み奉りぬべくばいかにうれしからむ」「それこそまして。かくことやらならむ人を見て心とまりて思ふ人はありなむや。物の聞えあらば北の方いかにのたまはむ。我がいはざらむ人の事をだにきたらば、こゝにもおいたらじとのたまひしものを」といみじと思ひたまふれば、「さればなかなか思ひはなれ奉りたらむがよからむ。かくていはれおはしまさば、いつの世にもしよくもならせ給はむ。かくても世におはしまさじ。かくて籠めす奉り給ひてつかひ奉り給はむの心いとふかくてあらせ聞え給ふにはあらずや」と、いとおとなおとなしう言ひ居たり。「御かへりごとは」とへば、「はやら御文も御覽せよ。今はおぼしなげくともかひあらじ」とて御文ひろげて奉れば、うつぶしながら見給へば唯かくのみぞある。

「いかなれやむかし思ひしほどよりは今の間思ふことのまさは」とありけれど、いと心ちわしとて、御返事なし。あこぎ、かへりごとかく。

「いでや、心づきなくは何事ぞ。よべの心は限なくあいなく心づきなく腹ぎたなしと見てしかば今行くさきもいとたのもしげなくなむ。お前にはいと惱ましげにて、まだ起き

させ給はざれば御文もさながらなむ。いとこそ心苦しけれ、御けしきを見れば」といへり。少將の君に「かくなむ」と聞ゆれば、われをいともしと思はむやは、たゝかのきぬどもをいといみじとおもひたりつるなごりならむとおぼす。ひる間にまた御ふみかきたまふ。

「などかいまだにいとわりなげなる御けしきのいとほしさはふたりだに、戀しくもおもほゆるかな、さゝがにのいととけずのみ見ゆるけしきに、ことわりな」とあり。帯刀が文、

「このたびだに御かへりなくばびんなかりなむ。今は唯あひおぼせかし。御心はいと長げになむ見奉りのたまはする」

といへり。あこぎ「こたみは」といへど、いかに思ひ出で給ふらむと思ふにはづかしうつ、ましう侘しくて返り事書くべくもおぼしえねば唯きぬを引きかつぎて臥したり。聞えわづらひてあこぎかへりごとかく。

「御文御覽じつれど、まめやかに苦しげなるみけしきにてなむ御返り事もさていとながげにはなどか。いつのほどにかはみじかさも見え給はむ。まだたのもしげなくともうしろやすくのたまふらむ」

と書きてやりつ。たちはき見せ奉りたれば、「いみじくされて物よくいふべきものかな。むげに耻かしと思ひたりつるに、氣ののぼりたらむ」と、ほゝゑみてのたまふ。さてあこぎ唯一人していひ合すべき人もなければ心一つをちやになして立ちぬつ、おまし所の塵はらひそゝ

ぐりて屏風几帳なければ、まつらひなさむ方もなし。いとわりなけれど君は物も覺えて臥し給へるを、おましなほさむと引きおこし奉ればおもて赤みてげに苦しげなるまで御目も泣きはれ給へり。いとほしう哀にて、「みぐし掻きくだしへ給へ」とおとなおとなしくつくろへど、心地あしとて唯臥しにふしぬ。この君は聊かよき御調度もたまへりける。母君の御物なりけり。鏡なむまめやかに美しげなりける。「これをだにもたまへらざらましかば」といひて、かきのごひて枕がみに置く。かくおとなになりわらはになり、一人いそがしきこゝちす。今はおはしぬらむとて、「かたじけなくとも、まだいたう身にもなれ侍らす。いとほしう夜べをだにさて見え奉り給ひけむを」とて、おのが袴のふたゝびばかりきて、いと清げなるとのる物一つをもたりけるを、いとしのびて奉るとて、「いと馴れ馴れしう侍れど、まだ見知る人の侍らばこそあらめ。いかゞはせむ」といへば、かつは耻しけれど今宵さへ同じやうにて見えむ事を限なく思ひつるに、哀にて着給ひつ。「たきものはこの御裳着に賜はせたりしを、ゆめばかり包み置きて侍り」とて、いとかうばしうたきにははす。三尺の御几帳ひとつは入るべかめるいかゞせむ、誰にからまし、御とのる物も薄きを、思ひまはして、をばの殿ばら宮づかへしけるが、今は和泉の守のめにてゐたりけるがりに文遣る。

「とみなる事にて、とゞめはべらぬはづかしき人のかたがへに曹司にもものしたまふべきに、几帳ひとつ、さてはとのゐるものに人の乞ふも、便なきはえいだしはべらじと思ひ侍りてなむ。さるべきや侍る。賜はせてむや。多くはあやしき事なれど、とみにてなむ」

とはしりがきてやりたれば、

「おとづれ給はぬをこそいと心うく思ひ給ふれば、何も何も、猶のたまはむとのたまへればよろづとめつ。いとわやしけれど、おのが着むとしてしたりつるなり。さはしも物し給ふらむ。几帳奉る」

とて紫をん色のはり綿までおこせたり。いと嬉しき事かぎりなし。取り出で、見せ奉る。几帳の紐とりおろすほどに君おはしたれば入れ奉りつ。女臥したるがうたておぼゆれば、起れば「苦しうおぼし給はむに何か起きさせ給ふ」とて臥し給ひぬ。今宵は袴もいとかうばし。きぬもひとへもあれば例の人ごちし給ひて、男もつゝましからず臥し給ひぬ。今宵は時々御いらへしたまふ。世になくあるまじう覺え給ひて、よろづに語らひ給ふ程に夜も明けぬ。「御車ゐて参りたり」と申せば、「今雨やめて。しばし待て」とて臥し給へれば、あこぎ、御手水、粥いかで参らむと思ひて、みづしにやかたらはましと思へど、大かたにもおはしまさねば御粥も世にせじと思へど、いきてかたらふ。「たちはきのともだちなむよべ物いはむとてきたりしを、雨にとまりてまだかへらぬに粥くはせむと思ふをなむ、なくて。かはらけ少し賜へ。さてはひきばしなどや残りたる。少ししたまへ」といへば、「あないとほし。心いそぎをかうし給ふがいとほしき。かへらせ給はむ料に今少しあらむ」といへば、「かへり給はむには御としみをぞしたまはむ」とての襦けしきよろしと見て、傍なるへいしをあけて、たゞとり取るを「少しは残し給へ」といへば「さよさよ」といひて紙にとり分けてすみとりに入れてひき

隠してもていきて露に、「御粥いと清くしてもてこ」とてをかしげなる御臺もとめありく。御手水まゐらむと、もとめありけど、御方にはいづくのはぎふ盥かあらむ。三の御方のをとり

もて来て、お前にまゐらむとてかしらかいくだしなどして居たり。女君わりなく苦しと思ひて臥し給へり。あこぎ、いと清げにけさうじて帯ゆるらかにかけてまゐる。うしろで、髪たけに三尺ばかり餘りて、いとをかしげなりと帯刀も見送る。「この御格子はまゐらでやあらむする」と、ひとりごととして参るを、少將の君もいとゆかしうて、「いと暗し。あけよ」とのたまへば、物ふみたて、あげつ。男君おき給ひて、御さうぞくし給ひて、「車はありや」と問ひたまへば、「みかどにはべる」と申せば出で給ひなむとするに、いと清げにて御粥まゐりけ佐り。御手水とり具してまゐりたり。あやしうびなしと聞きしほどよりはとおぼす。女君はいとあやしう、いかでと思ひ給へり。雨少しよろしうなれば、人さわがしうあらねば、やをら出で給ひなむとす。女君の御方を見給へば、まめやかにいと美しくしげなれば、いとゞ限なくおもほし増りていとわはれとおぼす。粥など少しまゐりて臥し給ひぬ。夜さりは三日の夜なれば、いかさまにせむ、こよひもちひいかでまゐるわざもがなと思ふに、又いふべきかたもなければ和泉殿へ文かく。

「いとうれしう、さこえさせたりし者を賜はせたりしなむ、悦び聞えさする。又あやしとおぼさるへけれど、こよひもちひなむ、いとあやしきさまにてよう侍る、取りぐすべきくだもの赤と侍りぬへくは少ししたまはせよ。まらうどなむしばしと思ひ侍りしを、四

十五日のかたたがふるになむ侍りける。さればこのものどもは暫し侍るべきをいかゞ。盃はさぶの清げならむをしばし賜はらむ。取り集めて、いとかたはらいたけれど頼み聞えさするまゝに」

とてやりつ。少將の御許より、

「よそにてもなほわが戀をますか、みそへる影とはいかでならまし」とあれば、今日御返し、

「身をさらぬかげと見えてはます鏡はなくなうつることぞかなしき」。いとをかしげに書きたれば、いとをかしげに見給へるけしきも志ありがはなり。あこぎがもとには和泉の家より、

「昔の人の御かはりには、あはれに思ひ聞えて、女どもはべらねばむすめにし奉らむ。身一つはいとやすらかにうちかしづきてすゑ奉らむと思ひて、さきさき御迎へすれども渡り給はぬこそ怨み聞ゆれ。物どもはいとよかなり。いかにもいかにもつかひ給へ。盃はんぎふ奉る。あなことやう、宮仕する人はかやうのもの必もたらぬはなきが、今まではいかで頼まざりつる。身に便なきはいと見ぐるしきを、いとあやしき事、もちひはいと安き事、いまた今して奉らむ。物の具、もちひさどめすは御聲どりし給ひて三日のまうけし給ふか。まめやかにいかで對面もがな。いと戀しくなむ。何事も猶のたまへ。時のすりやうは、世にとくあるものといへば、只今そのほどなればつかまつらむ」

といとたのもしげに侍り。君に見せ奉れば「もちひは何の料に乞ひつるぞ」とのたまへば、うちらみて「猶あるやうありてなむ」と聞ゆ。臺のいとをかしげなる盃はさぶ、いと清げなり。大きなる餌袋に白いこめ入れて、紙をへだて、くだもの、からものつゝみて、いとくはしくしてなむおこせたりける。今宵はをかしさまにて、もちひをまゐらむと思ひて、とりてよろづにくだもの栗などかさつくろひ居たり。日やうやう暮るゝ程に、少しやみたる雨降る事かぎりなし。もちひや得ざらむと思ふ程に、男おほがささゝせて、朴のひつにおこせたり。嬉しき事物に似ず。見れば、いつの間にしたるにかあらむ、草もちひふたくさ、例のもちひふたくさ、ちひさやかにをかしうてさまざまなり。文には、

「にはかにのたまへりつれば、いときて。おもふさまにやあらざらむ。こゝろさしくちをし」

といへり。雨いたう降ると急げば酒ばかりのます。かへりごとは、「すべて聞えさすれば、世の常あり」とよろこびやりつ。まどまつとて嬉し。物の蓋に少し入れて君にまゐる。暗うなるまゝに、雨いとあやにくに、かしらさし出づべくもあらず。少將、たちはきに語らひ給ふ。「くちをしろ、かしこにはえいくまじがめり。この雨よ」とのたまへば、「ほどなくいとほしくぞ侍らむかし。さ侍れどあやにくなる雨はいかゞはせむ。こゝろのをこたりならばこそあらめ。さる御ふみをだにものせさせ給へ」とて、けしきいとくるしげなり。「さかし」とて書いたまふ。

「いつしかまゐり来むとしつるほどに、かうわりなかめればなむ、心のつみにあらぬど、おろかにおもはずな」とて、帯刀も、

「只今まゐらむ。きみおはしませむとしつるほどに、かゝる雨なれば、くちをしとなげかせ給ふ」

といへり。かゝれば、いみじうくちをしと思ひて、帯刀がかへりごとに、

「いでや、降るともといふこともあるを、いとゞしき御心さまにこそあめれ。さらに聞えさすべきにもあらず。御みづからは何の心地のよきにか来むとだにあるぞ。かゝるわやまちし出で、かゝるやうありや。さても世の人は今宵来ざらむよ」と書けり。君のかへり事にはたゞ、

「世にふるをうき身とおもふわが袖にぬればじめける宵の雨かな」とあり。もて参りたる程は、いぬの時も過ぎぬべし。ひのもとにて見給ひて、君もいとあはれと思ほしたり。帯刀がもとなる文を見給ひて、いみじうくねりためるは、げに今宵は三日の夜なりけるを、ものゝ初に、ものゝしう思ふらむ、いといとほし、雨はいやまさりにまされば思ひ侘びて、つらづゑをつきて、暫しより居給へり。帯刀、わりなしと思へり。うち歎きて立てば、少將「まばしむたれ。いかにぞや。いさやせむとする」。「かちよりまかりていひ慰め侍らむ」と申せば、「さらば我もいかむ」とのたまふ。嬉しと思ひて、「いとよう侍るなり」と申せば「おほかさ一つまうけ

よ。きぬぬぎてこむ」とて入り給ひぬ。たちはき、笠もとめにありく。わこぎ、かく出でたち給

ふもしらで、いとみじと歎く。「かゝるまゝに、あゝぎやうなの雨や」と腹立てば、君耻かしけれど、「などかくはいふぞ」との給へば、「猶よろしうふれかし。折にくくも侍るかな」といへば、「降りぞまされる」と忍びやかにいはれて、いかに思ふらむと耻かしうてそひ臥し給へり。男君はたゞ白き御ぞひとかさねを着給ひて、いとものうげに引きつれて、帯刀と唯二人出で給ひて、おほかさを二人さして、門をみそかにあけさせ給ひていと忍びやかに出で給ひぬ。つゝやみにて笑ふ笑ふ道のあしきをよろほひおはする程に、さきおひてあまた火ともさせて、こうぢぎりに辻にさしあひぬ。いとせばき小路なればえあゆみかくれず。かたそばみて笠を垂れかけて行けば、雑色ども、「このまかる者ども暫しかへりとまれ。かばかり雨もよに、夜中にたゞ二人いくはけしきあり。捕へよ」といへば、わびしくて、暫し歩みとまりて立てれば火をうちふりて、人々「足どもいと白し。ぬすびにはあらぬなめり」といへば、「まうどの小盗人は足白くこそ侍らめ」と、いき過ぐるまゝに、「かく立てるはなぞ。お侍れ」とて笠をほうほうと打てば、くそのいと多かる上にかゝまりぬぬ。又、ちはやりたる人、「強ひてこの笠をさしかくして顔を隠すはなぞ」とて、いき過ぐるまゝに、おほかさを引き傾ぶけて、笠につきてくその上にゐたるを、火を打ちふりて見て「さしぬき着たりける。身貧しき人の、思ふめのがりいくにこそ」など、口々にいひておはしぬれば、起ちて、「衛門の督のおはするなめり。我を嫌疑の者と思ひて捕ふると思ひつるにこそ死にたりつれ。我を足白き盗人といふ

たりつるこそをかしかりつれ」など唯二人語らひて笑ひ給ふ。「あはれ、これよりかへりなむ。くそつきたり。いと臭くていきたらば、なかなかうとまれなむ」とのたまへば、帯刀笑ふ笑ふ「かゝる雨にかくておはしましたらば、御志をおぼさむ人はさかうのかにも嗅ぎなし奉りてむ。殿はいと遠くなり侍りぬ。行く先はいと近し。猶おはしまさなむ」といへば、かばかり志深きさまにており立ちていたづらにやなさむとおぼしておはしぬ。かど辛うじてわけさせて入り給ひぬ。帯刀がさうしにて、まづ水とて御足すまます。又帯刀も洗ひて「曉には疾く起きよ。まだ暗からむにかへらむ。とまりてあるべきにもわらず。いとことやうなる姿なるべし」とのたまひて、格子忍びやかに叩い給ふ。女君、今宵こぬをつらしと思ふにはあらで、大方開え出でばいかに北の方のたまはむ、世の中のすべて憂き事思ひ亂れて、うち歎きて臥し給へり。あこぎ、思ひまうけたるかひなげに思ひてお前により臥したれば、ふと起きば入りおはしたるさま、しほるばかりなり。かちよりおはしたるなめりと思ふに、めでたくあはれなる事二つなくて、「いかでかくは濡れさせ給へるぞ」と聞ゆれば、「惟成が勘當重しとわびつるが苦しさに、くゝりをはぎにあげて來つるに、倒れて土つきたり」とて脱ぎ給へば、女君の御ぞをとりて着せ奉りて「ほし侍らむ」と聞ゆれば脱ぎ給ひつ。女君の臥し給へる所により給ひて、「かくばかり哀にてきたりとして、ふとかい抱き給はゞこそあらめ」とてかいさぐり給ふに、袖の少し濡れたるを、男君、こざりつるを思ひけるもあはれにて、

「何事を思へるさまの袖ならむ」とのたまへば女君、

「身をしる雨のしづくなるべし」とのたまへば、「今宵は身を知るならば、いとかばかりにこそ」とて臥し給ひぬ。あこぎ、このもちひを箱のふたにをかしう取りなして参りて「これいかで」と聞ゆれば、「なぞ」とて、かしらもたげて見上げ給へばもちひををかしうしたれば少將、たれかくきたらむ、かくて待ちけると思ふに、ぎれてをかしければ「もちひにこそあめれ。くふやうありとかいにする」とのたまへば、あこぎ、「まだやは知らせ給はぬ」と申せば、「いかゞ、一人あるには喰ふわざかは」とのたまへば、聞きて「三つとこそは」と申せば、「まさきくぞあなる。女はいくつか」とのたまへば、「それは御心にこそ」とて笑ふ。「これ参れ」と女君にのたまへど、耻ぢてまゐらず。いと實はふに三つくひて、「藏人の少將もかくやくひし」とのたまへば、「さこそは」といひぬたり。夜更けぬれば寐給ひぬ。たちはきかりいきたれば、まだしとゞにかいかままりてゐたり。「笠はなくやありつらむ、かく濡れたるは」といへば、忍びて道のほどの事いひて笑ふ。「かばかり御こゝろざしは今も昔もあらじ。たぐひなしと思ひ聞え給はぬにや」といへば、「少し宜しかなれとなほあかぬ」「これを少し宜しきとは、女はおほけなきこそにくけれ。いみじくつらき御心のつくとも、みそたびばかりは今宵にゆるし聞え給ひてむ」などいへば。「れいのおのが方さまに物いふ」などいひて寝ぬ。「まめやかに今宵おはせざらましかばいみじからまし」などいひて寝ぬ。夜さへ更けぬれば、いとく明け過ぎぬ。しかでかへらむとし給ふほどに、あこぎ、いとほしまわざかな、石山よ

りも、今日はかへりおはしぬらむ、人もこそふとくれと思ふも、しづごゝろなくて、御粥、御手水など思ふに、いそぎありければ、帯刀「ちどかくしづごゝろなくはありき給ふ」といへば、「いかゞは、程もなき所に人をすゑ奉りたれば、人やふとくるとて、さわぎありくぞかし」といらふ。「車取りにやれ。やをらふと出でなむ」との給ふ程に、石山の人、しりてかへりおはしぬ。「不用なめり」とて出で給はずなりぬ。「女、かくかくれもなき所に人もこそくれ、いかにせむと胸つぶれて、いとおそろし。あこぎも、いとあわたしくおほゆ。あはせ、みだいに清げにて粥まゐりたり。御手水いそぎありくが心もとなければ、今人ひとりもがなと思ふ。いと疾く車よりおり給ひ、遅きとて北の方「あこぎ」と呼びの、しり給へば隔のさう子をわけて出づればさすべき心地も覺えず、格子のはさまだてにまゐりたれば「下向したる人はくるしければうち休むに、このごろやすみつらむ。おる、所にこぬはなぞ。すべて人の身と嬉しき事と思ひながら」きたなきもの打ちさかへ侍りつる程なり」と聞ゆれば「早う御手水參れ」とのたまへば立ちてありく空もなし。おものもいできにければ、みづしどころに來て「わが君わが君」といひて、かのしろき米多くに代へて御臺まゐりにきぬ。物のくさはひ見ならひたれば少將の君、びなしとのみ聞きしにいと心にく、おぼす。女君いかならむとおぼす。男君もをさをさ參らず。女君はたおき居給はねば、御まがりして帯刀にいと清げにして食はせられたればいふやう「この日のころさむらひつれどかくおろしなどや見えつる。猶我が

君のおはしますけなりけり」といへば、「嬉しき御心見えむとするうまのはなむけ」といへば、「あな恐しの事や」とて誰も誰も笑ふ。かうてひるときまで、ふた所臥し給へるほどに、例はさしものぞき給はぬ北の方、なかへだてのさうじをわけ給ふに、かたければ、「これわけよ」とのたまふに、あこぎも君もいかにせむと詫び給へば、「さばれ、わけ給へ。几帳わけ給へらば、物引きかづきて臥いたらむ」とのたまへば、さしものぞき給ふとわりなけれど、やるべきかたもなければ、几帳ながらに押し寄せて女君居給へり。北の方、「などおそくはわけつるぞ」と問ひ給へば、「けふあす御物忌に侍り」といらふれば、「あなことをとし。なでふ、我が家などなき所にて物忌や侍る」とのたまへば、「わが君猶わけよ」とて開けさせれば、あらゝかに押しわけて入りまして、つい居て見れば例ならず清げにしつらひて几帳たて、君もいとをかしげに取りつくるひて大かたのかもいとかうばしければ、あやしくなりて、「など、このさまも、御さまも例ならぬ。もし我がなかりつるうちに事やありつる」とのたまへば、おもてうちあかめて、「何事か侍らむ」といらへ給ふ。少將、いかゝあるとゆかしうて、几帳のはころびより臥しながら見給へば、白き綾の搔練などよからねど重ね着て、おもてひらゝかにて北の方と見えたり。口つきあいぎやうづきて、少しにはひたるけつきたり。清げなりけり。唯眉の程にぞおやすげ、あしげさも少し出で居たりと見る。「参りたるやうは、今日こゝに買ひたる鏡のをかしげなるに、この御箱の入りぬべく見えし、暫し給へと聞えむとてなむ、かうはくなり」とのたまへば、いとかう心安くものし給へば、「いとよくなむ。さば給へ」とて引

きよせ奉り給へり。うちふして我がも給へる入れ給へり。げに入りたれば、「かしこきものを
も買ひてけるかな。この箱のやうに、今の世の蒔繪こそ更にせぬ」とて、かき撫で給へばあこ
ぎ、いとにくしと見て、「この御鏡の箱もなくてや」といへば、「今又もとめて奉らむ」とて立
ち給ふ。いと心ゆきたるさまにて、「かの几帳はいづこのぞ。いと清げなり。例に似ぬ物もあ
り。猶けしきづきたり」とのたまへば、女君、いかに聞くらむと耻かし。「なくてあしければ取
りにやり侍りつ」と聞ゆ。猶けしきをうたがはしく思ひ給ひぬる後にあこぎ、「まめやかにを
かしくこそ侍れ。奉り給はむ事こそなからめ。もたまへる御調度をかくのみに取らせ給へる
よ。さきさきの御聲どりにしかへて、唯まばしと屏風よりはじめて取り給ひて、唯我が物の
具のやうにてたて散しておはします、御まきをだに北に聞えとり給ひてき。今殿にも出でま
うで來なむ。この御方の物は唯見るまゝに御かたがたの物にのみなりはてぬ。かく心ひろく
おはしませども、人の御志やは見ゆる」と腹だち居たれば、女君をかしくて、「さばれ、いづれ
もいづれも用はてなばたびてむ」といらふれば、げにと聞き給ふ。几帳押しやりて出て、
女君引き入れて、「まだ若うものし給ひけるは、むすめどもはこれにや似たる」とのたまへ
ば、「さもあらず。みなをかしげになむおはし給ふめる。怪しう見苦しうも見え給へるかな。
聞きつけて、いかゞのたまはむ」といふ。少しうちとけたるを見るまゝに、いとをかしげなれ
ば、なほあらじにて思ひやみなましかばと思ふ。鏡の箱のかはり、このあこ君といふわらは
しておこせたり。黒ぬりの箱の九寸ばかりなるが、深さは三寸ばかりにてふるめきまどひ

て、處々はげたるを、「これ黒けれど漆つきていと清きなり」とのたまへれば、をかしとわら
ひて御鏡入れて見るに、こよなければ、「あな見ぐるし。なかなか入れでもたせ給へ。いとら
たてげに侍り」と聞ゆれば、「さばれ、ないひそ。賜はりぬ、げにいとよう侍り」とて使やりつ。
少將見給ひて、「かゝるこたいの物を見出で給ひつらむ、老ひ給ふめるものは、さる姿にて、
世に物もかしこしかし」と笑ひ給ふ。明けぬれば出で給ひぬ。女君起き給ひて、「いかにして
かくはぢかゝす事はしつるぞ。几帳こそいと嬉しけれ」とのたまふ。阿漕、「まぞして侍りし」
など聞ゆ。をさなき心地にて、思ひよらぬ事玄出でけりとあはれにらうたくて、げに後見と
つけしかひありと思ふ。帯刀があたりし事どもを語りて、いとあはれにて、「御心ながくは、
妬く思ひおとしたる世に、いかに嬉しからむ」といふ。その夜は少將うち参りて、えおはせ
ず。つとめて御文あり。

「夜べはうちに参りてなむ、えまゐりこすなりにし。いかに、あこぎ惟成が勘當しはべり
けむと思ひやりしもをかしろこそ。さがなさは、たがを習ひたるにかと思ふにもおそろ
しうなむ。今宵は、昔は物をとなむ。

さらでこそそのいにしへも過ぎにしを一夜経にけることぞかなしき。つゝましき事の
み多くおぼされたため。世ははなれ給ふべしや。心やすき所もとめてむ」

とこまやかに聞え給へり。「御かへりはや」とて「もて参らむ」と帯刀が聞ゆ。御文を見て阿漕
笑ふ。「かたり申してけりといふべき人のなさまゝにこそいさかはれ侍れ」といふ。

よへはまださしぐる、
 ひとすぢに思ふ心はなかりけりいとうき身のわくかたもなき。誠にうき世はかどさ
 せりともいふやうに出でがたくなむ。あこぎは罪あらむ、人はおぢ給ひぬべし」
 とあるを、持て出づるほどに、藏人少將まづ召すといふれば、え置きあへで懐にさし入れ
 うつぶしたるほどに、ふところなる文の落ちぬるをもえ知らず。少將見つけ給ひて、ふと取
 り給ひつ。御髪搔きはて、入り給ふに、いとをかしければ三の君に、「これ見給へ。惟成がお
 としたりつるぞ」と奉りたまふ。「手こそいとをかしけれ」との給ふ。「落窪の君の手にこ
 そ」とのたまふ。少將、「さは誰をかいふ。あやしの人の名や」といふ人あり。物縫ふ人ぞと
 てやみぬ。三の君は文を取り給ひて、あやしと思ひ居給へり。帯月、御ゆするの調度など取り
 置きて、立つとて掻いさぐるになし。心さわぎて起ちぬるひ、紐とさてもとむれど絶えて
 なければ、いかになりぬらむと思ひて顔あかめて居たり。身よりほかにありかねば、落つと
 もこゝにこそあらめとて、おましをまづ上げてふるへどもいづこにかあらむ。人や取りつら
 む、いかなる事出で来むと思ひなげきて、つらづゑをつきて、はれて居たるを少將出づとて
 見給ひて、「など、惟成がいたうしめやきたる。物やうしなひたる」とて笑ひ給ふに、この君の
 とりかくし給ふなめりと思ふに、死ぬる心地す。いとわりなげなる氣色にて、「いかで賜はり
 なむ」と申せば、「我はしらす。ひめ君こそ末の松山とこそいひつめれ」とて出で給ひぬ。いは

むかたなくて、あの君と思はむ事耻かしけれど、いかゞはせむとてあこぎがもとにさして、
 「ありつる御かへり、みづから参らむにもて参らむとて出づるほどにしか召して、御髪かゝ
 せ給へるほどに、かうしてとられ奉りぬ。いとみじうこそ」と我にもあらぬけしきにてい
 へば、あこぎ「いとみじき事かな。いかなるのしり出でこむとすらむ。いとしくこの御
 方のけしきありと疑ひたまふものを、いかにさわがれ給はむとすらむ」と、ふたり汗にあり
 ていとほしがる。三の君、この文を北の方に、しかじかしてありつるとて見せ奉り給へば
 「さればよ、けしきありと見つ。誰ならむ。帯刀が住むにやあらむ。そがもたりつらむはむか
 へむといひたるにこそあめれ。出でがたしといひつるは男あはせじとしつるものを、いと口
 をしきわぎかな。男出で来なばかうては世にあらじ。迎へてむ。なくては大事なり。よきあご
 たちの使ひ人と見置きたりつるものを、いかなるぬすびとのかゝるわざはし出でつらむ。ま
 だきにいはいかくし惑はむものぞ」。この文も出させで氣色を見るに、人も言ひさわがねば、
 あやしう思ふ。女君には、「御文はかうかうし侍りにけり。おもて耻かしきやうなれど、侍り
 つるやうに御文かゝせ給ひて賜はらむ」といへば、君いと怪しと思ひ給へりとはおろかな
 り。北の方も見給ひつらむと思ふに、こゝちもいと怪しうて、「又もえ聞ゆまじ」となげき給
 ふ事かぎりあし。帯刀もいとほしうて、少將の君のお前にも参らず、籠りぬたり。暮れぬれば
 おはしぬ。御かへりはなど給はざりつる」とのたまへば、「北の方のおはしつるほどに」との
 給ひて、大殿でもりぬ。程なくわけつれば出で給ふに、明け過ぎて人騒がしければ、え出で給

はでかへり入り給うて臥し給ひぬ。あこぎ、例のみだいいいしありく。少將、君靜かに臥し給うて物語し給ふ。「四の君は、いくらおほきさにかなり給ひぬる」とのたまへば、「十三四のほどにてをかしげなり」といへば、「誠にやあらむ。まろにあはせむと中納言ののたまふなるとぞ。めのとなる人こそ殿なる人を知りて、御文みて、北の方もいかでとなむのたまふとて、めのとなる人こそ俄にせめしか。かゝると聞え給へといはむに、いかおぼす」とのたまへば、「心うしとこそ思はめ」とのたまふ。こゝしければ、らうたしと思ひて、「こゝはいみじう参りくるも人げなき心ちするを、わたし奉らむ所におはしなむや」とのたまへば、「御心にこそは」とのたまへば、「さらばや」との給ひて臥し給へり。程は十一月廿三日の程なり。三の君の男くらうどの少將、俄に臨時の祭のまひ人にさゝれ給ひければ、北の方手惑ひし給ふ。あこぎろなう御縫物もてきなむものぞと胸つぶるゝもしるく、うへの袴裁ちて、「これ只今ぬはせ給へ。御縫物出で來なむとなむ聞え給ふ」といふ。君は几帳の内に臥し給へれば阿漕ぞいらふる。「いかなるにか、夜べよりなやませ給うてうちやすませ給へり。今おきさせ給はむ時に聞えさせむ」といへば、使かへりぬ。女君、縫はむとて起きたまふ。「まろひとり、いかでつくづくと臥したらむ」とておこし奉り給はず。北の方、「いかに縫ひ給ひつや」と問ひ給へば、「さもわらず。まだおほとのもりたりと阿漕が申しつるは」といへば北の方、「なぞのおは殿ごもりぞ。物いひしらすなありそ。我等とひとつ口になぞいふは聞きにくし。あなわかわかしの晝寝や。まか身のほどしらぬこそいと心憂けれ」とてうちあざわらひ給ふ。し

たがさね裁ちてもていましたれば驚きて几帳のとに出でぬ。見ればうへの袴も縫はでおきたり。けしきあしうなりて、「手をだにふれざりけるは。今は出でさぬらむとこそ思ひつれ。あやしうおのがいふ事こそわなづられたれ。このころみ心そり出で、けさうはやりたりとは見ゆや」とのたまふに、女いと侘しう、いかに聞えむと我にもあらぬ心地して「惱ましう侍りつれば、暫しためらひて」とて、「これは只今出で來なむものを」とて引き寄すれば、「おどろき馬のやうに手なふれたまひそ。人だぬの絶えたるぞかし。空うけがへなる人にのみいふは、このしたかさねも只今縫ひ給はずばこゝにもなおはしそ」とて腹立ちて投げかけて立ち給ふ。少將のなほしの方より出でたるをふと見つけて、「いで、この直衣はいづこのぞ」と立ちとゞまりてのたまへば、あこぎいと侘しと思ひて「人のぬはせに奉り給へる」と申せば、「まづ外の物をしたまひてこゝのをおろかに思ひ給へる。もはらくておはするにかひなし。あなしらじらしの世や」とうちむつかりてゆくうしろで、子多くうみたるに落ちてわづかに十すぢばかりにていたげなり。うちふくれていとをこがましと少將つくづくとかいま見ふしたり。女われにもあらで物折る。少將、きぬのすそをとらへて、「まづおはせ」とひさせむれば笑ひて入りぬ。「にくし。な縫ひ給ひそ。今少し腹だて惑はし給へ。このことはなぞ。としころはかうや聞えつるいかで堪へ給へる」とのたまへば女「山梨にこそは」といならふ。暗うなりぬれば格子おろさせて、燈臺に火ともさせて、いかで縫ひはてむと思ふ程に北の方、縫ふやと、みそかにいましにけり。見給へば、縫物はうちちらして、火はともして人

もなし。入り臥しにけりとおもふに、おほきに腹だちて「おとこ、この落窪の君の心わい
 ぎやうなく見わづらひぬれまこれいましてのたまへ。かくばかり急ぐものを、いづこなりし
 几帳にかあらむ、持しらしぬものまうけてついで、入り臥し入り臥しすることよ」とのた
 まへば、おとこ「近くおはしてのたまへ」との給へば、いらへ遠くなりぬればのこりの詞は聞
 えず。少將、落窪の君とは聞かざりければ、「何の名ぞ落窪は」といへば女いみじう耻かしく
 て、「いさ」といふ。「人の名にいかにつけたるぞ。ろなうくしたる人の名ならむ。さらさら
 しからぬひとの名なり。またの方さいなみだちになり。さがなくぞおはしますべき」といひ
 ふし給ひけり。うへのきぬ裁ちておこせたり。又おそくも縫ふとて、よろづの事おとこに
 聞えて、「いきてのたまへのたまへ」と責められて、おはして遣戸を引きわけ給ふよりのたま
 ふやう「いなやこの落窪の君、あなたの給ふ事にしたがはず、あしかんなるはなぞ。おやな
 かんめればいかで宜しう思はれにしがなとこそ思はめ。かばかり急ぐにはかの物を縫ひて
 こゝの物に手觸れざらむや。何のこゝろぞ。夜のうちに縫ひたてずば子とも見じ」とのたま
 へば、女いらへもせでつづつと泣きたまひぬ。おとこいひかけてかへり給ひぬ。人の聞
 くに耻かしく、はぢの限いはれつる、きは我と聞かれぬる事よと思ふに、只今死ぬるもの
 もがなと縫物は暫しおしやりて火の暗き方に向きていみじう泣けば、少將哀にことわり
 ていかにげに耻かしと思ふらむと「暫し入りて臥し給へ」とせめて引き入れ給うてよろづ
 にいひ慰め給ふ。落窪の君とはこの人の名なりけり、我がいひつる事いかに耻かしと思ふら

むといとほし。繼母こそあらめ、中納言さへにくいひつるかな、いとみじく思ひたるに
 こそあらめ、いかでよくて見てしがなと心のうちにおもはず。北の方多くの物どもをえ縫ひ
 出でじと思ひて、少納言とてかたちある人の清げなる「いきて諸共にぬへ」とておこせられ
 ば、さて「いづこをか縫ひ侍らむ。なかおほとのごもりけるは。さばかりおそからむもの
 ぞと聞え給ふものを」といへば、「こゝちのあしければなむ。その縫ひさしたるは、おまへぬ
 ひ給へ」といへば取り寄せてぬひて、「猶よろしくば起きさせ給へ。こゝのひだおほえ侍ら
 ず」といへば、「今まばし。教へて縫はせむ」と辛うじて起きてぬざり出でたり。少將見れば
 少納言はかげにいと清げなり。よきものこそありけれと見給ふ。女君を見おこせられたば、い
 といたう泣きつやめきたるを見ておはれとや思ひけむ、いふやう「聞えさすればことよきや
 うに侍り。さりとて聞えさせねば、さる心ばへありとだに知らせ給はじとくちをしさに
 ぬ。えさらずさむらひはべる御かたよりも、この年ごろ御心ばへも見まらするに、仕うま
 つらまほしう侍れど、世の中のうたて煩はしう侍ればつゝましうてなむ、人知れぬ宮仕もえ
 仕うまつらぬ」と聞ゆれば、女君「さるべき人もことにまごゝろなるけしきも見えぬに、嬉し
 くも思ひ給うけるかな」といらへ給へば、少納言、「げにこそあやしうは侍れ。うへのあやし
 うおはせむは例の事、御はらからのきんだちさへみづから聞え給はざめるこそいと心づき
 なけれ。わたら御さまをかくてつくづくおはしますこそあいなけれ。四の君又御聲取ま給は
 むとて設け給ふめり。北の方の御心に任せてのべまゝめま給ふ」とめでたさや。誰をか取り

給ふ」とのたまへば「左大将殿の左近の少將をか。かたちはいと清げにおはするが、うちに唯今寄り出で給ひなむと人々ほむ。みかどもときめかしおぼす。御めはなし。いとよき人の御聲なり。いかでこのわたりにもがなと思ふとおとゞも常にのたまふとて、北の方いそぎにいそぎ給うて、四の君の御めの子、かの殿なりける人をしりたりけるをよろこび給うて、さいめきさわぎ給ひて、文やらせ給ふめり」といへば、をかしくて、「さて」といひていとほゝゑみたるまみ口つき火の明きにはえてにはひたるものから恥かしげなり。「少將の君はいかゞいふ」と君のたまへば、「知らず。よかなりとやのたまふらむ。人知れず急ぎ給ふ」といふに、少將「空ごと」といひらへまほしけれど念じかへして臥し給へり。少納言「さらうどの又添ひ給は、御前の御身ぞいと苦しげにおはしますべかかぬ。よき事もあらばせさせ給ふべし」といへば「なでふかゝる見苦しき人がさる事は思ひかくる」といへば、「いであなけしからずや。などかくは仰せらるゝ。このかしづかれ給ふ御方々はなかなか」と言ひさして「誠にこの世の中に恥かしきものとおぼし給へる辨の少將の君よ、人け交野の少將と申すめるを、その殿に、かの男君の御方に少將と申すは少納言がいとこに侍り。殿の局に常にまかり侍りしかばかの人もこの殿の人と知りて心づかひま給へりき。御かたちのなまめかしさは、げにたぐひあらじとこそ見侍りしか。御むすめおほかりと聞きしはいかゞとて、おほいきみよりはじめてくはしく問ひ聞え給ひしかば、かたはしつゝ聞え侍りしに、御前の御うへを申し侍りしかばなむ、いといたう哀がり聞え給ひて、我いと思ふさまにおはすなるを、必

御文つたへてむやとのたまひしかば、かくいとあまたおはしますうちにも、御母君などおはしまさねば心細げにおぼしてかゝるすぢの事おぼしかけずと申し侍りしかば、その御母おはせぬこそはいと心ぐるしくあはれまさらめ、わがほいにはいと花やかならざらむ女の物思ひまらむが、かたちをかしげならむこそもろこし新羅までもとめむと思ふ、こゝにおはするみやすどころをはなち奉りては父母おはする人やおはする、さて心にまかせておはすらむよりはわたくしものにて我が所に住ませ奉らむなど、いと細やかになむ依ふくるまでのたまはせしが、参りて後も、かの事はいかに、御文や奉るべきとのたまはせたりしかど、をりあしくて、今御覽せさせむと申す」といへども、いらへもま給はずなりぬるほどに、さうしより人たづねに来て「とみの事聞えむ」といへば出でたり。「人おはして。出でたまへ。聞ゆべき事ある」といへば、「まばし待て。御せうそこ聞えさせむ」とて入りぬ。「御あへづらひ仕らまつり侍らむと思ひ給ふるを、とみの事とて人まうできたれば聞えさせる事のこりもまだおほかり。えんをかして侍りし。まめやかに聞えさせ侍らむ。うへにかくおりぬとみ聞えさせ給ひそ。驚きさいなまむものぞ。さりぬべくばまらのぼらむ」とておりぬ。少將几帳押しやりて、「をかしく物清げにいひつる人かな。かたちも清げなりと見つる程に交野の少將をかたちよしと譽め聞かせ奉りつるにこそ見まうくなりぬれ。さもいらへ給はでこなたを見おこせ給ひて心もとなげに口づくろひし給へるかな。はべらざらましかばかひある御いらへもあらまし。文だにもて來そめなばかぎりぞ。かれはいと怪しき人のくせにて、

文一くだりやりつるがはづる、やうなければ、人のめ、帝の御めも持たるぞかし。さていたづらになりたるやうなるぞかし。そがうちになたくしものと聞ゆなればいとおぼえ殊におはするは」といとわいなく物しげにおほしてのたまへば、女いとあやしとおほして、物ものたまはず。「など物はのたまはぬ。をかしう思ひ給へる事を物しう聞ゆるがいらへにく、おぼざる、か。都の内にな女といふかぎりには交野の少將めで惑はぬなきこそうらやましけれ」とのたまへば、女君、「その數ならねばにやあらむ」と忍びやかにのたまへば、少將、「このすちはいとやんどとなければ、中宮ばかりにはなり給ひなむをや」とのたまへど、をさをささも知らぬ事なればいらへず。物縫ひ居給へる手つきいと白うをかしげなり。わこぎは少納言ありと思ひてたちはきが心地あしうしたれば、あはしと思ひて入りにつけり。したがさね縫ひ出で、うへのきぬ折らむとて、「いかで、わこぎ起さむ」とのたまへば、少將「ひかへむ」とのたまふ。女君、「見ぐるし」とのたまへど、几帳をとのかたにたて、起き居て、「猶ひかへさせ給へ。いみじきもの師ぞ、まろは」とてむかひてをらせ給ふ。いとつきなげなるものから心しらびの用意過ぎていとさかしらなり。女笑ふ笑ふ折る。「四の君の事は誠にこそありけれ」とのたまへば、「おほんゆるされあるを、知らずがほかりや」とのたまひ、物ぐるほし。交野の少將の私物設けむ時はしもおほやけおほやけしくととられむ」と笑ふ。「夜いたう更けぬ。大殿籠り給ひぬ」とせむれば、「今少しなめり。早う寐給ひぬ。縫ひはてむ」といへば、「ひとり起き居給はむが」とてね給はぬ程に北の方縫はで寐やしぬらむとて後めたうて、ねしづまる頃に例

のかいままの穴よりのぞけば少納言はなし。こなたに几帳たてたれどそばの方より見入るれば女こなたの方にうしろを向きてもたる物を折る。むかひてひかへたる男あり。なまねむたかりつる目も覺めて驚きて見れば、白きうちきのいと清げなる、搔練のいとつややかなるひとかさね、山吹なる、まだきぬのあるは、女の裳着たるやうに腰よりしもに引きかけたり。火のあかり影にいと見まほしう清げにわいぎやうづきをかしげなり。又なく思ひいたはる藏人の少將よりも勝りていと清げなれば心惑ひぬ。男志たる氣色は見れど、よろしきものにやあらむとこそ思ひつれ、さらにこれはたゞのものにはあらず、かくばかりそひ居てめ、しく諸共にするはおほろげの志にはあらじ、いといみじきわざかな、よくなりて、我が次第にはかなふまじきなめりと思ふに、縫物の事もおぼえず、ねたうて猶暫し立てれば、「知らぬわざしてまろもこうじにたり。そこもねむげにおもほしためり。猶縫ひさしてふし給うて、北の方例の腹立てさせ給へ」といへば、「腹たて給ふを見るがいと苦しきなり」とて猶縫ひに、あやにくがりて火をあふぎ消ちつ。女君「いとわりなきわざかな。取りも置かで」といとくするしがれば、「唯几帳にかけ給へ」とて手づからたみかけて掻い抱きて臥しぬ。北の方聞きはて、いと妬しと思ふ、例の腹立てよといひつるはさきざき我が腹立つを聞きたるにやあらむ、語りたるにやあらむ、いと妬しとつくづくと臥して思ふに、ゆく方なければ猶おといにや申してましと思へど、かたちはよし、さきざきなほしなど見るによき人ならばもて出でや玄給はむと危ふくて、猶たちはきにあひたるといひなしてむ、放ちするればかゝるぞ、

部屋に籠めて、いかでか腹だ、せよとはいはずべきと、いとねたままに思ひたばかる。籠めたらむほどに男け思ひわすれむ、わがをぢなるがこゝに曹司して、興樂の助にて身貧しきがむそぢばかりなる、さすがにたはしきに、からみまはさせておきたらむと夜一意思ひ明すもしらで、少將いとあはれにうち語らひて明けぬれば出で給ひぬ。やがていそぎ縫ひかけゝるほどに、北の方起きてぬひさすと見しを、まだしくはあたふばかりいみじくのしらむとおぼして、「縫ひ物たまへ。出で来ぬらむ」といはず給へれば、いと美しげにまかさねて出したれば、はいなきこゝちしてくちをしくいかに出で来にけむとてやみぬ。少將のもとより御文あり。

「いかにぞ、夜へのぬひさし物は。腹まだ立ち出でずや。いと聞かまほしくてこそ。さて笛わすれて来にけり。取りて賜へ。唯今うちの御あそびにまゐるあり」とあり。げにいとかうばしき笛あり。つゝみてやる。

「腹はけしからず。人もこそ聞け。かうなおぼし出でそ。いとようゑみてなむあめる。笛たてまつる。これをさへ忘れ給うければ」

これも猶あだにぞ見ゆる笛竹の手なるゝふしを忘るとおもへば」とわれれば、少將いとほしと思ひて、

「あだなりと思ひけるかな笛竹の千代もねたえむふしもあらじを」となむありける。この少將出でぬるすなはち北の方おと々に申したまふ。「さる事はありな

むやと思ふもまゐる、この落窪の君のやさしくいみじきことま出でたりけるがいみじき。さすがにさしはなれたる人ならばともかくもすべきに、いとこそかたはなれ」とのたまへば、おとど驚きまどひて、「何事ぞ」と問ひ給へば「この藏人の少將の方なる帯刀といふは、この月をろわこぎに住むと聞き思ひつるはさうじみに立ちかゝりにけり。文のかへり事を、まれたる者にて、懐に入れてもたりけるを、この少將の君の前におとしたりければ見つけ給ひて委しき心づきたる君にて、たがぞと帯刀に問ひせめ給うければ、隠さでしかじかと申しければ、いと清げなるわひ聲とり給うてけるかな、あな名だゝし、人の見聞かむもいとみじ、これな住ませ給ひそ」と恥かしげにのたまひける」と詳しく申し給うてければ、老い給へるほどよりはつまはじきをいとちからちからしくま給ひて、「いとふかひなき事をもしたるかな。かくて居れば皆人は子の數とまゐりたるに、六位といへど藏人にだにあらす。つちの帯刀の歳ははたちばかり、たけは一寸ばかりなる、かゝる事はま出づべしや。さるべきすれうわらば知らず顔にてくれてやらむとしつるものを、北の方」そがいと口惜しき事、おのが思ふやうはあまねく人の知らぬさきに部屋にこめて守らせむ。女思ひたれば出であひなむず。さてほど過ぎて、ともかうもし給へ」と申し給へば「いとよかなり、只今追ひもていきてこの北の部屋に籠めてよ。物なくれ。しをりころしてよ」と老いほけて物の覚えぬまゝにのたまへば、北の方いと嬉しと思ひてきぬたからかに引き上げて落窪にいましてついで給ひて、「ふかひなきわざをなむし給ひたる。子どものおもてぶせにととおとどいみじう腹立ち

給うて、こなたになすませそ、疾く籠めおきたれ、我まもらむ、唯今追ひもてことなむのたまへる、いざ給へ」といふに、女あさましう侘しう悲しうてたゞ泣きになかれて、いかに聞き給ひたるにかあらむ。いみじとはおろかなり。あこぎ惑ひ出で、「いかなる事をかきこしめしたるぞ。更に去過ちせさせ給へることおはしませざるものを」と申せば「いで、この汐さきを手なさへそ。いかにしたりつる事にかあらむ。我にはかくしへだて給へどおとゝのくより聞きてのたまふぞ。すべて、いとあしきも知らぬぬしもたりて、わきばみおもふ君にまさらせむと思ひつる、こゝなわらは、家の内になありそ。いざ給へ。おとゝのたまふ事あり」とときぬの肩を引きたて、立ち給へばあこぎ泣く事いみじ。君はたさらに我にもわらず。物もちらしながら逃ぐるものからむるやうに袖を捕へ、さきにおしたて、坐す。紫をん色の綾のなよ、かなる、白き、又かの少將の脱ぎおきし綾のひとへきて、髪はこのごろもつくろひければいとらつくしげにて、丈に五寸ばかりあまりて、ゆらめき行くうしろで、いといみじくをかしげなり。阿漕見送りていかになし奉り給はむとするにかあらむと思ふに、目くる、心地して足すりしてなかる、心ちを思ひしづめて、うち散したる物どもとり去たむ。君はあれにもわらず、おとゝの前にひき出で来てばくりとついすゑられて「辛うじて。足づからいかせばいませうあこぎばかりけむ」とのたまへば「はや籠め給へ。我は見じ」との給へば又引きたて、籠め給ふ。女の心にもわらず物し給ひけるかな。恐しかりけるけしきになからは死にけむ。くる、どの廊二まある部屋の、酢、酒、いなどをたまさなくしたる部屋の唯燈ひ

とひら口のもとにうち敷きて、「我が心を心とするものはかゝるめ見るぞ」とていと荒らかに押し入れて手づからついでして、まやう強くさしていぬ。君、よろづに物の香臭くにはひたるが侘しければ、いとあさましきには涙も出でやみにたり。かく罪し給ふ事ぞ、その事も聞かずおぼつかなくあやし、あこぎをだに、いかに逢はむと思へど見えす。いと憂かりけりと身を思ひて、泣く泣くうつぶしふしたり。北の方落窪におはして、「いづら櫛のはこのわりのつるは阿漕といふさくじり居りて早う取り隠してけり」とのたまふもしく、「こゝにとりて置きはべる」といへばさすがには乞ひとらず。「こなたは我があけざらむ限はあくな」とてさしかためておはしぬ。まつと思ひていつしか典樂の助にかたらむと思ひて人まを待つ。阿漕さし出されていみじく悲しければ、などや出でやいなましと思へど、君のなりはて給はむやうだも見むとて、いかなるさまにておはすらむとゆかしければ三の君の御もとに偏にうち頼み奉る。「いとあさましく、知り侍らぬ事によりさいなみてまかでねとのたまへれば、官仕をさし侍りぬる事」と悲しくなむ。いかに猶今一度だに見奉り侍りなむ。猶うへによきさまに聞えさせ給ひて、この度のかうじゆるさせ給へ。ちひさくてこそ仕うまつりしが、今はわかれことになりにて侍ればこの落窪の君の御事をほに知り侍らず、いと侘しくなむ。あはれに召し仕ひつからまつり侍りぬる御手をまかで侍りなば」など、ことよく契りてみそかに頼み奉りなれば、三の君まことと思ひてあはれにて、母北の方に、「阿漕をさへ何しにさいなむ。つかひつけて侍ればなきはいとあしかりなむ」といまたへば、「怪しく相思

ひ奉りたるわらはなめり。盗人がましましきわらはにて、くやつがよくなまむとてしたるにこそ
 あめれ。落窪は世に心とはせむと思はじ。男心は見えざりつ」とのまなへば、三の君、「猶こた
 ひはゆるし給へ。らうたくわびおこせて侍りつ」と申し給へば、「ともかくも御心。さてつか
 ひよしとはしもなのたまひそ。しれがまし」と心ゆかずのたまへば、さすがに煩らはしくて、
 えふともよばで、「しばし念せよ。今よく申す」とのたまへり。阿漕、思へど思へどつきもせ
 ず。部屋に籠り給へる君、唯物もおほえ給はず。阿漕はた思ひよぬ事なく歎く。御臺をだに
 参らで籠め奉りつるを、このやつはよままるせらじ、さばかりらうたげなりつる御さまを引
 き出で奉りつるほどの氣色思ひ出づるにいみじうかなし。我が身たゞ今、人にひとしくても
 がな、むくいせむとおもふも胸はしる。君や夜ざりおはせむとすらむ、いかにおぼさむすら
 む、ふとしもなくなりたらむ人をいはむやうにゆゝしう悲しうて泣きいらるれば仕ふ人も
 安からず見る。女君はほどふるまゝに物くさき部屋に臥して、死なば少將に又物いはずなり
 なむ事、長くのみいひ契りしものをといと悲しく、夜べ物ひかへたりしのみ思ひ出でられて
 いとわはれ、されはいかなる罪つくりてかゝるめ見らむ、繼母のにくむは例の事に人も語
 るたぐひありて聞く、おとこの御心をさへかゝる事をいといみじう思ふ。かの少將聞きて、
 いとまばゆく、いかに女君のおほすらむ、とてもかくても我れ故にかゝる事を見給ふ事と限
 なく歎く。ひとまによりて、「かくなむとも聞えよ」とて。

「いつしかと参りたるをり、あさましとは世のつねに夢のやうなる事どもをうけたまは

るに物もおほえでなむ。いかなる心地し給ふらむとおもひやり聞ゆるも、おほすらむに
 もまざりてなむ。たいめんはいかであらむとする」

といと侘しくのたまへり。わこぎ、ながぎぬどもをぬきおきて袴ひき上げてしもひさしより
 めぐりていく。人も寝しづまりにければ、やゝとみそかに倚りてうち叩く。音もし給はず。
 「御殿ごもりにけるか。阿漕に侍る」といふ。ほのかに聞ゆれば君やをりよりて、「いかにさた
 るぞ」と泣く泣く、「いみじうこそわれ。いかなる事にてかくはし給ふにかあらむ」ともいひ
 やらせ給はで、泣き給へば、わこぎなく、「今朝よりこの部屋のわたりをかけづり侍れど
 えなむさむらはざりつるは、いみじくも侍りつるものかな。しかじかの事、いひ出でたるな
 り」と申せばいと泣きまざり給ふ。「少將のおはしたり。かくなむと聞かせ給ひて、たいな
 きに泣き給ふ。かうかうなむ侍りつる」と申せばいとわはれとおほして「更にものおほ
 えぬほどにて、え聞えず。對面は、

消えかへりあるにもあらぬわが身にて君を又見むことかたきかきと聞えよ。いみじう
 臭さもののものならばひ居たる、いみじうみだりがはしくくるしうてなむ。生きたればかゝ
 るめも見らなりけり」とて泣き給ふとは世の常なりけり。わこぎが心地も唯思ひやるべし。
 人や驚かむとみそかに歸りぬ。聞ゆれば少將いと悲しく思ひまざりていといたるなかるれ
 ばなほしの袖を顔におしあて、居給へれば、わこぎいみじと思ふ。しばしためらひて、「猶今
 一度聞えよ、

「わが君や、更にえ消えぬものになむ。

逢ふとの難くなりぬと聞くよひはあすを待つべき心ちこそせね。からは思ひ聞えじ」とのたまへば又さるる道に心にもあらず物の鳴りければ、北の方ふと驚きて、「この部屋の方に物の足音のするはなぞ」。阿漕なくなき「疾くまかりなむ」と申せば、女君、
「こゝにも、

みじかしと人の心をうたがひし我がこゝろこそまづは絶えけれ」とのたまふも聞きあへず。「しかじか驚きてのたまへれば、よろづもえうけたまはらずなりぬ」といへば、少將たゞ今もはひ入りて北の方をうちも殺さばやと思ふ。誰も歎きあかして叫けぬれば出で給ふとて、「ゐて出で奉らむをを告げよ。いかに苦しうおぼすらむ」と、おろかならず言ひおきて出で給ひぬ。帯刀。かくまはゆきことをおとゞも聞き給ふらむに、こゝにあらむ事もびんなければ御車のしりに乗りていぬ。わごぎ。いかで物まゐらむいかに御心地あしからむと思ひまはして、こはいひをさりげなくかまへて、いかでと思へどせむかたなければ、この語らふ小き子に、「かの君のかくておはしますをばいかおぼす。いとほしう」といへば、「いかは」といふ。「さらば人に氣色見せでこの御文奉るわざし給へ」といへば、「いぞとて取りてあやにくにかの部屋に往きて」これあけむ、これあけむ、いかでいかで」といへば北の方いみじくさいなみて、「何しにゆくべきぞ」とのたまへば、「くつをこれにおきて。とらむ」とのしりてうちこほめかしてのしければ、おとゞ、おとゞにてかなしうし給へば、「おどろ

わりかむとおもふにこそあらめ。はやくあけさせ給へ」とのたまへどいみじくのたまひて、「今しばしありて、わけむついでに」とのたまふに、おそばえて「あれおしこぼちてむ」と腹立ちのしれば、おとゞ手づからいましてあけて入れたまへれば、沓もとらで、「いづら」とてつかまりて、さしとらせて、「あやし。なかりける」とて出でぬれば、「まさにはさかしき事せむや」とてはしり打ち給ふ。かの文をはさまより火の光のあたりたるより見れば、これは阿漕がよろづの事書きて、はかなきさまにしておこせたるなりけり。されど物くはむともればえでおきつ。北の方、物ぬひにより命は殺さじと思ひて、典薬の助を日々に呼びて、「かうかうなむ、しかじかの事あれば籠めおきたるを、さる心思ひ給へ」と語らひ給へば、いともいとも嬉しくいみじと思ひて、口は耳もとまでおみまげて居たり。「夜さり、この落窪の居たる部屋へおはせ」など契りたのめ給ふに人來ればさりぬ。阿漕がもとに少將の御文あり。
「いかに。その部屋はあくやといみじくなむ。なほびんぎわらば告げられよ。さりぬべくばかならずかならず奉り給うて御かへりあらばなぐさむべきいとあはれなることを思ふに」
とあり。さうじ身におろかならずいみじき事を書き給ひて、

「いと心ぼそげなりし御せうそこを思ひいつるに、いとわりなくなむ。

命だにあらばとたいむぬふことを絶えぬといふぞいとこゝろうき。わが君、こゝろづよくおぼしなぐさめよ。もろともになにこめられなむ」

と書き給へり。帯刀も。

「このことを思ふに心地もいとわしくてなむ、臥してはべる。いかにおもはずらむとかたはらいたくいとほしきに、法師にもなりぬべくなむ」と書きておこせたり。御かへし、

「かしこまりてなむ。いかでか御らんせさせ侍らむ。戸はいまだあき侍らず。さらにいかたくなむ。いかに侍らむ。御文もいかでか御覽せさせ侍らむとすらむ。御かへりはこれよりも聞えさせ侍らむ」

と聞ゆ。帯刀がもとにも同じさまにいみじき事をなむいへりける。二の巻にぞ、ことごとくあへかめるとぞある。

阿漕、いかでこの御文奉らむと握り持ちて思ひありくに、さらに部屋の戸あかず。侘しと思ふ。少將と帯刀とはたゞ偷々出でむとたばかりをし給ふ。われ故にかゝる目をも見るぞと思ふにいとわはれにて、いかでこれ偷々出で、後に北の方に心惑はずばかり妬き目見せむと思ふ。ほとほとしふねく、心ふかくなむおはしける。かのかたらひせし少納言、かたの、少將の文もてきたるにかくこもりたれば、あさましう口をしう哀にて阿漕と、「いかに覺すらむ。などかゝる世ならむ」とうちかたらひて、忍びて泣く。日の暮るゝまゝに、いかで奉らむと思ふ。少將の笛の袋縫はするに、取りふれむ人のなきまゝに、とみに手もふれぬほどに、持て煩ひて、北の方、部屋の遣戸をあけて入りおはして、「これ只今縫ひ給へ」といへば、「心地なむ

わしき」とて臥したれば、「これ縫ひ給はずばしもべやに籠め奉らむ。かやうの事を申さむとてこゝにはおき奉りつるにこそわれ」といへばまことにさもしてむと侘しくて、おれにもあらずくるしけれど起きあがりて縫ふ。阿漕、部屋の戸あきたりと見て、例の三郎君呼びて、「いとうれしくのたまひしかばなむ、これ北の方の見給はざらむまに奉り給へ。ゆめゆめ気色見え奉り給ふな」といへば、「よかなり」とて取りつ。いきて、かたはらに居て、笛とりて見など遊び居て、きぬの下にさし入れつ。いかで見むと思ふに、袋縫ひはて、見せにもいきたるほどに辛うじて見て、あはれと思ふ事かぎりなし。硯筆もなかりければ、針いささしく、かく書きたり。

「人しれず思ふこゝろもいかでさはつゆとはかなく消えぬべきかなと思ひ給ふこそ」とてもたり。北の方いまして「ありつる袋はいとよく縫ひたり。やりどわけたりとておとさいなむ」とて引きたて、まやうさゝむとすれば、「いかで、あなたに侍りし箱とりて阿漕に告げ侍らむ」といへば、たてさして「あの櫛の箱待むとあめり」との給へば、感ひもて来て、さし入るゝ手に入れたれば引き隠して立ちぬ。「辛うじて、御笛の袋縫はせ奉り給ふとてあけ給へるまになむ」といふ。少將、いと哀と思へること限なし。暮れぬれば、興樂の助、いつしかと心げさうしありきて、阿漕が居たる所によりて、いと心づきなげに笑みて、「阿漕は今翁を思ひ給はむすらむな」といへば、阿漕いとむくつけく思ひて、「なかかさあるべき」といへば、「落窪の君をおのれに賜へればこの御方の人にはあらずや」といふに、驚き感ひて

ゆゑしくおもふに、涙もつゝみぬへき出づれどつれなくもてなさで「男君おはせず徒然なりつるに、たのもしの御事や。さてもおとどのゆるし聞え給ふか。北の方のたまふか」といへば「おとどの君もめぐみ給ふ。わが北の方はまして」といとうれしとおもへり。阿漕、よろづの事よりもいかさまにせむ。いかでかくとだに告げ奉らむとおもふに、しづむるなく「さていつか」といへば「今宵ぞかし」といふ。「今日は御忌日なるものを何かうけがひあらむ」といへば「人もたせ給ふるなれば、わやふし。疾くさむ」といひて立ちぬ。阿漕、侘しき事かぎりなし。北の方殿の御臺参るほどに、這ひよりてうち叩く。「たぞ」といへば、「かうかうの事侍り。さる用意せさせて、御忌日となむ申しつる。いみじくこそあれ。いかせさせ給はむ」ともいひやらで立ちぬ。女君、聞くにむねつづれて、さらしにせむかたなし。さきさき思ひつる事、物にもわらずおほえて侘しきに、逃げかくるべきかたはなし。いかで唯今死なむとおもひ入るに、胸いたければおさへてうつぶしふして泣く事いみじ。火などともしてければおとゞ夕まどひし給うて臥し給ひぬ。北の方はかの典薬の事により起きまして、部屋の戸引きあけて見たまふに、うつぶしふしていみじく泣く。「いといたしや。などかくはのたまふぞ」といへば、「胸のいたく侍れば」と息の下にいふ。「あないとほし。物の積みかとも、典薬のぬしくすしなり、かいさぐらせ給へ」といふに、たぐひなくにくし。「何か。風にこそ侍らめ。くすし入るべき心地しはべらず」といへば「さりと胸はいとおそろしきものを」といふ程に、典薬さわれば、「こちいませ」と呼び給へば、ふとよりたり。「こゝに胸やみ給ふめり。物

の積みかとも、かいさぐり薬などもまゐらせ給へ」とて、やがて預けて立ちぬれば、「くすしなり。御やまひもふとやめ奉りて、今宵よりはいからに頼み給へ」とてむねかいさぐりて手ふるれば、女おどろおどろしう泣きまどへと言ひ制すべき人もなし。こしらへかねて、せめて侘しきまゝに思ひてなく、「いとたのもしき事なれど、唯今更に物なむ覚えぬ」といらふれば「さや、などておほすらむ。今は御かはりに翁こそやまめ」とてかへてをる、北の方は典薬ありと思ひ頼みて、例のやうに錠などもさしかためで寝にけり。阿漕、典薬や入りぬらむと惑ひ来て見るに遣戸細目にあけたり。胸つぶるゝものから、嬉しくて引きあけて入りたれば、典薬かゝまりをり。入りにけりと人心ちもなくて、「今日は御忌日と申しつる物を心憂くも入らせ給ひにけるかな」といへば、「何か。ちかぢかしくあらばこそあらめ、御胸まじなへと、うへの預け奉り給ひつるなり」とてまたさうぞくも解かで居り。君はいといいたう惱み給ふにそへて泣き給ふこと限なし。阿漕とりわきて、などしもかく物をいみじく覺して、かゝるはいかなるべきにかと思ひて心細くかなし。「御焼石あてさせ給はむや」と聞ゆれば、「よかなり」とのたまへば、阿漕、典薬に、「ぬしをこそ今は頼み聞えめ。御焼石もとめて奉り給へ。皆人も寝静まりて、阿漕がいはむによもとらせじ。これにてこそ志のありなし見えはじめ給はめ」といへば、典薬うち笑ひて、「さなり。残のよはひ少くとも、一すぢに頼み給は仕らまつらむ。いは山をも思へばまして焼石はいとやすし。思ひにさし焼きてむ」といへば「同じくば疾く」とせめられていにける。さは入りたるやうなれどいとやすし。志なさ

けを見えむとて石求めむとて立ちぬ。阿漕、「この年ごろいみじく侍りつる事の中に侘しくもいみじくもこそ侍りけれ。いかせさせ給はむ。何の罪にてかゝる目を見給ふらむ。さても何の身にならむとてかゝるわざをし給ふらむ」といへば、君「更になむ物も覚えぬ。今まで死なぬ事の心憂き。心地はいとあし。この翁の近づき来るになむいと侘しき。その遣戸かけ籠めて、な入れ」とのたまへば「さては腹だちなむ。猶こめさせおはしませ。頼む方のあらばこそ今宵はたて籠めても明日はその人はいはむとも思ひ侍らめ。少將の君歎き感ひ給へども、いかでかは。只今あたりになにおはしよらむ事かたくなむ。御心のうちにも佛神を念せさせ給へ」といへば、君げに頼むかたなく、はらからとも相思ひたる事なく、はしたなげにのみあれば、その人といふべき事も覺えず。いみじう悲しくて、唯頼む事とは涙と阿漕とのみぞ心になひたるものにて、「更にこゝに今宵はあれ」とて誰も誰もなく程に、翁焼石つゝみもて來たるを、わびて手づから取る心ち、恐しう侘しくおぼゆ。翁、さうぞくときてかさすれば、女、「あが君かくなし給ひそ。いみじく痛きほどは、おきておさへたるなむ少しをさまる心ちする。後をおぼさば今宵はたゞに臥し給へれ」といふ。いとわびしくて、いたうやむ。阿漕、「今宵ばかりにてこそあれ。御忌日なればなほたゞ臥し給へれ」といへば、さもあゝりて泣き居たり。阿漕も、いとにくけれど、嬉しき翁の徳に御あたりに今宵参りたると思ふ。ほどなく寐入りてくづち臥せり。女君、少將の君のけはひ思ひ合せられて、いとわいな

くにくし。阿漕、いかにして出でなむのたばかりをす。翁のうち驚く時はいといたく苦しがりやみ給へば、「あないとほし。翁の侍ふ夜しもかうなやみ給ふがわびしさ」とては又寝入りぬ。明けぬれば、いとうれしと誰も誰も思ふ。翁をつきおどろかして、「いとあかくなりぬ。出で給ひぬ。しばしは人にしらせじ。長く思ひ給はむ、のたまはむ事にしたがひ給へ」といへば、「さかし、我もさ思ふ」とて、ねぶたかりければ目くそ閉ぢあひたる拂ひあけて、腰うちかゝりて出でいぬ。阿漕遣戸ひきたて、「こゝにおはしけりと見え奉らじと思ひて、急ぎてざうしにいきたれば帯刀が文あり。見れば、

「辛うじて参りたりしかど、みかどさして更にあけざりしかばわびしくてなむ。歸りまうで來にしなり。おろかにぞおぼすらむ。少將の君のおぼしたる氣色を見侍るに、心のいとまくなむ。これは御文なり。いかでよさりだに参らむ」

といへり。御文奉らむ、よきひまなりといそぎいきて見れば、北の方部屋さし給ふ。あなくちをしと思ひて、かへる道に典薬ゆきあひて、文くれたるを取りて、はしりかへりて北の方に、「こゝに典薬のぬしの文あり。いかで奉らむ」といへば、北の方うちゑみて、「こゝち問ひ給へるがいとよし。まめやかにあひ思ひたるぞよき」とて、さしかためし戸口をひきあけたれば、いとをかして、少將の君の文とりそへてさし入れたり。少將の君の文見給へば、

「いかゞ、日のかさなるまゝにいみじくなむ。君がうへ思ひやりつゝなげくとはぬる、袖こそまづは知りけれ。いかゞすべき世にか

あらむ」

とあり。女いとわはれと思ふ事かぎりなし。

「おぼしやるだにさなむある。

なげくとてひまなく落つる涙川うき身ながらもあるぞかなしき」と書きて、翁の文見む事のゆゑしうて「阿漕返り事せよ」と書きつけてさし出したれば、ふと取りて立ちぬ。阿漕、翁の文見れば、

「いともいともいとはしく、夜一夜なやませ給ひける事をなむ、翁の物のあしきこゝちし侍る。あが君あが君、夜さりだにうれしきめ見せ給へ。御あたりだに近くさむらば、命のびて心ちもわくなり侍るべし。あが君あが君。

老木ぞと人は見るともいかにでなほ花ささいで、さみに見なれむ。なほなほな、にくみ給ひそ」

といへり。阿漕、いとあへなしと思ふ思ふ書く。

「いとなやましうせさせ給ひて御みづからは得聞えたまはず。

枯れはて、今はかぎりの老木にはいつかうれしき花は咲くべき」とかきて、腹立ちやせむとおそろしけれど、おぼゆるまゝにとらせたれば、翁うちゑみて取りつ。たちはぎのかへりごとかく、

「夜べはこゝにも、いふ方なき事を聞えてだになぐさめばやと思ひ聞えしに、かひあくて

なむ。御文からうじてなむ。いといみじき事どもいできて、たいめになむ」

とてやりつ。北の方、典薬に預けつと思ひて、ありしやうにも遣戸さしかためさせねばあこぎうれしと思ふ。暮れゆくまゝに、いかにせむと思ひわぶ。内さしにさしこもらむと思ひて、よろづにあくまじきやうにかまふ。翁のこぎに、「いかにぞ御心地は」といへば、「いみじくなやみ給ふ」といふるに、いかにおはせむすらむと我がもの顔に打歎くを、あいきやうなしと見る。「あすの臨時の祭、三の君に見せ奉らむ。くらうどの少將のわたり給ふを」と北の方は念じをるをあこぎ聞きて、いと嬉しきひまあるべかなりと胸打ちつぶれて思ふ。今宵だに遁れ給ひなばと思ひて、遣戸のしりさすすべき物もとめてわきにはさみてありく。「おほとなぶらまぬれ」などいふまぎれにはひよりて、遣戸の方の樋にそへて、えさぐらすまじくさしてさりぬ。内なる君はいかにせむと思ひて大きな杉唐櫃を後をかきて遣戸くぢに置きてとからうしておさへ、わあゝき居て、これわけさせ給ふなと願をたつ。北の方、かぎを典薬にとらせて「人の寐しづまりたる時に入り給へ」とてね給ひぬ。皆人々まづまりぬるをりに、典薬かぎを取りて来てさしたる戸あく。いかならむと胸つぶる。じやうありて遣戸あくに、いとかたければ立ち居ひろ、くほどにあこぎ聞きて少し遠がくれて見立てるに、まやう子もさぐれどさしたるほどをさぐりあてず。「あやしあやし。内にさしたるか。翁をかく苦め給ふにこそありけれ。人も皆ゆるし給へる御身なればえのがれ給はじものを」といへど誰かはいらへむ。打ちたゝき押し引けど、うちとにつめてければゆるぎだにせず。今や今やと夜更く

るまで板のうへに居て、冬の夜なれば足もすくむ心ちす。そのころ腹そこなひたるうへにきぬいとらすし。板の冷えのぼりて腹ではどほとなれば、翁、「あなさがな、ひえこそ過ぎにけれ」といふに、しひてこほめきて、ひちひちとなる。こはいかになるにかあらむとらたがはし。かいさぐりて出でやするとて尻をかへて惑ひ出づる心ちに錠をばついでして、かぎをば取りていぬ。阿漕かきおかずなりぬるよとあいなくにくく、思へど、あかずなりぬるをかぎりなく嬉しく思ふ。かくて遣戸のもとによりて、「ひりかけしていぬれば、よもまう來じ。おほとのごもりぬ。曹司に帶刀まうで來れるを、君の御返りごとみ聞え給ふらむ」といひかけてしもにおりぬ。たちはき、「など今まではおり給はぬぞ。世の中いかはあるともまだ出し奉らずや。いみじくこそおぼつかなけれ。きみのおぼしなげくこといみじくなむ。夜などみそかに偷み出で奉りぬべしや。その事あんないしてことのためはせつる」といへば、「更にいとこそいみじき。日に一度なむ御臺まゐりにあけ給ふ。かくてかまふるやうは、北の方の御をぢにて、いみじき翁のあるになむあはせ奉らむとて今宵も部屋に入れとてかぎをとらせ給へれど、うちとにまかじか固めれば立ち居ひるぎてあけつるに、冷えてかうかうしていぬ。君この事を聞き給ひしより御胸をなむいみじくやみ給ひし」と泣きつゝいふ。たちはきいみじき事にあはせて、ひりかけの程をえ念せて笑ふ。「いつしか偷み出で奉りて、この北の方のたふせむとなむ君はのたまふ」といへば、「あすの祭見に出で給ひぬべかめり。そのひまにおはしませ」といへば、「帶刀いとうれしきひまにもあるかな。いつしか夜も明けな

む」と心もとなくいひあかす。翁は袴にいと多くしかけて、けさうの心ちも忘れて先とかくかれ洗ひしほどにうつぶしふしにけり。明けぬれば、たちはきいそぎ参りぬ。少將「いかいひつる」とのたまへば「しかじかなむ阿漕がいひし」と申すに、典藥の助の事を、あさきし、妬し、げにいかに怪しからむと思ひやるもいとあはれなり。「こゝには暫し住まじ。二條の殿に住まむ。いきて格子上げさせよ」とて帶刀をつかはしつ。胸打ち騒ぎて嬉しき事かぎりなし。あこぎ、人知れず心地さわぎて、せむやうをかまへありく。午の時ばかりに車二つ、三四の君「我や」などの、しりて出で給ふさわぎにあはせ、北の方典藥が許にかぎこひにやりて危く我なきほどに人もわくるとて、かぎもちて乗り給ひぬる事をいみじくにくしと阿漕思ふ。おとゞも聲出したて、ゆかしがりて出で給ひぬ。皆の、しりて、さゝとして出で給ふすぢはち阿漕つげにはしらせやりたれば、少將こゝちたがひて、例の乗り給ふ車にはあらぬに栝葉のしたすだれかけてをのことも多くておはしぬ。たちはき馬にてさきだちておこせ給へり。中納言殿には聲の御供、おとゞ北の方の御供、人々みかたにをのこともわかち参りて人も奇し。みかどにしはし立ちて、帶刀かくれより入りて、「御くるまあり。いづこにかよせむ」といへば、「たゞこの北おもてに寄せよ」といふ。牽き入れてよするを、からうじて、この男ひとりたふせむ」といひて、たゞよせに寄す。ごたちのとまりたるもみなしもにおりてなきほどなり。阿漕「はやうおり給へ」といへば少將おりはしり給ふ。部屋にはじやうさしたり。これ

にぞ籠りけると見るに胸つぶれていみじ。這ひ寄りて捻り見給ふに更に動かねば帯刀を喚び入れ給うて、うちたてを二人してうち放ちて遣戸を引き放ちつれば帯刀は出でぬ。いともらうたげにて居るを、おはれにて、かき抱きて車に乗せ給ひぬ。「阿漕も乗れ」とのたまふに、かの典薬がちかぢかしくやありけむと北の方思ひ給はむ、妬ういみじうて、かのおこせたりし文二たびながらおしまきて、ふと見つくべくおきて、みぐしの箱ひきさげて乗りねれば、をかしげにて飛ぶやうにして出で給ひぬ。誰も誰もいとうれし。門だにひき出でたれば、このことも多くて二條殿におはしぬ。人もなければ心やすしとて、おろし奉り給ひて臥し給ひぬ。日ごろの事どもかたみに聞え給ひて泣きみ笑ひみし給ふが、ひりかけの事をぞいみじく笑ひ給うける。「ふようなりける御けさう人かな。北の方いかにあさましと思ひ給はむ」とうちとけていひ臥し給へり。帯刀、阿漕と臥して、今は思ふ事なきよしをいふ。暮れぬれば御臺まゐりなどして帯刀、あるじだちてまありく。かの殿には物見て歸り給ひて、御車よりおり給ふまゝに見給へば、部屋の内うちたふして、うちたてもうち散らしければ誰も誰も驚き惑ひて、見れば部屋には人もなし。いとあさましく、「こはいかにまづる事ぞ」とさわざみちてのゝしる。「この家にはむげに人もなかりつるか。かくぬる所まで入りたちて、うちわり引き放ちつらむをとがめざりつらむは」と腹立ちて「誰かとまりつらむ」と尋ねのゝしる。北の方、いはむかたなき心地して、ねたくいみじき事かぎりなし。阿漕を尋ねるとむれどいづちにかあらむ。落窪をわけて見給へば、ありと見し几帳屏風ひとつもなし。北の方、「阿漕と

いふぬすびとのかく人もなきをりを見つけてしたるなり。やがておひうたむと思ひしものを、つかひよしとのたまひて、かく遂にまけぬる事と心ぎも、なく相思ひ奉らざりしものを強ひてつかひ給ひて」と三の君をいみじくのたまふ。おとと、とまりたりけるをのこ一人たづね出で、問ひ給へば、「更に知り侍らず。唯いと清けなる網代車のしたすだれかけたりし出でさせ給ひしすなはち入りまうできて、ふと出でまかりにし」と申す。「唯それにこそあなれ。女はさは打ちわりて出でし。をのこのまたるなめり。何ばかりの者なれば、かくわが家をわかひるに入り立ちて、かくして出でぬらむ」とねたがり惑ひ給へどかひもなし。北の方、この置きたる文を見て、まだ寝ざりけりと思ふに、ねたさまさりて典薬をよびす給ひて、「かうかうして逃げにけり。ぬしに預けしかひもなくかくにがし給へる、ちかぢかしくは物し給はざりけるか」とのたまひて、「おきたるそこの文どもを見れば」といへば典薬がいらへ、「いとわりなき仰なりや。その胸やみ給ひし夜はいみじく惑ひて御あたりにも寄せ給はず、阿漕もつとそひて、御忌日なり、今宵過してとさうじみものたまひていみじく惑ひ給ひしかば、やをり、たゞよりふしにけり。その後の夜せめそはむと思ひて、まうで来てあくるに、内ざしにさしてさらにあかぬを板の上に夜中まで立ちぬ。あけ侍りしほどに、風ひきて腹こぼしとまうし、を一二度は聞き過して、猶もしふねくあけむとし侍りしほどに、みだりがはしき事の出でまうで來にしかば、物もおぼえでまづまかり出で、しつゝ、みし物を洗ひしほどに夜は明けにけり。翁の怠りならず」と述べ申し居たるに腹だちながら笑はれぬ。ましてほの

聞くわかき人は死にかへり笑ふ。「いでや、よしよし、立ち給ひぬ。いとふかひなくねたし。ことびとにこそわづくべかりけれ」とのたまふに典薬腹立ちて「わりなくも得のたまふ。心にはいかでいかでと思へど老のつたなかりけることは、あやまちやすくて、ふとひりかけらるゝをいかせむ。翁なればこそわけむわけむとはせしか」と腹立ち言ひて立ちていけば、いと人々笑ひ死ぬべし。わらはなる子のいふやう。「すべてうへのあしくし給へるぞ。何しに部屋にこめ給ひてかくをこなるものにはあはせむとし給ひしぞ。いかに佳しくおぼしけむ。御むすめども多く、まろらもゆくさき侍れば、いきあひ、相聞えふるゝ事もこそあれ。いみじき事なりや」とおよすげいへば、北の方「すやつはいづち行くともよくありなむや。いきあふとも、我等が子どもいかせむ」といらへ給ふ。をのこ三人ぞもたまへりける。太郎は越前の守にて國に、二郎は法師、三郎はこのわらはなりける。かくいひさわげどかひなければ皆臥しぬ。二條殿にはおほとなぶらまゐりて少將のきみの臥し給うて、阿漕に「日ごろの事よくかたれ。こゝには更にのたまはず」とのたまへば、阿漕、北の方の心をありのまゝにいへば、君、あさましかりける事かなとおぼし臥し給へり。「人すくなにていとあしかめり。阿漕、人もとめよ。殿なる人々にも聞えむと思へどもゆかげしなき。阿漕、おとなになりぬ。いところおよすげためり」といひいひ臥し給へり。かくうれしくのたまはせて、明けぬれば、いとどかなる心ちして巳午の時まで臥し、晝つ方、殿に参り給ふとて帶刀に、「ちかくぬたれ。唯今こむ」とて出で給ひぬ。阿漕、をばの許へ文やる。

「いそぐ事侍りてなむきのふけふ聞えざりつる。けふあすのほどに清げならむわらは、おとなもとめ出で給へ。そこにもよきわらはわらば一人二人かし給へ。あるやうはたいめに聞えむ。あからさまにおはせよ」

といひやりつ。少將の君、殿におはしたれば、かの中納言殿の四の君の事いふ人出で来て「もうけたまはる。かの事一日ものたまへりき。年かへらぬさきにきてむと思ふやうあり。御文聞えてと、いみじくせめ侍り」といへば、殿の北の方「さかさまにもいふなるかな。強ひてかういふ事を聞きてよかし。人の爲にはしたなきやうなり。今まで一人ある、見ぐるし」とのたまへば、少將「さ思ははやうとりてよかし。文は今とてやらむ。今やうはことに文通はしせでもしつなり」とてゑみて立ち給ひぬ。我が御方におはして、常につかひ給ふ御調度ども厨子などかしこにやり給ふ。御文、

「今の間いかに。後めたらこそ。内に参りて只今かへり出で侍りなむ。

唐ごろも着て見むことのうれしさをつゝまば袖をほころびぬべき。なかなかつゝまじとなむ、けふのこゝちは」

とあり。御かへり、

「愛き事をなげきしほどにからごろもそではくちにき何につゝまむ」と聞え給へるをわはれとおぼす。帶刀、心しらひ仕らまつる事ねんごろなり。和泉の守のかへりごと、

「おぼつかなき、にこれよりきのふ聞えたりしかば、はやうささましわざして逃げ給ひに

きとて使をもほどほどうたれぬべかりけるを、からうじてなむ逃げて來たりしかば、いかならむと思ひ給へなげきつるに、うれしくたひらかに物し給へる事、人は今案内して聞えむ。こゝにさむらふはかばかしきものなし。この守のいと子にて、こゝにおはするこそさやうにものしつべけれ」

といへり。暮るれば君おはしたり。「かの四の君の事こそしかじかいひつれ。われとひて人もとめておはせむ」とのたまへば、女君、「いとけしからず、いなとおぼさばおいらかにこそし給はめ。ほいなくいかにいみじとおぼさむ」とのたまふ。少將、「かの北の方にいかでねたき目見せむと思へばなり」とのたまへば、女、「これはやわすれ給ひぬ。かの君やにくかりし」とのたまへば、少將、「いと心弱くおはしけり。人の憎きふしおぼしおくまじかりけり。いと心安し」とのたまひて臥し給ひぬ。かの中納言殿には、「よかなりとなむのたまふ」といひやりたれば、喜びて、まうけしのしるにつけては、落窪といふものゝあらばうち預けてぬはせまし、いかによからまし、佛、これいけらば來るやうにし給へ、くらうどの少將の君も御衣どもわろしとて出づと入るとむつがりて着給はずなどある時は住しうて、物せむ人もがなとてこゝかしこ手を分ちてもとめ給ふ。よかなりとのたまふ時に取りてむ、思ひもぞかはるとて、おとゞ居たちいそぎ給ふ。しはすのついたち五日とさだめたるほどにしもつきのつこもりばかりより急ぎ給ふ。御聲の少將、「誰を取り給ふぞ」と問ひければ、「左大將殿の左近の少將殿とかのたまへる」「いとをかしき君ぞかし。うち語らひて出入せむにいとよき事か

な」とゆるしければ、北の方、はえありてうれしと思ふ。かの少將は北の方のいと妬くにく、て、いかでこれに住しと思はせむと思ひしみにければ心の中に思ひたばかるやうありて、よかなりけりといふなりけり。かくて二條殿には十日ばかりになりぬれば、今参りども十餘人ばかり参りていと今めかしうをかし。和泉の守のいとこなる、かうかうと聞きて参らせて、むしくひ御兵庫といふ。阿漕はおとなになりて衛門といふ。ちひさくをかしげなるわかうどにて、思ふ事なげにてまありく。男も女もたぐひ多くおぼしたる、ことわりぞかし。少將の君の母北の方、「二條殿に人すゑたりと聞くはまことか。さらば中納言殿にはなどよかなりとはのたまふぞ」、少將「御せうそこ聞えてと思ひ給へしかど人も住み給はぬ中に唯しばしと思ひ給へてなむ。問はせ給へ。中納言は中にもさいふと聞き侍りしかば、をのこは一人にてやは侍る。うち語らひて侍れかし」と笑ひ給へば、北の方、「いであなにく。人あまたもたるは歎き負ふなる、身も苦げなり。な思し給ひそ。そのすゑたらむにおぼしつかばさてやみ給ひぬ。今とさむらひ聞えむ」とて、その後はをかしき物奉り給うて聞えかはし給ふ。「この人よげに物し給ふめり。御文かき給ふ手つきいとをかしかんめり。誰がむすめぞ。これにて定まり給ひぬ。をんなもたれば人のおぼさむ事もいと苦しうさむおぼゆる」と少將に申し給へば、御心なむも忘れ侍らじと申せ給へば、「いかでか。けしからず。更に思ひ聞ゆまじき御心なめり」と笑ひ給ふ。御心なむいとよく、かたちも美しくしうおはしましける。かくて御心なむも、さばは知り給へりや」といとはしく思したれど化かくなむ」と申せば「よかなり。

参らむ」といらへ給うて、心のうちにはいとをかとおぼしけるやう、北の方の御をぢにて、世の中に僻みしれたるものに思はれて治部卿なる、交らふ事もなき人の太郎、兵部のせうといふ人ありけり。少將おはして、「せうはこゝにか」とのたまへば、「曹司の方に侍らむ。人笑ふとてえ出立も侍らず、君達御かへりみありてこれ交らひつけさせ給へ。おのれも知り侍りにき。笑ひたてられたる程に過ぎぬれば宮仕へしつきぬるものなり」と申せば、少將（若狭守）いかい、ようなしはべらむ」とてさうしにおはして見たまへば、まだふしたまへり。しれがましうをかして「や、起き給へ。聞ゆべき事ありてなむ詣できたる」との給へば、足手おはせいとよくのびのびして辛うじて起き出で手洗ひ居たり。少將、「などかしこにも、さらにおはせぬ」とのたまへば、せうのいらへ、「人のわらへば耻しうて」といへば、「うとき所ならばこそはづかしからめ」とて、「君はめはなとて今までも給へらぬぞ。やもめぶしまてはいと苦しきものを」とのたまへば、少輔のいらへおはする人のなきうちに、ひとり臥して侍るも更に苦しくも侍らず」といへば、少將、「さは苦しからずともめまうけでやみ給ひなむや」。せうおはする人や侍るとて待ち侍るなり。少將、「まろおはせ奉らむ。いとよき人あり」との給へば、さすがにゑみたる顔色は雪の白さにて、首いと長うて、顔つき駒のやうにて、鼻のいらゝぎたる事かぎりなし。ひゝと嘶きて引き離れていぬべき顔したり。むかひ居たらむ人はげに笑はではえあるまじ。いと嬉しき事に侍るなり。誰がむすめぞ」といへば、「源中納言の四の君なり。まるにおはせむといへども、え思ひすつまじき人の侍れば君にゆづり聞えむと思ひ

て、あさてとなむさだめたる。借用意し給へ」。少輔のいらへ「はいなしとて笑ひもこそすれ」といへば、少將、「笑ふがあるまじき事と思ひけるこそおはれにをかしけれど、つれなくてよむ笑はじ。のたまはむやうは、おのれ忍びてこの秋より通ふを少將とり給ふと聞きて、おのれにはなれぬ人なればかうかうなり、いかでえ給ふぞと恨みしかば、いとことわりなり、さらば不用にこそは、かの親だち知り給はねば、まるならぬ人もとり給ひてむもをこなり、こたみわらはれ給ひぬと言ひしかばなむといらへ給へ。さらばなでふ事かいはむ。よも笑はじ。さておはし通ひあは、人もおぼえありて思ひあむ」といへば、「さなゝり」とうなづき居たり。「さらばあさて、夜うちふかしておはせ」と言ひおきて出で給ひぬ。女いかに思はむと思へど、まさりて憎しとおぼしおきてければなりけり。二條殿におはしたれば、雪の降るを見出して、火桶におしかゝりて灰まさぐり居給へる、いとをかしければ對ひ居給へるに、
「はかなくて消えなましかばと思ふとも」と書くをおはれに見給ふ。まことにおぼして、男君、
「埋火のいさきて嬉しと思ふには我がふところに抱きてぞぬる」とて掻き抱きて臥し給ひぬ。女君「いとをかしき事なり」とて笑ひ給ふ。中納言殿にはその日になりてまつらひ給ふ事限なし。今日といへば少將兵部（若狭守）のもとへ「かの聞えし事は今宵なり。いぬの時ばかりに坐せよ」とのたまへば、「こゝにもまか思ひ侍る」といへり。てゝにかうかうといへば、ひ

ん傳み忘れ人はびんなからむとも思はで、「人にはめられ給ふ事はよもあしからじ。はやうい
 け」とてさう束の事急ぎ出し立てたりければうちさうぞきていきけり。人々さうぞきぞして
 待つに、「おはしたり」といへば入れ奉りつ。その夜は知れも見えで、火のほのぐらきに、やう
 だいはそやかにわてなりければ、ごだちは人にはめられ給ふ君ぞかしと思ふに、「うちつけ
 ぢはそやかに、なまめきても入り給ひぬるかな」と言ひあへるを聞き給ひて、北の方多みま
 けて、「かしこくも取りつるかな。我はさいはひ有りかし。思ふやうなる聲どもをとるかな。
 唯今この君、大臣がね」とて吹きちらし給へば、人々もげにと聞ゆ。女、かゝるしれものとも
 しらで臥し給ひにけり。明けぬれば出でぬ。少將、いかならむと思ひやられてをかしければ、
 女君に、「中納言殿にはよべ。聲取ま給ひにけり。」「誰ぞ」とのたまへば、「まろがをぢにて治部
 卿なる人の子、兵部の少輔、かたちいとよく、鼻いとをかしげなるを聲どり給へる」とのたま
 へば、女君、「ことに人の^{たづね}はめぬ所よ」とて笑ひ給へば、「なかに聲すぐれてをかしき所を
 聞ゆるぞかし。今見給ひてむ」とてさむらひに出で給ひて兵部の少輔のがり文やり給ふ。
 「いかにぞ文やり給ふや。まだしくばかう書きてやり給へ。いとをかしき事に」
 とて書きてやり給ふ。

たまの歌

と書きてやり給へれば、せう、文やらむとて歌をによび居るほどに、かくて賜へればよき事
 と思ひて、いそぎ書きてやりつ。少將のかへりごとには、

「夜べはことなりにき。笑はずなりにしかばうれしくなむ。委しくは對面に。文はまだし
 く侍りつるほどに、よろこびながらこれをなむつかはしつる」

といへば、少將、いとほしく女に耻を見するぞなど思へども、とかくいかでこれがむくいせ
 むと思ひしほどにとげてのちに、引きかへてかへり見むとおぼすこと深くなりにけり。女君
 は、なほおもひ侘びたるけしき、いとほしうて聞かせ給はず。心ひとつにをかしければ、帶刀
 にかたりてなむわらひ給うければ、帶刀、「いと嬉しうせさせ給へり」と喜ぶ。かの殿には御
 文待つほどに、もて來たればいつしか取り入れて奉る。見給ふに、かゝればいみじう耻しう
 て、えうちも起き給はず、すくみたるやうにて居給へり。北の方、「御手はいかゝある」とて見
 給ふに、死ぬる心ちする事、かの落窪といふ名さかれて思ひしよりもまさる心ちすべし。北
 の方うち見て、「あやしう、ささぎの聲どりの文見る中に、かゝればいかならむと胸つぶれ
 ぬ。おとゞおしはなち引きよせて見給へど、目うとくてえ見給はで、「色ごのみの、いとす
 く書きたまひけるかな。これ讀み給へ」といへば、ふと取りて藏人の少將のつとめての文の
 おぼえけるをうち讀みて、「たへぬは人のとなむ書き給へる」といへば、おとゞうち笑みて、
 「すきものなればいひ知りためり。はや御かへりごとをかしくし給へ」とて立ち給ふを聞く
 に、四の君、かたはらいたく侘しくおぼえてより臥しぬ。北の方三の君と、「いかにのたまへ

るならむ」と歎けば、女藏の御かた「いみじく思ふともかういはむやは。なほおしなべて今日は戀しといはむことのふるめきたれば、やうかへてと思ひ給へるにや。心得ずあやしくもあかな」とのたまふを、北の方「さなり。色どのみは人のせぬやうをせむと思ふなるべし」といひて、「はや返り事玄給へ」と申し給へど、親はらから居たちて、かくあやしがり歎き給ふを聞くに更に起きあがるべき心ちもあらで臥し給へれば、「我聞えむ」とて北の方のかき給ふ。

「老の世にこひもしあらぬ人はさぞ今日のけさをも思ひわかれじ。口惜しうなむ、女は思ひ聞ゆる」

とて使にものかづけて遣りつ。四の君は起きあがらで臥し暮しつ。暮れぬればいとくおはしぬ。北の方「さればよ、物しくおぼさましかばおそくぞおはせまし。げにかうやうかへてのたまへるなりけり」とて、よろこびて入れ奉り給ひつ。四の君耻しけれど、いかゞはせむとて出で給ひにけり。物うち言ひたるけはひはればしくおくれたれば、女君藏人の少將などに聞きあはするにあやしげなれば、我こそ戀ひざらめとはいはまほしけれとおぼす。夜ふかく出でぬ。三日のまうけ、いといかめしうし給ふ。さむらひの入るべき所、雑色所などさまざまに物すゑなどして待ち給ふ。御聲の少將まで出で給ひていそぎ給ふ。唯今の御代のおぼえたぐのなき君なれば、もてはやさむとておとしも出で居て待ち給ふに、「まづこなたへ」とよばすれば、いくりもなくのぼりてぬ。火のいと明きに見れば、首よりはじめていと細く

ちひさくておもては白きものつけけさうじたるやうにて白う、鼻をいら、かしさし仰ぎて居たるを、人々あさましうてまもるに、この兵部の少輔に見なしてはえ念せず、「は」と笑ふ中にも藏人の少將ははなばなと物笑ひする人にて笑ひ給ふ事かぎりなし。「おもしろの駒なりけりや」と扇を叩きて笑ひて立ちぬ。殿上にも、ものより殊に、おもしろの駒はなれて來たりとて笑ふきりけり。かくれに居て、「こはいかなる事ぞ」ともいひやらず笑ふ。おといはあきれてえものも言はれず、人のはかりた替るめりとおぼすに、たゞ腹立ちに腹だれ給へど、いと人多く見るとおぼしきづめて、「こはいかで、かくおぼえなく物し給ふぞ。いとあやしく」とのたまへば、かの少將の教へしまゝにはれていひ居たれば、「いふかひなし」とて盃もさゝで入り給ひぬ。供の人々はかく笑はるゝも知らず、すゑたる所どもにつきて、喰ひのゝしりて座にゐなみたり。人一人もなく立ちぬれば、少輔はしたなくて例の方より入りぬ。北の方聞きて、さうらに物もおぼえすあきれ感ふ。おとゞは老のうへに、いみじき耻見つるかなと爪はじきをし、いりて居給へり。四の君は几帳の中にすゑたりけるに、ふと入り來て臥しにければ、え逃げず、御達はいとほしがりあへり。あかだちしたる人とても、あたかたきにもあらず、四の君のめのとなればいふべき方なし。誰も誰もなげきあかすに、四日よりはとまると言ひしと思ひて、むでにふせり。藏人の少將の君、「世に人こそ多かれ。かゝるおもしろの駒をばいかでひきよせ給ひしぞ。いといふかひなかりけるわざかな。かゝるものと出で入りせむこそわびしけれ。殿上の駒と名づけて、かしらもえさし出でぬしれもの

いかでより來にけむ。そなたたちの見はかりてし給へるをらむ」と笑ひ嘲哂し給へば、三の君、更に知らぬよしをいひていとほしがり歎き給ふ。かゝるひがものなれば世づかぬ文は書き出したるなりけりと人知れず思ひて、いみじくいとはし。巳午の時まで手も洗はせず粥もくはせで、ありとあるかぎりその御方にとて多かりし人々も、「誰かそのしれものにつかはれむ」とて出で來にしも出でこず。つくづくと臥したるに、四の君、見るに顔の見苦しう、鼻の穴よりは人通りぬべく、吹きいらゝぎて臥したるに、心づきなくあいぎやうなくなりて、やをら物するやうにて起きて出でたるを北の方待ちうけて、のたまふ事かぎりなし。「おいらかにはじめより、かうかうしたりと言はましかば忍びてもあらました、所あらはしをさへして、かくのしりて我も人もゆゝしき耻を見る事、たがなかうどしてまはじめしぞ。言へ」と責むれば、四の君、あさましういみじうなりて、たゞなきに泣く。我かゝるものあらむとも知らぬに、つぎつぎしく言ひければ、あらがふ方なし。藏人の少將、いかに思ひ給ふらむ、女の身は心憂きものにこそありけれと思ひて泣けどいふかひなし。少輔、いつとなく臥したりければ、おとゝ「いとほし。かれに手あらはせよ。物くれよ。かゝる者に捨てられぬといはむは又たぐひもなくいみじかるべし。すぐせやさしもありけむ。今は泣きのしるとも事のきよまらばこそあらぬ」とのたまへば、北の方、「あたらわが子を何のよしにてかざるものにくれては見む」と感ひ給へば、「あしき事奇のたまひそ。かゝるものに捨てられぬといはむはいかゝいみじかるべき」。北の方「こずならむときやさも思はむ。唯今はさもせまほしくぞあ

る」とのたへば、ひつじの時まで人も目見入れねば、せう苦しうて出でいにけり。夜さり來たるに、四の君泣きて更に出で給はねば、おとゝ腹だち給うて、「かくおぼえ給はむものをば何しかは忍びてよび寄せ給ひし。人の知りたるからに、とかくいふは親はらからふたかたに耻見せ給はむとや」と添ひ居てせめ給へば、いみじうわびしながら、なくなく出でぬ。せう、なき給ふをあやしとおほしけれと物も言はで臥しぬ。かく女もわびしと思ひわび、北の方もとりはなちてむと感ひ給へど、おとゝのかくのたまふに、つゝみて出で給ふ夜出で給はぬ夜ありけるに、宿世心うかりけることはいつしかつはりたまへば、「いかで子うませむとおもふ少將の子は出でこで、このしれものゝひろざる」とのたまふを、四の君ことわりにて、いかで死なむと思ふ。藏人の少將、思ひしもまゑるく、殿上の君達、「おもしろの駒はいかにこの頃年かへらば御ひきにて、あをうまに出し給へ。君とわれといづれか思ひました」とて笑ふに、ちりもつかじと思ふ心にいと苦しとおぼゆ。もとよりもいと思ふやうにはおぼえざりしかど、いみじういたはらるゝにかゝりてありつるを、これにことづけて捨てむと思ひなりて、やうやう來ぬ夜のみ多ければ、三の君物おぼす。かの二條殿には日々にあらまほしくなりまさる。男君のもてかしづき給ふ事限なし。「人はいくらも参らせ給へ。女房多かる所なむ心にく、華やかにも聞ゆる」とて、これかれにつけつゝ、ひきびきに参れば、二十餘人ばかりさむらふ。男君も女君も御心さまのどやかによくおはすれば、つかまつりよく、まゐりまかんでさうぞきかへつゝ、今めかしき事多かり。衛門を第一のものにま給へり。帯刀

おもしろの駒の事をめに語りければ、また心には、いみじうねたかりしたふすばかりの身にもがなと思ひしゑるしにもやとうれしけれど、「あないとほしや。北の方、いかにおぼすらむ。さいなまるゝひと多からむかし」といふ。かくてつごもりになりぬ。大將殿より、「少將の君の御さうぞく、今はとく亥給へ。こゝには内の御事にいとまなくなむ」とて、よきさぬ、糸、綾、わかね、すはう、くれなぬなどおほく奉り給へれば、もとよりよくし給へりける事なれば、いそがせ給ふ。さて少將の君につき奉りて馬の姿ようになりたるゐなかの人の徳ある絹五十參らせれば人々にさまざま賜はず。衛門、とりくばり亥おきつるにも目やすく見ゆ。この二條殿は北の方の御殿なり。むすめ二所、おほいきみは女御、太郎はこの少將、二郎は侍從にてわそびをのみし給ふ。三郎はわらはにてなむ殿上し給ふ。ちごにおはしけるよりこの少將を世になくなくし奉り給ふに、人に譽められ、みかどもよき人におぼしめしたればましていかならむ事をし給ふ。このたまふまじ。かの御事になれば、おとゑみまけ給へれば、殿に仕うまつる人雑色牛飼までこの少將殿になびき奉らぬはなし。かくて年かへりてつゝいたちの御さうぞく、色よりはじめていと清らに亥出でたまへれば、いとよしとおぼして着てありき給ふ。御母北の方見給ひて、「あなうつくし。いとようし給ふ人にこそ物し給ひけれ。内の御方などの御大事あらむには聞えつべかめり。針目などのいと思ふやうにあり」とほめ給ふ。司召に中將になり給ひぬ。三位し給うて、覺えまさり給ふべし。三の君の藏人の少將、かの中の君を聞え給ふを、「いとよき人ぞ。たゞ人と思さばこれを取り給へ。見るやうお

り」と常に申し給ふ。かの北の方、これをいみじう實に思ひて、これが事につけて我がめをてうせしぞかしと思ふに、いと捨てさせまほしきぞかし。中將かくいふを、見るやうぞあらむとて時々返りどせさせ給ふに、少將たのみをうけて、三の君をたゞかれにかれゆく。よしとほめしさうぞくもすぢちがひ、怪しげにし出づれば、いとゝかこつけて腹立ちて、しかけたるさぬども、着で、「こは何わざしたるぞ。いとよくぬひし人はいづちいしぞ」と腹立てば、三の君、「男につきていにしど」といらへ給へば、「なぞの男につくべきぞ。たゞに出でにけむ。こゝに宜しき者ありなむや」とのたまへば、三の君「さればことなる事なき人もなかるべきにこそあめれ、御心を見れば」といへば、「さはべり。おもしろの駒はべるなり。世にめでたき人も参りけりと心にく、思ふ」などまれまれ來てはねたましかけていぬれば、いみじう妬み歎けどかひなし。北の方、窪落なきをねたういみじう、いかでくやつがために、いまはしきゑるしみせむと惑ひ給ふ。我はさいはひありよき聲とるといひしかひなく、おもておこしに、思ひし君はたゞあくがれにあくがる。よき事とていそぎしたるは世の笑はれぐさなればやまひびとになりねづくなげく。むつきのつごもりによき日ありけるに、物まうでする人ぞよかなるとて、三四の君、北の方、車ひとつして忍びて清水にまうづ。をりしもこそあれ。三位中將殿の北の方、男君もまうで給ふに、中納言殿の車は、とくまうで給ひければさいだちゆく。しのびたりとて御せんもなく、かす、みたり。中將殿は男女のおはしければ御前いとおほくて、ささおひちらしていとまうで給ふ。ささなる車は尻ばやに追はれて人

々わびにたり。たいまつのすきかげに、人のあまた乗りたるにやあらむ、牛くるしげにてえのぼらねば、しりの車どもせかれて、とまりがちなれば雑色どもむつがる。中將殿人を呼びて、「誰が車ぞ」と問はずれば、「中納言殿の北の方の忍びてまうで給へる」といふに、嬉しく詣であひにけりとした心にはをかしく思して「をのことも先なる車とくやれといへ。さるまじうはかたはらにひきやらせよ」とのたまへば御せんの人々、「牛弱げに侍ればえさきにのぼり侍らじ。かたはらに引きやりてこの御車を過せ」といへば、中將、「牛弱くば、おもしろの駒にかけ給へ」とのたまふ聲、いとあいぎやうづきてよしあり。車にはの聞えて、「あなわびし。誰ならむ」とわびまどふ。猶さきに立て、やれば、中將殿の人々、「えひきやらぬ、なぞ」とてたぶてをなぐれば、中納言殿の人々腹立ちて、「事といへば、大將殿はらのやうに。中納言殿の御車ぞ、はやう打てかし」といふに、この御供の雑色ども「中納言殿にもおづる人あらむや」とてたぶてを雨の降るやうに車になげかけて踏破へかたやうにわつまりて押しやりつ。中將殿の御車どもはさきだてつ。御せんよりはじめて人いと多くてうちあふべくもあらねば片輪を堀におしつめられて物もいはであり。「なかなか無徳なるわざかな」といらへしたるをのこともいふ。乗りたる北の方をはじめて、ねたがりまどひて、「誰がまうで給ふぞ」と問へば「左大將殿の三位の中將殿のまうで給ふなり。唯今の第一の人にて、あしくいらへ給ふな」といふを聞きて、北の方、「何のあたにて、とにかくにはぢを見せ給ふらむ。この兵部の少輔がこともこれがきたるぞかし。老らかにいなといはましかば、さてもやみなまし。

よそ人も、かくかたきのやうなる人こそありけれ。何者ならむ」とて北の方手をもみ給ふ。いと深き堀にて、とみにえ引き上げで、とかくもてさわぐほどに輪少し折れぬ。「いみじきわざかな」とてになひあけて、繩もとめて来てゆひなどして、「かへらむやは」とてやうやうのぼる。中將殿の御車どもははし殿にひきたて、むごに立ち給へるに、や、久しうありて辛うじてよろばひ來ぬ。「いとたけかりつる輪折れにけりや」とて又わらふ。よき日にて、はし殿にひまもなければかくれのかたよりおりむと思ひて過ぎてゆく。中將、帶刀を呼びて、「この車のおりどころ見て告げよ。そこに居む」とのたまへば走りいきて見れば、知りたる法師をよびて、「いとくまらづるを、三位の中將とかいふもの、詣であひて、しかじかして車の輪折りにて今まで侍りつる。局ありや、疾くおりなむ。いとくるし」といへば、「いとふびんなる事かな。更に御堂のまなむかねて仰せられ侍りしかば取り置きてはべる。かの中將殿もいづこにさむらひ給はむまらむ。ろなうえせものに局襲ひひしがれむかし。あはれ、いとふびんなる夜なめりかし」といへば「さばとくおりなむ。人なき局とてとられなむ」といそげば、男一人「御局見おかむ」といひく。しりにつきて帶刀見おきて、走りかへりて、「からかうなむ申しつる。かれがいかにさきに」とておろす。御几帳さして男君はなれ給はず、かしづき給ふ事かぎりなし。中納言殿の北の方、「中將殿のおりぬさきに」とて皆歩みのぼるほどに、これはた儀式殊にそよそよはらはらと沓すりて、帶刀さきに立ちて道なる人々はらふ。車の人々さわぎ立ちわゆめば、道をふたぎて更にやらねば、はしたなくてまばしがいむれて立ちたる

を見て、「おとおひなる御物詣なめりや。常にさき立ち給はむとのみおばいためれども後れ給ふは」とのみ笑へば、誰も誰もいとねたしと思ふ。とみにもえ歩みよらず、からうじて局に歩みゆきぬ。法師わらはの一人ありけるは、かの局あるじのおはすると思ひて出でいぬ。皆入り給うて、中將、帶刀を喚びて、「かの人々笑はせよ」とさゝめき給ふをも知らず、我が局と頼みて来て入らむとするに、「あらはなり。中將殿おはします」といふにあきれて立てれば人々笑ふ。「いとわやしや。たしかに案内せさせてこそおりさせ給はましか。かくうはの空に御局あるまじかめるものを、いととはしきわざかな。仁王堂のおこなひせさせ給へ。それにぞ所ひろかなる」とそら知らず顔して、帶刀、我と知られむはいとはしくて、若うはやれる者に物をはやして言はせて笑ふにはしたなき事かぎりなし。歸らむにもはしたに、わびしいふはおろかし。暫し立てるに人さわがしくついたふしつゝくありきちがへは、わびしく歩みかへる心ちも唯思ひやるべし。いさほひまさりたらばいさかひかへしてもいぬべし。いとせむかたなし。足を空に車にかへり乗りて妬ういみじう思ふ事かぎりなし。「猶たゞに思はむ人かくはせじ。おとをやわしと思ふらむ。いかなる事にあたり給ふらむ」と集まりて嘆く中に、四の君、おもしろの駒いはれて、いとみじと思ふ。だいとこよびて、「からかうしてとられぬ。いみじき耻にこそわれ。又局ありぬべしや」といへば、だいとこ、「更に今はいづこのかわらむ。入り居たるをだに殿ばらの君達は推し居させ給ふに、遅くおりさせ給へるがさしてあしきなり。いかせむ、み車ながら明させ給ふべきなり。よろしき人ならばこそもしや

といひ侍らめ。只今の一人太政大臣もこの君にあへば音もせぬ君ぞや。御妹限りなくときめき給ふをも給へり。我がおほえばかりをおぼすらむ人うち合ふべくもわらず」などいひていぬればかひなし。おりなむと思ひて六人まで乗りたれければ、いとせばくてもみじろきもせず。落窪の部屋に籠り給へりしにもまさるべし。辛うじて明けぬ。「このあいぎやうなしの出でぬさきにとて歸りなむ」と急ぎ給へど、御車の輪ゆふほどに中將殿は御車に乗り給ひぬ。例のびんなかんめれば中納言殿の御車、後れむとて立てれば中將殿後にも思ひあはさむ、むげにゑるしなくばかひなしとやおぼしけむ、小舎人わらはを呼びて、「かの車の柄の方によりてこりぬやといひてこ」とのたまへば、たゞよりに寄りてかくいへば、「誰がのたまふぞ」といふに、「唯かの御車より」といふに、「さればよ、猶思ふ事ありてするにこそありけれ」とさゝめきわやしがりて、北の方の「まだし」と言ひ出したりければ、わらはは、「かくなむ」と申せば、「さがなむの、ねたういらへたなり。かくておはすとも知らじかし」と笑ひ給うて、「まだしにせぬ御身なれば、またや見給はむ」といはせれば、北の方、「いらへなせを。めざまし」と制せられてせさせ給はねば、かへりたまひぬ。「女君いと心憂く、けしからずはおはせしと、おと後聞き給はむ事もあり。かくなのたまひを」と制し給ひけれど、「これにはおとや乗る給へる」とのたまへば、「君達おはすれば同じ事」とのたまふを、「今うちかへし仕らまつらむに、み心はゆきなむ。思ひおさし事たがへじ」とのたまふ。北の方歸り給うて中納言に申し給ふ。「この大將殿の中將はおとをやわしくし給ふ」とあれば、「さもわらず。う

ちにも用ゐりてこそみゆれ」とのたまふ。あやしき事かな。しかじかこそありつれ。又なう妬くいみじき事こそなかりつれ。いづとていひおこせるせうそこよ。いかでこれにたふせむ」ともたえ給へば、中納言、「我は老いゑきて、おぼえもなくなりゆく。かの君は唯今大臣になりぬべき勢なればいとたふえがたし。さうこそわらめ、名だ、しう我がめこともとてさる恥を見せられけむ事よ」とて爪はじきを去て又歎き給ふ。かゝるほどにみなづきになりぬ。せめていひそ、のかして、藏人の少將を中のきみにあはし給へば、中納言聞知て、いらぬ死ぬばかり思ふ。「かくせむとて我をばすかしおさしにこそありけれ」とて、「いかでいきすだまにも入りにしがな」とて手がらみしのたまふ。二條殿には、思ひかしづき給ふを、いかにおぼすらむと思ひやりていとほしがる。三日の夜の御さう束をばものよくし給ふとて、この殿になむ奉り給うければ、女君、いそぎ染めさせて裁ち縫ひま給ふにもむかし思ひ出でられてあはれなれば、

「着る人のかはらぬ身には唐ころもたちはなれにしをりぞ忘れぬ」とぞいはれ給うける。いと清げに縫ひかさねて奉らせ給へば、大いとの、北の方、限なく悦び給ひ、中將もいと思ふやうにしつと思ひ給ふ。さて少將にあひて、「いとおそろしき人もたまへりとおぢ聞え給ひしかど、ま近くて聞えかたらはむのほいありてなむ、しのびてそ、のかし聞えたるを、わりなくとも、ゆめもとの人と縁一つにおぼすな」と聞え給へば、少將「あなゆ、し。よし聞え給へ。文をだに物し侍りてむや。御用意ありと承りしよりなむ、限なく頼み聞えし」との給う

て、げにかへりみし給ふべくもあらず。おぼえも女君もこよなくまさりたれば何しにかは通はむ。かゝるまゝに北の方いられ惑ひて、物もやすくはなむ歎きける。中將殿によきわかうども参り集まりたる、いたはり給ふと聞きて、かの中納言殿の少納言かく落窪の君とも知らで辨の君がひきにて参りたり。女君見給ふに少納言なれば、あはれにをかしうて、衛門を出して、「ことびとかとこそ思ひつれ。むかしは更に忘れずながら、つゝましき事のみ多くて、えかくなむとも物せでおぼつかなく思ひつるに、いとうれしくもあるかな。早うこなたに物し給へ」といはせられたれば、少納言あさましくなりて、扇さしかくしたりつるも打ち置きてぬざり出づる心ちもたがひて、「いかなる事ぞ。誰がのたまふぞ」といへば、「唯かくて侍ふにおぼし出でよ。その世には落窪の御かたと聞えしに、わたくしにもいとこそうれしけれ。むかし見奉りし人は一人もなくて、かはりたる心ちのし侍りつるに」といへば、少納言、「いであなうれしや。我が君のおはしますにこそありけれ。世にわすれず戀しくのみおぼえさせ給へるに、佛の導き給へるにこそありけれ」と喜びながら御まへに参りたり。見るに、かの部屋に居給へりしほどまづ思ひ出でらる。君はまづねびまざりていとめでたうて居給へば、いみじくさいはひおはしけるとおぼゆ。そよそよとさうぞき、かざみ着たる人いと若う清げなる十餘人はかり物語していとなまめかしげなり。「いと疾くおまへゆるされ給ふ人いかならむ。我等こそさもなかりしか」とうらやみあへれば、「さかし、こはさるべき人ぞかし」と笑ひ給ふさまもいとをかしげなり。かゝれば、「父母のたちも、かしづき給ひし御はらから

どもにはこよなくまさり給へるぞかし」と人の聞くほどはうれしきよしをいひて、人たちぬるほどには少納言、中納言殿の物語を委しくす。かの典樂がいらへし事かたれば衛門もいみじく笑ふ。「北の方、こたびの御聲取のはぢがましき事と腹立ち給ふめれど、すぐせにやおはしけむ、いつしかといふやうにはらみ給へれば、心地よげに見え給ひし北の方も、思ひまつはれてなむおはすめる。」四の君の御人はあやしき事かな。これには、いみじう譽め給ふめるものを、鼻こそ中にかしげにておはすところいはるめれ」とのたまへば、少納言、「嘲哢し聞えさせ給へるなり。御鼻なむ中にすぐれて見苦しうおはする。鼻うち仰ぎいらへきて、穴のおほきなることは左右にたい建て寝殿も造りつべく」などいへば、「いとみじき事かな。げにいかにいみじうおほえ給ふらむ」など語らひ給ふほどに、中將の君、うちよりいといたう酔ひて罷んで給へり。いとあからかに清げにておはす。「御あそびにめされてこれかれにしひられつるにいとこそ苦しかりつれ。笛つかうまつりて御ぞかづき侍る」とてもて坐したり。ゆるし色のいみじくかうばしきを、「君にかづけ奉らむ」とて女君にうちかづけ給へば、「何の祿ならむ」と笑ひ給ふ。少納言を見つけて、「こはかのわたりにて見えし人にはあらずや」「さなへり」「いかで参りつるぞ。交野の少將の艶になまめかしかりしことの残いかで聞き給ふならむ」とのたまへば、少納言、言ひし事忘すれて、何事ならむ、あやしと思ひてかしこまり居たり。「いとくるし。ふいたらむ」とて御帳の内に二所ながら入り給ひぬ。少納言、めでたくさよげにおはしける君かな、いみじく思ひ聞え給へるにこそあめれ、さいはひ

ある人はめでたきものなりけりとおもひ居たりける。さるほどに、右大臣にておはしける人の御むすめ「うちに奉らむと思へど我なからむ世などうしろめたなし。この三位の中將交らひの程などに試るに、物たのもしげありて人の後見あつべき心あり。これにおはせむ。わざとの人のむすめにはあらずや。はかばかしき人のめいもななめり。年ごろかく思ひて、心とめて見るに思ふやうなる人なり。只今なりもて出でなむ」とのたまひて、去りたるたよりありて、男君の御めのとのもとに、「かうかうなむ思ふ」といはせ給へれば、御めのと「かくなむ侍る。いとやむごとなくよき事にこそ侍るめれ」といへば、中將、「一人侍るほどならましければいとかしこき仰事ならましを、今はかくて通ふ所あるやうにはのめかし給へ」とて立ち給ひぬれば、御めのと思ふやう、この御めは父母もなきやうにて、君君にのみこそかゝり給ひためれば華やかにかしづかれ給はればよからむかしと思ひて、君ののたまふやうにはいはいで、「いと嬉しき事なり。今よき日して御文も取りて奉らむ」など言ひ遣りたりければ、この殿にはよしとおぼして、いそぎといそぐ。うつきにぞ取らむとおぼして、御調度、あるよりもいかめしう去かへて、若き人もとめけいめい去給ふ。「君は右大臣殿の御聲になり給へるなり。この殿には知り給へりや」といへば、衛門あさましと思ひて、「まださるけしきも聞えず。たしかなる事か」といへば、「まことにこのう月にとて急ぎ給ふものを」と告ぐる人のありければ、女君に、「かうかうこそ侍るなれ。さは去ろしめしたるにや」と申せば、まことにやあらむとあさましく思ひながら、「まださる事ものたまはず。たがいふぞ」とのたまへば、「かの殿

なる人のたしかに知るたよりありて、月をさへ定めて申して侍る」といへば、心の中には、この母北の方の強ひてのたまふにやあらむ、さやうなる人のおはしたちてのたまは、聞かではあらじと人ぞれずおぼして、心づきぬれど、つれなくてのたまひやするとまてどかけても言ひ出で給はず。女、心うしと思へるけしきや猶少し見えけむ。中將、「おぼする事やある。みけしきにこそさりげなれ。まろは世の人のやうに、思ふぞや忘れめ優や戀しやなどもきこえず、唯いかで物思はせ奉らじとなむはじめより思へど、かゝる御けしきのこのほど見ゆるはいとくるしく、心うしとやおぼさむとて、はじめもさいみじかりしあめにわりなくて参りしを、足じろの盗人とは興せられしぞかし。ほとほと縁おろかなりしやは。猶のたまへ」とのたまへば、女、「何事をか思はむ」「いざ、されど御けしきいとくるし。思ひこそへだて給へれ」とのたまへば、女、

「へだてける人のこゝろをみ熊野の浦のはまゆふいくへなるらむ」。男君「あなこゝろ。さればよな、おほぼす事ありけり。

真野の浦に生ふる濱ゆふ重ねなで一へに君を我ぞ思へる。心なりぞや物しきとも聞きたまはむ。猶の給へ」と聞え給へり。確ならぬことにもこそあれと思ひて物もいはずやみぬ。明けぬれは帯刀に衛門がいふ。「しかじかの事あるべかなるを、心うくもいはぬにこそ。つひにかくれあるべき事かは」といへば、「更にさること聞かず」といふ。「されど外の人さへ聞きて、人々の許にいとほしかりとむらふものを、知らぬやうはありなむや」といへば、「あやし

き事かな 君の御けしき今見む」といふ。中將殿に参りて見れば、春の庭を見出しておぼす。いとおもしろき梅のわりけるを折りて、「これ見給へ。よのつねになむ似ぬ。みけしきもこれになぐさみ給へ」といふ。女君、たゞかく聞えたまふ。

「うきふしにわひ見ることはなけれども人のこゝろの花はなほうし」とてなむ、花につけて返し給へれば、中將いとわはれにをかしうおぼす。猶我がことと、ろわりと聞きたるにやとくるしうて、立ちかへり、「さればよ。おほしうたがふ事こそありけれ。更に罪なしとなむ、唯今は思ふ給ふるを、まろが心のほどはなほ見給へ」とて、

「うきことに色はかはらぬ梅の花ちるばかりなるわらしかりけりと推しはかり給へ」とのたまへれば、女君、

「さそふなる風にちりなばうめの花われやうき身になりいでぬべきとのみぞわはれに」とあるを、いかなる事を聞きたるにかあらむと思ひ給へるほどに、御めのと出で来ていふやう、「かの右のおほいとの、事はの給ひしやうに物し侍りしに、わざとにやんごとなきめに物し給は、や。時々かよひものしたまへかし。殿にきこえて、四月となむ思ふといそがせ給ふなり。さる心し給へ」といへば、いと恥しげにゑみて、「なでふ、男のいなと思ふ事を強ひてするやうかはある。世の人にも似ず。世を見むにもあらぬばさのたまふ人もあらじ。かゝる事なまねび給ひそ。かたはなり。わざとのめにもあらざなりとはいかでか知り給ふ。いとさいふばかりなる人にもあらぬを」とのたまへば、めのと、「あなわりな。おとこもまかと思し

立て、急ぎ給ふものを、よし御覽せよ。やんごとなき人の強ひてのたまはむ事をいかにせさせ給はむ。何かは、君達は華やかに御めかたのさしそひてもてかしづき給ふこそ今めかしけれ。おもほす人ありともそれをばさる者にて御文など奉り給へ。かの君も思ふ時は上達部の娘にはあんなれど、落窪の君とつけられて中の劣りにてうちはめられてありけるものを、かくたぐひなくおぼしかしづくこそあやしけれ。人はかたへは父母居たちてかしづかる、こそ心憎けれ」といふ。中將おもてうち赤めて「ふるめかしき心なればにやあらむ。今めかしくこのもしき事もほしからず。おぼえもほしからず。父母具したらむをおぼえず。おちくほにもわれ、わがりくほにもわれ、わすれじと思ふをいかにせむ。人のいはむもことわり、そこにさへかくのたまふこそ心憂けれ。たゞ御爲に志なきにおぼすとも、今かれも仕うまつるやうありなむ」といふ。たのもしげなる御氣色にて立ち給ふめるを、帯刀つくづくと聞きて爪はじきをはたはたとして、「なでふかゝる事申し給ふ。君と申しながらも耻しげにおはすとは見奉らずや。唯今の御中は人はなちげにもあらぬものを、かのたまへるやうに志たがはず、華やかなる方にやり奉りて御徳見むとおぼしたるがあな心う。すこしよろしき人のさる心もたるやはある。なでふ御名だての落窪ぞ。老い僻み給ひにけり。これをかの御あたり聞きたまひて、いかゞおぼすべき。今よりかゝることのたまふな。君のおぼしたるといはづかしくいとほし。この御めのいたはりかうや得まほしくおはする。さらすとも惟成らが侍らば御身ひとつは仕うまつりてむ者を、かやうの心もたる人はいと罪ふかゝなり。又聞え

給はゞ惟成法師になりなむ。いといとほし。猶人の思ふ中さくるは大事にあらずや」といへば、めのと「いらへもせさせずいひなすかな。誰かは唯今さり給へ捨て給へと聞ゆる」、「いでさにはあらずや。めあはせ奉り給ふは」、「いで、あなかしがまし。取りいで、もさまわしからむか。なかおどろおどろしうはいふべからむ。かたへはめを思ふなめり」といとほしと思ひながら、口ふたげにいへば、帯刀笑ひて、「よしよし猶中そゝのかさむと思し召したり。たゞ惟成法師になり侍りなむ、御罪いといとほし。親の御うへをばいかで知らざらむ」とかみそりわきにはさみもたり。又言ひ出で給はむをりふとかきそらむ」と立てば、めのと一人子なりければかくいふをいみじと思ひて「口からいとゆゝしき事をも聞くかな。はさみたる剃刀、打ちや折らぬと試みよ」といへば、帯刀みそかに笑ふ。君は更に動じ給ふべきにもあらず、我が子のかく云ふと思ひて不用なるよし聞え奉らむと思ふ。中將の君は女君の例のやうならず思ひたるは此の事聞きたるなめりとおぼしぬ。二條におはして「御心のゆかぬ罪聞き明らめつることうれしけれ」。女君「何事ぞ」、「右のおほい殿の事なりけりな」とのたまへば、女君「そらごと」とてはゝゑみて居給へれば「物ぐるほし。みかどの御むすめ賜ふとも、よも得侍らじ。はじめも聞えしを、唯つらしと思はれ聞えじとなむ思へば、女の思ふ事は又人まうくるを歎くなれと聞きしかばそのすぢは絶えにたり。人々とかう聞ゆともよもあらじとおぼせ」とのたまへば、「さ思はむもまたくづれるにや」といへば、「思ひ聞ゆと聞えはこそわやしとの給はめ。唯つらさめを見せ奉らじと聞ゆれば志のありかは」など聞え給ふ。

帶刀衛門に逢ひて「更にな思ひ疑ひ給ひそ。此の世には御心愛かるべきにあらず」といふ。御めのといとはしくいはれて又もうち出です。かの殿にも、かくおぼし通ふ所ありけりと聞えておぼし絶えにけり。かく思ふやうにのどやかに思ひかはして住み給ふ程に孕み給ひにければましておろかならず。四月、大將殿の北の方、宮だち、さじきにて物見給ふに、中將の君に「二條に物見せ聞え給へ。わかく物し給ふ人は物見まほしく玄給ふものを、おのれも今まで對面せぬ心もとなきに、かゝるついでになむ思ふ」と聞え給へば中將いと嬉しと思ひ給ふけしきにて、「いかなるにか侍らむ。人のやうに物ゆかしくも侍らざめり。今そゝのかして參らせむ」と聞え給うて、二條におはして、「うへはかくのたまふぞかし」と聞え給へば、「心ちのなやましうて、わやしげになりたるも思ひ知られで、物見に出でたらば我が見えたらむにいとわりなからむ」とて物うげなれば、中將「誰か見む。うへ中の君こそは。それまるが見奉るも同じ事とて玄ひそゝのかし聞え給ふ。北の方の御文にも、

「なほわたり給へ。をかしき見ものも今は諸共になむ思ひ給ふる」

と聞え給へり。見給ふにつけても、かの石山まうでのをり、ひとりえり捨て給ひしも思ひ出でられて心うし。一條のおほぢにひはだのさじきといかめしうて、御まへに砂子しかせ、せんざいうゑさせ、ひさしう住み給ふべきやうにまうらひ給ふ。曉に渡り給ひぬ。衛門、小納言、一佛淨土に生れたるにやあらむとおぼゆ。この君にいさゝか心寄せあらむ人をばねたきものに言ひのゝしりたるを見ならひたるに、對の御方の人として、いたはり用意し給ふさまい

とめでたしと思ふ。めのといのおとゝ、さこそいひしが、出で来て、心しらび仕うまつりて、「いづれか惟成があるじの君」と問ひありきて若き人々に笑ける。母君は何かうとうとしく思ひ聞えむ。思ふべき中はむつまじくなりぬるなむ後もうしろやすく心やすき」とて、うへや中の君などおはする所に入れ奉り給ふ。見給ふに我が御むすめ姫宮にも劣らずをかしげにて見ゆ。紅の綾のうちおはせひとかさね、ふたあゐの織物の袷、うすものゝ濃き二藍の小袷着給ひて、耻かしと思ひ給へるけしきいとをかしうにはへり。姫宮はげにたゞの人ならず、わてにけだかくて十二ばかりにおはしませば、まだいとわかう、いはけなくをかしげなり。中の君は若き御心にをかしとおぼして、こまやかに語らひ聞え給ふ。物見はてぬれば御車よせて歸り給ふ。中將の君、やがて二條にとおぼせど、北の方、「さわがしうて思ふ事聞えずなりぬ。いざ給へ。ひとひふたひも心のどかに語らひ聞えむ。中將の物さわがしきやうに聞ゆるはなぞ。おのが聞えむことに隨ひ給へ。中將はいとくき心ある人ぞ。な思ひ給ひそ」とて笑ひ給ひてゐ給へり。御くるまよせれば、くちには宮、中の君、まりに嫁の君と我と乗り給ひて、つぎつぎに皆乗り給ひて、中將殿皆乗り給ひて引きつゞきて大將殿におはしぬ。寢殿の西の方を俄にしつらひておろし奉り給ひつ。御達の居どころには中將の住み給ひし西の對のつまをしかり。いみじくいたはり給ふ。大將殿もいみじく思ふ子の御ゆかりなれば御達にいたるまでもいたはり騒ぎ給ふ。よかいつかおはして、「いとなやましきほど過してのどやかに參らむ」とて歸り給ひぬ。まして對面し給ひて後はわはれなるものに思ひ聞え給へ

り。かくてたとしへなく思ひかしづき聞え給ふ。君の御心を今はと見給ひてければ中將の君に聞え給ふ。「今はいかで殿にしられ奉らむ。老い給へば夜中あかつきの事も知らぬを見奉らでや止みなむと心細くてなむ」と聞え給へば、中將殿も「さはおほすべけれども、なほ暫し念じてなまられ奉り給ひそ。知られて後はいとほしくて、え北の方懲せじ。今少しちよろせむと思ふ心あり。又まろも今少し人らしくなりて。中納言はよもとみには死に給はじ」とのみいひわたり給ふに、つゝみてのみ過し給ふに、はかなくて年かへりて、むつき十三日いとたひらかにをのこ子うみ給へれば、いと嬉しと覺して若き人の限りして、うしろめたしとて男君の御めのとむかへ給ひて、「うへなどの玄給ひけむやうによろづ仕うまつれ」とあづけ奉り給ふ。御湯どのなどゑゑたり。女君のうちとけ給へるを見て、うへなりけり、男君のあだわざし給はぬと思ふ。御うぶやしなひ我も我もと玄給へれど委しく書かず。思ひやるべし。唯まろがねをのみよろすにしたりける。遊びのゝしる。かくめでたさまに、衛門いかに北の方に知らせばやと思ふ。御めのとば少納言子うみわはせたりければせさせ給ふ。これをうつくしがかりかしづきものにし給ふ。つかさめしに引き超え中納言になり給ひぬ。藏人の少將、中將になり給ひぬ。大將殿はかけながら大臣になり給ひぬ。左のおとゞのたまふ「かく子のうまれたるに、おほぢちゝよろこびをする、かしこき子なり」と申し給ふ。今はましておほえ殊に華やさまさり給ふ。衛門の督さへかけ給ひつ。中將は宰相になり給ひぬ。中納言にはかく少將なりあがり給ふにつけても、三の君、北の方はなどかなど名残ありてだに時々涙

ぐましきを、いみじう妬かれどもかひあるべくもわらず。衛門の督、我が身の時になり給ふまゝに中納言殿を吹く風につけて、あなづり懲じ給ふ事しも多かれど同じ事のやうなれば、書かず。又の年の秋、また男君うつくしう産み給へれば、左のおほい殿の北の方、「御うぶやにうつくしうも、いそがしう取りつゞき給へるかな。この度はこゝにわづかり奉らむ」とて御めのと具して迎へ奉り給ふ。帯刀は左衛門の尉にて藏人す。かく思ふやうにてめでたくおはすれど中納言殿に知られ給はぬとを飽かずおぼす。中納言殿は老いばけ給へるうへに、物思のみをしてをさをさ出でまじらひ給ふこともなく、つくづくと人り居給へり。落窪の君の傳へ得給へる家三條なる所にていとをかしかりける、落窪の君になむ取らせたりけるを、「今は世になくなりたれば我こそ領せめ」とのたまへば、北の方、「さらなる事、世にいきたりともさばかりの家領すばかりにはあらざるべし。よきわごこち我らが住まむに、いと廣うよし」といひて二とせ出でくるさうの物を盡して築土より始めて新しくしつさまはして、ふる木ひとつまじらず、これを大事にて作らせ給ふ。「かくて今年の賀茂の祭、いとをかしからむ」といへば、衛門のかうの殿、さうざうしきに御達に見せむとて、「かねてより御車わたらしく調じ、人々のさう束どもたびてよろしうせよ」とのたまひていそぎて其の目になりて一條の大路にうちぐひうたせ給へれば、今はといへど、誰ばかりかは取らむとおぼしてのどかに出たたまふ。車五輛ばかり、おとな二十人、ふたつはわらは四人、しもづかひ四人乗りたり。男君具し給へれば、前驅四位五位いと多かり。弟の侍従なりしは今は少將、わらは子にお

はせしは兵衛の佐、諸共に見むと聞え給うければ皆おはしたりける。車どもさへそはりたれば、はたちあまりひきつゞきて皆次第供に立ちにけりと見おはするに、我かくひしたる所のむかひにふるめかしきびらうげのひとつ網代ひとつ立てり。御車立つるに、「男君の交らひもろとき人にはあらでしたしうたておはして見わたしの北南に立てよ」とのたまへば、「この向ひなる車少しひきやらせよ。御車たてさせむ」といふにしふねがりて聞かぬに、「誰が車ぞ」と問はせ給ふに、「源中納言殿」と申せば、君、「中納言のにもあれ、大納言にてもあれかばかり多かる所に、いかでこの打ぐひあると見ながらはたてつるぞ。少しひきやらせよ」とのたははすれば、雑色どもよりて車に手をかくれば、車の人出で来て、「などこのまうどぢちのかうする。いたうはやる雑色かな。かう蹴立つる我が殿も中納言におはしますなり。一條の大路も皆領じ給ふべきか。がうはふす」と笑ふ。西ひんがし齊院もおぢて、よぎぢしておはすべかなるは」と口あしきをのこまたいへば、「おなじものと殿をひとつ口にな言ひそ」などいひてえとみにひきやらねば、男君達の御車どもまだえたてず。君、御前の人、左衛門の藏人をめして「かれおこなひて少し遠くなせ」とのたまへば、近くよりてたゞひきにひきやらす。をのこともすくなくて、えふとひきとめめす。御前三四人ありけれどやうなし。このたびいさかひしつべかめり。「たゞ今の太政大臣の尻は蹴るとも、この殿の牛飼に手觸れてむや」といひて人の家の門に入りて、立てりて目をはつかに見出して見る。少しはやうおそろしきものに世に思はれ給へれど、ぢちの御心はいとなつかしう、のどかになむおはしける。」いと

無徳なるわざかな。今はいかゞいらふべき」などさだむるに、この典樂の助といふまれの翁ありければ、「いかでか心にまかせては引きやらせむ」といひて歩み出で、「今日の事はもはらなさけなくはせらるまじ。うちぐひうちたる方に立てたらばこそまゑ給はめ。むかひに立てたる車をかくするは何ぞ。後の事思ひてせよ。またせむ」とまれの者は、衛門の尉、典樂と見、一年ぶくやつにあはむと思ひしにうれしと思ふ。君も又典樂と見給ひて、「惟成それはいかにいはずぞ」とのたまへば、こゝろえて、はやる雑色どもに目をくはすれば走りよりて、「後の事思ひてせよと翁のいふよ。殿をばいかにま奉らむぞ」とて長扇をさしやりて、かうぶりをはたとうちおとしつ、もとよりはちりばかりにて額はげ入りて、つやつやと見ゆれば物見る人にゆすりて笑はる。翁袖をかづきて惑ひ入るに、さとよりて一足づゝ蹴る。「後の事いかでぞあるいかでぞある」と心のかぎりはしつ。おきな「死ぬべかなりといへ」と責むればいさおともせず。君、まなまなとそらせいしをま給ふ。いとみじげにふみふせて車にかけて引きやるに、をのことも見どりて、おぢなゝぎてえ車につかず。よそ人のやうに、さすがに添ひて、ほかのこうちひきもて来て道なかにうち捨ていぬる時にぞ、からうじてをのこともより来てなかえもたげたるけしきいとあやしげなり。北の方よりはじめて乗りたる人、「物も見じ。かへりなむ」、牛かけてうちはやめおひ惑ひて歸れば、いさかひしける程に一の車のとこしばりをふつふつと切りてければ、おぼぢ中にはたとひき墜しつ。下船の物見むとわなゝぎ騒き笑ふ事限りなし。車のをのことも足を空にてまどひた

ふれて、ふともえかゝげず。「出で給ふまじきにやありけむ。かくいみじき耻の限りを見ること」とつまはじきをしつゝ、惑ふ。乗りたる人の心ち唯思ひやっべし。皆泣きにけり。中にも北の方、むすめともはくちの方に乘せて、我はしりの方に乗りたりければ、こよなき横がみより引き落しけるになかえばかり出でたりける。からうじて這ひ乗りにつれど、眩つきぞこなひて、「をいを」と泣き給ふ。「いかなるもの、むくいにかゝる目見るらむ」と泣き給へば、御むすめども、「あなかまわなかま」とのたまふ。からうじて御前の人々たづね来て見るにかゝればいみじと思ひて「胸かきすゑよ」とおこなひ出でたるに皆人々、「いと無徳にある御車のぬしたちかぢ」と笑ふ。いと耻しうてさはやかにいぬはおもてを見かはして立てり。からうじてかいすゑてやるに、北の方、「あらあら」と惑ひ給へばねりつゝやる。からうじて殿におはしたり。御車寄せたれば、北の方人にかゝりて、唯時の間に泣き腫れており給ふを、「なぞなぞ」と驚き給へば、かうかうしかありつる山をまうす。中納言いみじとおぼしたる事限なし。「いみじき耻なり。我法師にありなむ」といたまへども、かつはいとはしうてえなり給はず。世の中にこの事をいひ笑ひのゝしれば、左のおとや聞き給ひて、「まことにや、しかじかはせし、女車を、なさけなくしたりといふあるは。そのうちにかの二條のものゝ聞きしはいかに思ひてせしぞ」とのたまへば、衛門の督、「なさけなしと人の言ふばかりの事も侍らず。うちぐひ立侍りし所に車立て侍りしを、をのことも、所こそ多かれ、こゝにしもといひ侍りしを、やがてたゞいひにいひわがりて車のとこしばかりをなむ切りて侍りける。さ

て人打ちけるは、それがなめげにいひたりしを、にくさに冠をなむうちおとして、男ども引きませ侍りし。おのづから少將兵衛の佐も見侍りき。いと人物しと言ふばかりの事も、侍らざりき」とのたまへば、「人のそしりな負ひを。さ思ふやうありき」とのたまふ。女君は、いとほしがりて歎き給へば衛門、「さばれ、いたくなおぼしそ。おとやのおはせばこそあらめ。典薬がうたれしはかのゑるしにや」といへば、女君、「いと胸きたなかりける。我が人にはあらで君の人になりぬ。それこそかくものはゑふねく思ひいへ」とのたまへば、「さば、衛門、あが君に仕うまつらむ。衛門が思ふ限の事をせさせ給へば、げにおまへよりも寶の君となむ思ひ奉る」といふ。あの北の方はいみじう病み苦しがる。御子ども集まりて願だてなどして止め奉りてけり。

「かゝる物おもひに添へて、三條いとめでたく造り立て、みなづきにわたりなむ。こゝにてかくいみじきめを見るは、こゝのあしきかと試みむ」とて御むすめども引き具していそぎ給ふ。衛門聞きつけて、男君の臥し給へるほどに申す。「三條殿はいとめでたく造り立て、皆ひきゐて渡り給ふべかなり。故うへのこゝ、失はで住み給へ、故大宮のいとをかしうて住み給ふ所なればいとあはれになむ覺ゆると、返す返す聞き置き給へるものを、かく目に見す見す領と給ふよ。いかで領せさせむ」といへば、男君「券はありや」とのたまへば、「いとたしかにてさむらふ」、「さてはいとよく言ひつべかなり。渡らむ日をたしかにあないして」との給へば、女君、「又いかなる事をかぞ出し給はむ。衛門こそけしからずなりにたれ。唯いひはやす

やうにいみじき御心をいふ」と恨み給へば、衛門「何かけしからず侍らむ。道理なき事に侍らばこそあらめ」といへば、男君「物な申しそ。こゝには心もおはせず。御爲あしき人はいとあはれなり」とのたまへば「我が身さいなまるゝかし」とて詫ひ給ふ。衛門「心得て、「いかゞは申すべき」とて立ちぬ。月立ちぬればさりげなくて衛門「いつか渡り給ふべき」とあ内せさせければ、この月の十九日と聞きて、「さなむ」と男君に申せば、「その日こゝにわたし奉らむ。さる心して若き人々今少しもとめ設けよ。かの中納言の許によろしきものはありきや。それもとかくもいはでよび取れ。後にねたがらせむ」とのたまへば、衛門「いとよく侍りなむ」といふ。かくのたまふをいと嬉しと思ふ心のまるければ、男君も我が心に似て聞かせじとさゝめきありき給ふ。女君に申し給ふ。「人のいとよき所えさせたるを、この十九日にわたらむ。人々のさう束し給へ。こゝもすりせさせむ。とくわたりなむ。急ぎ給へ」とて、くれなゐの絹、茜染草ども出し給へれば、ひとへにかく構へ給ふことも知り給はでいそがせ給ふ。衛門たよりをつくり出で、かの中納言殿に清げなりと見し人々よばす。うへの御方に侍従の君とていと清げなる一の人におぼえたる。三の君の御方に、すけの君、大夫のおもと、まもづかへにまろやとていと清げなるものゝよしありてと見おきしを、とかまへかくかまへ人を遣りつ、「かうかうして唯今の時の所なる、人々いたはり給ふ事かぎりなし」といはせられたれば、若きものどもにて、おのが君のまひ惑ひ給へるは口惜う思ひて、いづちかいかましと思ひ急ぐ程に、かういとよげにいへば、唯今の世にのゝしる殿をかしなど思ひて、うけひて参らむと

急ぎつゝ里にいつ。落窪の君とはゆめ知らず、又一所に参りつどはむこともゆめ知らず、皆おのおのかくしきさめきなむしける。人々して車つかはして片はしより迎へさせ給ふに皆まゐる。いみじう人多かる殿にて、けさうじたる事限なし。ひとつ所に参りぬ。同じ所におろしたればかたみに見つけて、いとをかしと思ひたりけるに、聞きしもまろく清げなる若き人廿人ばかりしらはりのひとへがさね、ふたあゐの裳、濃き袴着て五六人、赤らかなる袴にて綾の單衣襲引きかけたる薄色のこめの裳、あやなど同じやうにさうぞきつゝ、かいむれかいむれて出で来て、人々の見るにわびぬべし。女君はあつげに惱しうて見給はねば、男君「我見むとて出でおはす。いとつゝましうて、うつぶしつゝ見むひたり。いと濃き紅の御袴、白きすいしの御ひとへ、うすものゝなほしを着て出で居給へるさま、いみじうなまめかしう清げにおはす。男君思ふやうにおはすめりと見あへり。殿ことごとにうち見給うて、「けしうはわらぬ者どもなめるよ。衛門が導きなれば足らはぬ事わりとも言ふべきにあらす」とうちのたまへば「いとおぼえつよしや」と笑ひ給ふ。「足らはぬ事わりとは御覽じしらぬにこそ」と御まへにさむらひつるほどにえかき撫で、も御覽せさせぬなり。かやうのことはかゝればこそとて出でくる人を見れば阿漕なり。「こはいかに、この殿にはかくめでたきおぼえにてさむらひ給ひけるぞ」とおどろきぬ。衛門、今もし見つくるやうにて、「あやしう、見奉りし心地するかな」といふに、「こゝにも同じ心に見奉るにうれしうも」といふ。「年ごろは對面なくてなりもてゆくも、あはれに思ひ給へつるを」とて昔物語などするほどに、又いと白う、美く

しげなる君の三つばかりなるを肩にうちかけて、「衛門の君参り給へ」とて、出で来るを見れば少納言なり。あやしう昔心地して、あはれなる御聲どもかな」とていひ居たる事どもは書かじ。うるさし。かたみに嬉しきよしを言ひける。昔見し人々用意ことなればたよりありて、よしと思ひあへり。かくてあすわたるべしとて、中納言殿には御方々の物運びすだれかけしつらふ。人々の物さへはこぶと聞き給ひて、衛門の督の殿のけいしなる但馬の守、下野の守、まどころのべたうなる衛門の佐、雑色などのさらさらしきを召して、「しかじかある所の三條なる家領するを渡らむと思ふほどに、源中納言、いかにする事にかあらむ、そこを領して造ると聞きつるを、さりとせうそとしてあるやう言ひてむと待ちて物もいはざりつるにあすわたるとなむ聞く。まかりていかなる事ぞ、こゝに知るべき所を音もせで渡るはいかなることぞ、そこに物運びたらむもなとらせそ。こゝにもあすわたらむと思ふ。をのことども雑色所さだめて只今ゐて居よ」とのたまへば、皆うけたまはりて急ぎていきぬ、げに見れば、造りさまいとあらまほしう、砂子敷かせ、すだれかけさせなどす。いとまうにひきつれて來ぬ。人々驚きて、「いづこの人ぞ」といへば、「衛門のかんの殿のけいしさまどもなり。この殿は殿のしろしめすべき所なるを、いかにして御消をこをだにせで渡り給ふべかなるぞ。暫しな渡しそと仰せらるれば」とて入り立ちて、「こゝは雑色所ぞ」など定めて、「こゝもとはとかくせよ」などおこなひ直さす。人々あきれ惑ひて殿に走りて、「かうかうの事はべる。けいしさまじひきゐてまうで来て、さらにはげすども出入せさせ侍らず。殿もあすなむわたり給

ふべきとて雑色所、まん所など定めて所々まなほさせ侍るなり」など申すに、中納言殿老心地に惑ひ給ひぬ。「いとみじきとかな。かの家には我が手にけんこそなけれども我が子の家なり。我ならでは誰領せむ。その子世にありと聞き侍らばこそそれがするならむとも思はぬ。いかなる事にかあらむ。うちあひいさかふべき事にもあらす。父おとゝに申さむ」とて、いでたちもま給はず、まぬこゝちにさう東もまわへず、急ぎ惑ひて左のおほいとのにまうで給うて、「殿に御けしき給はるべき事ありてなむ参りたる」と聞き給へば、おとゝ對面し給ひて、「何事にか」と申し給へば、「年ごろ我が領し侍る所三條に侍るを、この月ごろつくろはせ侍りて、あすまかり渡らむとてさむらひども物はこばせ侍るほどに、衛門のかんの殿のけいしと申す者まうで来て、殿のまろしめすべき所なり、いかで御せうをこもせでは渡るべき、殿もあすなむ渡らせ給ふべきとてまうで來居てまもびとも通はし侍らず。妨ぐる事の侍れば驚きてなむ。この家は更に外に人まゐるべからずとなむ思ひ侍る。いかなる事にか侍らむ。けんやさまむらむ」といたう歎きたるさまにて申し給へばおとゝ、「更に知らぬ事なればともかくも聞え申すべからず。のたまふやうにては衛門の督の無道なるやうなれど、さうじめより知らぬ事なれば、こゝにはいかゞ聞えむ」といとも空に心に入らぬけしきにていらへ給へば、中納言また聞ゆべきかたなくていいたう歎きながら立ち給ひぬ。「殿に申しつれば、まかじかなむのたまふ。いかなるべき事にか。こゝらの年ごろひとへに造りて人笑は

れにやならむとすらしむ」と歎き給ふとは世の常なり。衛門の督、うちより殿にまかで給へれば、「中納言のいましてしかじかの事のためはまことか。いかなる事ぞ」と申し給へば、「しかまことにはべり。こゝに年ごろわたり侍らむとてさるべき所すりせさせ侍らむとて人遣したりしに、俄に彼の中納言渡らむとなむし侍ると聞えつればあやしさに誠かと聞かせにそのこともつかはして案内させ侍るなり」と聞え給へば、「かの中納言は我より外に領すべき人なき家をかくする事はいと非道なる事とこそたまふなりしか。そこにはいつより領し給ふぞ。券やある。誰かとらせしぞ」とのたまへば、「かしこに侍る人の家にはべり。母方のおほぢなりける宮の家なりける。傳はりて侍るを、かの中納言はばけて妻にのみ随ひて、なまげなくものしき心のみ侍りしかば、にくさにこの家も取らせじとなむ。券いとたしかに侍り。券しらでつくりて我より外にしるべき人あらじと侍るこそをこがましけれ」とのたまへば、「更にいふべき事にもあらざなり。早くそのけん見せ給へ。いとなげかしと思ひ給へり」と聞え給へば、「今見せ侍らむ」とて二條におはしてわすの御前の人々めす。又いだし車は人々にあてさせ給ふ。中納言一夜歎きあわして、まだつとめて太郎越前守を殿にまゐらす。「自ら参らむとするを、罷り歸りしまゝにみだりごちあしくてなむ。御けしき賜はりし事はいかゞ侍らむ」と申し給へば、「衛門の督にすなはちいひしかば、しがじかなむ言ふめりしを、まだ委しくはあの督にあひて問へ。こゝには知らぬ事なれば定めがたくなむ。さやうにけんなくて領し給ふがをなるやうになむ」と言ひ出し給へれば、衛門の督殿に参りたれ

ば、御なほしばかり着給ひてすだれのもとに居給へれば越前の守はかしこまりて居たり。女君の御まへなれば見出し給うてあはれとおほす。衛門、少納言「いかなりしをり、おそろしと思ひて御心あやまたじと思ひけむ」と笑ふ。越前の守「殿に参りて御けしき賜はりつれば、しがじかなむ仰せられつる。けんはまことにや候ふらむ。それを委しく承り定めむ。又年頃殿まろしめすとかけてもうけたまはらましかば、かくまで誰も誰も仰せられ聞えさせましや。この家造り侍る事二年ばかりなり。その程までは音なく侍りて、かく妨げさせ給へるはいと安からずなむ、歎き申しさふらふ」と申せば、「年ごろは券のこゝにあれば、家といふものは券もたる人より外にしる人なきと聞きしかば、おたしう思ひて我が家とも名のらでありつるは、からし給ふ時こそかゝる事ありけりともいはめ。さてもさても券も給へるか」といとなまめかしういらへていと白う美しくしげなる子の三つばかりなるを、膝にすゑてうつくしがり居給へれば、大事と思ひて申すに、いと腹だしくわびしけれと思ひ静めて、「この家のけん失ひ侍りて尋ね申し侍れどいまだ聞き出で侍らで、もしそれを人の賣りて侍るにやあらむ。唯その疑のみ侍る。さてこの家れうすべき人なむ侍らぬ」と申せば、「券を盗みて賣りたるを買ひたるにもあらず。道理に任せておのれより外に領すべき人なむなきとおぼゆれば、さるにやうこそあらめと思ひ止み給へかし。中納言には今しめやかに券もみづから見せ奉らむと申し給へ」とて子抱きて入り給ひぬれば、越前の守いふかひなくて痛く歎きて立ちぬ。女君つくづくと聞き給ひて、「このわたらむとし給ふ所は三條にこそありけれ。又まろと

聞えむものを年ごろ造りて渡らむとし給ふらむに、妨げたらむはいかにおぼすらむ。親の歎き給ふらむは罪いとおそろしく仕うまつる人だにこそあれ。かくし給ふ事を妨げ給へば歎かせ奉るが心憂き事、衛門がする事ぞ」といとはしとおぼしたるけしきにてのたまへば、「天の下の親にて、おのが家押し取らるゝ人やある。なげき給はむ罪は後にもよく仕うまつり直し給へ。渡らじとおぼすとも、さるゝごだち具してわたりなむ。かくいひたちてとまりたりむはいとをこならむ。かの家奉らむとおぼさば、しられ奉りて後に奉り給へ」と申し給へば、いふかひなくて又も聞え給はず。越前の守は歸り來て殿に申す。「更に今は不用に取られ奉りぬるを耻にてやみぬばかりなり。大事と思ひて申すに事にもあらず思しめして、いと美くしげなる子を膝にすゑてうつくしがりて、申す事耳にも聞き入れ給はず、はてはかういひて入り給ひぬる。左大臣殿は、我は知らず、衛門の督が券もたる方こそ強くはすなれとの給ふに更にかひなし。なかはけんをば尋ね取り給はずなりにし。こよひ渡り給はむとていだし車の事、御供の人々の事など整へさわぎつる」などいへば、更に物もおぼえずいみじと思ひ給へり。「落窪の君の母の死ぬとてかの子に取らせ置きしを、我も忘れて乞ひ取らざりし程にかくうせにたるぞ。何か、それが賣りたるを買ひてかくしたるぞ。いみじう人笑はれなるわざかな。おはやけにまうすとも、この殿の世なれば誰かは定めむとする。多くの物をつくして造りけるがいみじき事、時にあひ給はず物わしき人いみじきものなりけり」と空をあふぎてはれて居給へり。衛門のかうの殿には渡り給はむとて女房にさうぞく一具づゝして賜

へば、ほどなく今めかしう嬉しと思ひけり。中納言殿には物をだに運びかへしに人やり給へど、「さらにいれだにいれず」などいへば、北の方手をうちねたがる。「いかばかりのあたかたきにて衛門の督あれば我が身も心も惑はすらむ」と惑ふ。越前の守、「今はかひなし。物だに運び返さむ」と申せば、「早うそれは取られよ」と鼻高らかにのたまへど、人々さらに入れねば、いさかふべき事にしおらねばたけき事とはあつまりてのろふ。いぬの時ばかりにわたり給ふ。車とをして儀式めでたし。おりて見給へば、げに寢殿は皆しつらひたり。屏風几帳立て皆疊しきたり。見給ふに、げにいかに思ふらむといとはしけれど、北の方妬しと思ひたればなりけり。女君は、おとゞのおぼすらむ事を推し量り給ふに物の興もなくいとほしき事をおもはず。男君は運びたらむ物失ふな。確かに返さむ」とのたまふ。かくめでたくのゝしるを中納言殿には渡りぬやと見せ給ふに、「かうかうめでたくして渡り給ひぬ」と語り申せば、「今は力なし」と集まりて歎くをも知らず遊びのゝしる。衛門かく玄給ふを思ふやうにめでたしと男君を思ふ。つとめて越前の守「運び侍りし物ども運びかへし侍らむ」とて参りたれば、「一二日、この物は外へは持ていくまじ。今けふあす過して取りに物せよ。いとたしかにありや」とのたまひて、ことに聞き入れねば思ひ惑ふ事かぎりなし。三日がほど遊びのゝしりていといまめかしうをかし。四日のつとめて越前の守参りて「今日はたたまはらむ。人々の櫛のはこなどやうの物籠めていとあしくなむ」とわび申せば、いとをかしがりて皆目録して返し給ふ。男君、「かのむかしの古ぶたの鏡の箱はありや。これに添へてかへし給へかし。北の方、寶

と思ひためりき」とのたまへば、衛門興じ喜びて、「衛門が許に侍り」とて取り出でたれば、見ざりし人々見て、「あないみじや」とてわらふ。「いとたゞならむよりは」とて、「しるしばかりに物書いつけ給へ」と申し給へば、女君、「いでさや、いとほしきついでにしら奉らむこそ苦しき」とのたまへば、「猶々」と申し給へば、鏡のしきをおしかへして書き給ふ。

「あけくれはうきこと見えしますか、みさすがに影を戀しかりける」と書き給へり。色紙ひとかさねに包みて、物の枝につけて、「越前の守呼びて取らせよ」とて衛門に取らせて、越前の守よびて「いかにあやしう覺すらむと思へど、御せうそこもせで渡り給ふと聞きしかばあやしうてなむ。このいとほしかりしかしこまりもみづから聞え侍らむ。このけんもたしかに御覽せさせ聞ゆべき事も侍り。今日あすのほどに必立ち寄せ給へとおとゝに聞えさせ給へ。そこたちも只今びんなきやうに思ふらむ。つひにこゝにぞいひ語らはむ」とのたまふみけしきいとよし。越前の守怪しと思ふ。「おとゝ必立ちよらせ給へ。やがて御供にそこに物し給へ」とのたまへば、うけたまはりて歩み出づるに、衛門、妻戸のもとにて、「こゝに立ち寄り給へ」といはすればいとおぼえなくあやしと思ひながらよりたるに、袖口いと清げにさし出して、「これ北の方に奉らせ給へ。昔いとやんどとなきものにおぼしたりしものなれば、今まで失はせ給はざりけるはこの御物どもの返り参らにつけておぼし出させ給ひてなむ」といへば、いとあやしと思ひて、「誰が御せうそとか物し侍らむ」「唯おのづから思ひ出で聞え給ひてむ。わたくしにも聲ばかりは聞き給はずや」といふ。あこぎなりけり。この殿に

こそありけれと思ひて、「ふるさ都をば忘れ給ひけるなめれば、何かは知りげにも聞え侍らむ。まめやかにこの殿に参りて侍らむ時には知る人に尋ね聞えむ」といふに、「さてもまだもさむらふは」とてさし出でたり。少納言なり。あやしうも集まゝたるかなと思ふに又奥の方に、「目ならふといふなれば、まろは驚かし聞えじ」といふ聲を聞けば、中の君の御もとにし侍従の君なり。越前の守の思ひて時々住みける。かくのみかしこの人の聲にていひかくれば、心地もあわて、いかなる事ならむあやしうてえいらへやらす。衛門、「三郎君と聞えしは今は何とてかおはすらむ。御かうむりや玄給へる」「しかじか、このはるなむ大夫といふめ」といふれば、「必まるり給へ。對面に聞ゆべき事なむ積りてと聞え給へ」といへば、「いと易き事」とて、この包みたる物ゆかしうて急ぎていぬ。道々、かの殿のさま思ふにいとあやしく、落窪の君、この御めにてあるにやあらむ。阿漕といひしかけしきいとよげなり。又あつらへたるやうにかしこの人の集まりたるは、思ふによそ人のあらむよりはさりととも、いと嬉しきは北の方の懲せしさまも國にのみありて知らぬなりけり。中納言殿に來ておとゝに、「かうかうなむのたまひつる」とてこの包める物を北の方に奉れば、「あやしうおぼえなき」とて、ひきわけて見るにおのが箱なり。落窪の君に取らせしにこそあめれと見るに、いかなる事ならむと思ふに、きもどろさわぐに、まして底に書けるものを見るに、むげに落窪の君の手なれば目も口もはたかりぬ。年ごろいみじき耻をのみ見せつるはくやつとするなりけりと思ふに、ねたういみじき事二つなしとは世の常なり。ひととの、内ゆすりみちての、